

からう、生命に別條がないと極りや、大威張りの江戸兒、
「吻々々々、」

「眞個に度胸を据ゑました、否、大したことをやありません。何か化けて出る因縁があるに相違ないと思ひましたからね、思ひ切つて聞いて試ようと、さあ、事が極ると日の暮れるのが待遠いやう。」

四十九

「婦人二人は、又日が暮れると泊りに來ました、いゝ工合に青緋を少々握りましたもんですから、宵の内に二合半呷りつけて、寢床に潛り込んで待つてると、案の定、刻限も違へず、兩戸カタリ。ちらりと姿が見えたが勝負で、私あ目を瞑つて、江戸兒だ、お前さん何の用だ、と言ひました。すると莞爾笑つたから凄うございませ。少し俯向いて恚う胸の處に袖を重ねて居た、其をね、兩方へ開いたでせう。」

突然、大蛇の天頭でも顯れるかと思ふと、然うぢやアありません。之を預けたさに、と小さな聲で謂ひましたね。青い襦袢の中から、細い手を差延べたから、何か知らんが大變だ、幽靈の押着ものなんぞ恐しい、突退けようと向うへ突出した此の手ツ首の細い處へ、」

愛吉は指の環で左の手首を握りながら、

「一本きらくする銀の簪、脚を割つて突さすやうに挟んだんです。確に、可うござんすか。確に、といふ口の下、ぐいぐいと其の簪の脚が緊りましてね、此處が不思議ですよ、其の痛いことと謂つたら。思はずキヤツといふと、愛吉さんくと呼びますわ、次の室で二人の聲がするから、氣が着きますと、私は床の上へ坐り直つて、現にもお嬢さん、恚うやつて左の手ツ首を壓へて居たんです。」

恐しいことには、夜があけても何だか脈處が冷たいやうで、つきく痛みましたから堪りません。

打明けては言ひませんでしたけれども、二晩續けて私が壓されたのを聞いたんで、婦人二人は最う厭だとかぶりを振ります。

有耶無耶の内は、夢だらう位で私も我慢をしましたけれども、然う何うも手首へ極印を打たれちやあ辛抱がなりません。迎も次の晩からは其の家へは寢られませんが、形なしになりましたが、私あはじめです、いまだに不思議に思ひますがね。」

「其ツ切逢はなかつたの。」

「え、最う木賃の方へ逃げました。」

「惜しいことをしたねえ、何かお前に頼みごとでもあつたんぢやあないか、其でなくつても又來た時を待つて居て、分を聞けば可かつたのにね。」

と身に染みて、お夏は殘惜しさうな風情であつた。

「今で見ますと、私も惜しいことをしたと思ひます、ですがお嬢さん、其の場に臨んで御覽なさい、其の氣味の悪いことといつちやあ、口で謂ふやうなものではないんですから。」

お夏は之を聞取らなかつたほど、何か考へて居たが、

「幾歳、」

「十八九で、」

「一昨年のことだつて、」

「一昨年でございますよ。」

「一昨年十八九、私と同一年ぐらゐるだねえ？」

「飛んだことを、譬になすつちやあ不可ません。」と驚いて言ふ。

お夏は自若として、

「而して簪を預けたいといつたつて、十八九で綺麗な女で、可愛らしいお化だこと。眞個に可愛いちやあないかねえ、」とものおもひ、もの思ふ様子で謂ひながら、つむりへ手を遣ると、さして

居た銀脚の簪を抜いて取つた。

「愛吉、一寸お見せな、手を。」

「へい、」

「こんな風に預けたの。」と、其まゝ手首へはさんだが、能くは入らないから耳の處へ力を入れた、銀は柔かく二ツに分れて、愛吉の手は帳場格子の上に結びつけられたやうになつたが、雙方無言で、やがて愛吉はぶる／＼と震へた。

五十

「取つてお置き、其をお前に上げませう。」とお夏は事もなげに打微笑み、

「其であのお化の念が届くんだわ。」とあつけに取られた愛吉の顔を然も嬉しさうに眺めたが、不意に色をかへて、お夏は一寸簪を抜いた髮に、手を觸れて見て屹とした。此時の容貌は、過般深川の橋の上で、女中に取巻かれて火を避けたのを愛吉が見た其の如く、殆ど侵すべからざる、威嚴のあるものであつた。然もあきらかに一片の懸念の俤は、美しい眉宇の間にあらはれたのである。お夏は神に誓つて、戯にも恠る舉動をすべき身ではないのであつた。

然るに愛吉が状も又た極めて案外、

其の手も引かず渠は色を正して、稍開き直つたといふ體で、

「お嬢様、それぢやあ之をお記念に頂きますせう。」

「え。」

「お嬢さん、私は何とも申し上げやうはございません。」と片手を其へ、頭をさげたが、聲の調子も變つて居る。

「私もお嬢さん、あなたに取つちやあ敵でございます。へい、飛でもない、謂はば其の獅子身中の蟲と謂ふんで、こんな分らずやで何にも存じませんもんですから、愛吉々々とおつしやつて下さるのを、可い事にして、癩癩は引請けましたなんぞと、汝が勝手な熱を吹いちやあ、一寸々々お出入をするもんですから、こんな役雜ものと口をお利きなさりますばツかりで、お嬢様、あなたに人が後指を指すんです。知らない内はから呑氣で、一向澄したものでをりましたが、人から氣をつけられて身體を持つて行き處のないほど、驚いたんでございますよ。」

まあ何の位、此方様に害をなすか、こん畜生、數が知れねえんで、へい。實に相濟みません、何てつておわびのいたしやうもないのでございます。

今晚も實は一言申上げて、お暇乞をしませうと、其事で上りましたが、いつに變らず愛吉々々とおつしやるので、つい言ひ出しかねて居りました。

唐突にこんな事を藪から棒、氣が違つたかとお思ひなさいませうが、お嬢さん。

あなたも何にも御存じなし、私も些とも知らないで居ります内に、あなたの御縁談が一ツ打破れたんでございまして。

之が並一通のことぢやありませんや。對手が又た其の邊に對手欲しやでうろついている出來星の咨な野郎ぢやありません、汝が身體さへ打棄つてる私ですもの、大臣だつて、大將だつて、大金持だつて何だつて、絲瓜とも思はねえのに、之ばかりは大の最員で、心底から惚れて居ます山の井の若先生。」

「愛吉！」

「お待ちなさい、其だ、分つてます。京橋から築地、此の日本橋、神田、下谷、一度見た親は恁ういふ人と思はねえものはありますまい。今度あなたの代りに極りました縁の先方の、山河内の奥方てえ、彼の癩の大年増なんぞ、斷食をしないばかりに、女を押つけようといつて騒いだと申すんで。」

其の若先生が、お嬢さん、あなたを望みで、影日向心を入れて居たといふのに、何と私が着絡つてるばかりに、控へたといふぢやありませんか。」

「愛吉！」

「済みません、分つてます、分つてます。然も恚ういふ事をはじめて聞きましたのが、先達てお嬢さんが口惜がつておいでなすつた、根岸の鴨川一件だ。鼻元思案のお前ばしりに私が暴れ込で、ひっくりかへつて可い心持で飲みました晩ですぜ。其と分つてからはお顔を見るにも御不便で、上りかねましたから、こんなに御不沙汰にもなりましたが、最う一度問直さうと、山の井先生が其時は、自分で鴨川の許へ行つたツていふんです。其が頼まれもせずいひつけもなさらない、お嬢さんの名を出して、私が暴れて歸つたあとだつた、といふぢやありませんか。」

口惜いのは、お嬢さんに團扇で煽がせた時がと言ふと、彼の鴨川めが肝入で、山河内の娘に見合をさせるのに、先生を呼んだ日だと謂ひますわ。敵だもの、おまけに、私が歸つたあとで、あなたの相談が何うなります。其上、まだ、そんな事ぢやあない、といひますのは彼の若先生は、お嬢さん、あなたが誰にもおつしやらないで、心で思つていらつしやる、……」

「愛吉！」

「否、分つてます。誰も知りませんが、之を、いつて聞かしたのは、竹永丹平といふ、新聞社の探訪員。」

式部小路

序

日本橋のそれによ習へる、
源氏の著者に擬へたる、
近き頃音羽青柳の横町を、
式部小路となむいへりける。
名をなつかしき、尋ねし人、
妾宅と覺しきに、世にも
婀娜なる娘の、絲竹の
浮きたるふしなく、情も戀も
江戸紫や、色香いろはの
手習して、小机に打凭れ、
紅筆を含める状を、垣間
見てこそ領きけれ。

明治三十九年丙午十二月

鏡花小史

一

鳥差が通る。馬士が通る。些とばかり前に、近頃は餘り江戸向では見掛けない、よか／＼館屋が、衝と足早に行き過ぎた。其のあとへ、學校がへりの女學生が一人、これは雜司ヶ谷の方から來て、巢鴨。

恚う、途絶え／＼、ちらほら此の處を往來ふ姿は、恰も様々の形した、切れ／＼の雲が、動いて、其の面を渡るに齊しい。秋も半ば過ぎの、日もやつ下りの梯橋は、小石川の落葉の中に、月が懸かつた風情である。

空の蒼々としたのが、四邊の樹立のまばらなのに透いて、瑠璃色の朝顔の、梢に擲らんで朝から咲き残つた趣に見ゆるさへ、何うやら澄み切つた夜のやう。

しかし、恰好をいつたら、鳥が宿つたのと、鶺鴒の渡したのと、全然似て居ないのはいふまでもない。又眞の月と、年紀のころを較べたら、然う、千年も二千年も三千年も少からう。

路小部式

但我々に取つては、此れを渡初めした最年長者より、もつと老朽ちた橋であるから、つい此の

居まはりの、砂利場の砂利を積んで、荷車など重いのが通る時は、埃やら、砂やら、潑と立って、
がたくと揺れて曇る。が、それは大空を視むる目に、雲はじつとして居て、月が動くやうに見
えると一般、橋の俤はうつろはず、あとはすぐに拭つたやうな空の中、洗つた姿となるので
ある。

丁ど今人の形のいろ／＼の雲が、はら／＼と此の月の前を通り去つた折からである。

橋の中央に、漆の色の新しい、黒塗の艶やかな、吾妻下駄を軽く留めて、今は散つた、青柳の
絲を其のまゝ、すらりと撫肩に、葉に縮入れた一枚小袖、帯に背負揚の紅は縹珍を彩る花ならむ、
しやんと心なしのお太鼓結び。雪の襟脚、黒髪と水際立つて、銀の平打の簪に透彫の紋所、撫子
の露も垂れさう。後毛もない結立ての島田髷、背高く見ゆる衣紋つき、備はつた品の可さ。留南
奇の薰馥郁として、振を溢る、縮緬も、緋桃の燃ゆる春ならず、夕焼ながら芙蓉の花片、水に冷
く映るかと、寂しらしく、獨り悄れてゐんだ、一人の麗人あり。わざとか、櫛の飾もなく、白き
元結一結び。

恠くても頭重さうに、頸を前へ差伸ばすと、駒下駄がそと浮いて、肩を落して片手をのせた、
左の袖がなよやかに、はらりと欄干の外へかゝつた。

こゝに其の清きこと、水底の石一ツ一ツ、影をかさねて、兩方の岸の枝ながら、蒼空に透くば

かり、薄く流るゝ小川が一條。

流が響いて、風が觸つて、幽に戦いだ其袂、流は琴の絲が走るやう、風は落葉を誘ふやう。

雲が、雲が、又一片、……此處へ緋の羽織、縞の着物、膨らんだ襦衣、式の如く、中折を阿彌
陀に被つて、靴を穿いた、肩に畫板をかけたのは、いふまでもない、到る處、足の留まる處、目
に觸るゝ有らゆる自然の上に、西洋繪具の濃いのを施す、繪を學ぶ向の學生であつた。

廣くはあらぬ橋の歩み、麗人の背後を通つて、やがて渡り越すと影が放れた。其處で少時立留
つて、浮雲のたゞよふ形、熟と此方を視めたが、思切つた狀して去つた。

其の傍に小店一軒、軒には草鞋をぶら下げたり、土間には大根を土のまゝ、煤けた天井には唐
辛。明らさまに前の通へ突出して、それが賣物の梨、柿、冷えたふかし諸に、古い精進庖丁も添
へてあつたが、美術家の目には其れも入らず。

店には誰も居なかつた。昨日の今時分は、こゝで柿の皮を剥いて食べた、正午まはりを歸り路
の、眞赤な荷をおろした豆腐屋があつたに。

學生の姿が見えなくなると、小店の向うの竹垣の上で、目白がチイ／＼と鳴いた。

身近を通つた聲音には、心も留めなかつた麗人は、鳥の唄も聞えぬか、身動きもしないで、其のまゝ、凝乎と。

秋の水は澄み切つて、鮎の鱗ほどの曇りもないから、差覗くと、浅い底に、其の銀の平打の簪が映つて、流が絲のやうにかゝる毎に、小石と相撃つて、憂然として響くかと、伸びつ、縮みつする。が、娘は敢て、過つて、是を遺失したものとして、手に取らうとするのではない。

目白が又チイと鳴いて、ひっそりと、小さな羽を休めた形で、飛ぶ影のさした時であつた。

下行く水の、はじめは單に水上の、白菊か、黄菊か、あらず、此の美しき姿を、人目の繁き町の方へ町の方へと……其の半襟の藤色と、帯の錦を引動かし、友禪を淡く流して、ちら／＼靡して止まなかつたのが、フト瞬く間淀んで、靜つて、揺れず、なだらかになつたと思ふと、前髪も、眉も、なかだかな鼻も、口も、咽喉の幽かに見えるのも、色は固より衣紋つきさへ、明るかつて、其の半身をあり／＼と水底に映したのである。

倂は其の名である。月のやうな日中の橋も、齊しく麗人の姿を宿した。

それまで亘んだ娘の思は、これで通つたものであらう。可愛い唇の紅を解いて、莞爾して顔を上げた。身は、欄干に横づけに。唯見ると芳紀二十三？四。目色に凛と位はあるが、眉のかゝり婀娜めいて、くつきり垢抜けのした顔備。白足袋の襪はづれも、きり／＼と小股の締つた風采、此

の邊にはつひぞ見掛けぬ、路地に柳の縁を投げて、水を打つたる下町風。

恍惚と顔を上げ、前途を仰ぐやうに活々した瞳をぱつちりと睜いたが、流を見入つて、疲れたか、心にかゝる由ありしか、何となく弱々と、伏目になつてうつむいて、袖口を胸で引き合はすと、おのづからのやうに、歩が運んで、する／＼此方へ。

渡り越して、其の姿、低い欄干を放れると、佛橋は一點の影も留めず、後になつて、道は一條、美しく其の白足袋の下に續いた。

さて小店の前を通つた時、前後に人はなし、床几にも誰も居らず、目白もかくれて、風も吹かず、氣は凝つて寂としたから、其の柿と、梨と、こつ／＼と積んだのが、今通る娘のために、供物した趣があつたのである。

通りかゝりに見て過ぎた。娘の姿は、次第に橋を距つて、大きく三日月形に、音羽の方から庚申塚へ通ふ三ツ角へ出たが、曲つて執方へも行かむとせず。少し斜めに向をかへて、通を向うへ放れたと思ふと、忽ち颯と茜を浴びて、衣の綾が見る／＼鮮麗に濃くなつた。天晴夕雲の紅に彩られつと見えたのは、堀に溢るゝむらもみぢ、垣根を繞る小流にも金欄颯と漲つたので。

其の石橋を渡つた時、派手な裾捌きにちら／＼と、かつ散る紅、かくるゝ黒髪、娘は門を入つたのである。

「眞平御免を。」

一ツ曲つて突當りに、檜造りの玄關が整然と眞四角に控へたが、娘はそれへは向はないで、あゆみの花崗石を左へ放れた、おもてから折まはしの土塀の半に、アーチ形の木戸がある。

其處を潜つて、あたりを見ながら、芝生を歩つて、梢の揃つた若木の楓の下路を、枯れたが白銀の縁を残した、美しい小笹を分けつつ、やがて、地も笹も梢も、向うへ、たら／＼と高くなる、堆い錦の褥の、ふつくりとして然も冷やかな、もみぢの丘へ出た時であつた。

向ううらに海のやうな、一面鏡の池がある。其の傾斜面に据ゑた瀬戸物の床几に腰をかけて、葉色の明りはありながら、茂りの中に、薄暗く居た一人の小男。

三

紅葉の中に著るく、先づ目に着いたは天窓のつるり、頂や兀げておもしろや。耳際から後へかけて、もじや／＼の毛は未だ黒いが、其年紀ごろから察するに、臺灣云々といふのでない。結髪時代の月代の世とともに次第に推移つたものであらう。

無地の紬の羽織、萬筋の袴を着て、胸を眞四角に膨らましたのが、下へ短く横に長い、眞田の打紐。裾短に靴を穿て、何を見得にしたか帽子を被らず、だぶ／＼になつた茶色の中折、至極大

ものを膝の上へ。両手を鐙の下へ、重々しう、南蠻鏡、五枚鏡の鉢兜を脱いで、陣中に憩つた形でござつたが、さて其の耳の敏い事。

薄い駒下駄運びは輕し、一面の芝の上。然るに疾より聞きつけたと覺しく、娘の立姿、こぼるるもみぢの葉の中へ、はらりと出でて見ゆるや否や、床几を立つて、恭しく帽子を踵の邊まで、手とともにづつと垂れて、眞平御免！と啓したのである。

「え、御免下さいまし、甚だ推參なわけで、飛んだ失禮でございませうが、手前通りがかりのもので、」といひ出る。

娘は上から伏目で見た、毗が切れて、まぶちがふつくりと高いやう。

其の氣おのづから、脳天を壓して、いよ／＼頭を下げ、

「は、當御館に於せられましては、此のお庭の紅葉を、諸人に拜見の儀お許しとな、豫々承つたでありますで、戶外から拜見いたしましたさへ餘りのお見事。つい御通用門を潜りまして、うか／＼と是へ。」

實は前以て一寸お臺所口まで、お断りを申上げまして、御承諾を頂戴いたさうかにも心得ました、が、早や拜見御免とありますれば、却てお取次、お手敷、と手前勘に御遠慮を申上げ、お庭へ參つて見ますると、恚の通。手前の外には、恚う、誰一人拜見をいたして居りますものがござい

ません。ほい、こりや違つたさうな、すれば、大方、だらうぐらゐに考へて風説をいたしますのを、一概に然うと心得て粗忽千萬な。

若いものではございませす、分別盛を通り越して居ながら、と恐縮をいたしましたな、それも、御門内なら、まだしも。

無躰にも、つか／＼奥深く参りましたで、黙つて出て参るわけにも相成りませす、殆ど立場をなくして居ります儀で。

え、どうぞ貴女様、大目に御覽下さりますやう、又少々拜見の處も、あひなりますることとございしましたら、御赦しのほどを、あらためてお願い申します。

と句は伸びたが淀まぬ口上、すらくと陳べ立てた。疾くから何かいひたさうだつた娘は、其の隙のないのに言を含んで黙つて待つたが、此の（お願ひ申します）に至つて、一寸言が切れたので。ト支へたらしい、早急には、いひ出せないし、黙つて居ると、低頭したまゝで居る。はツと急いたか、臉を染めた、氣の毒なが色に出て、唯、涼しい聲で、

「はい、」といつた。

「お差支はないでせうか。」と、少しづつ、顔を擡げる。

「御免なさいな、私は、あの、此家のもちやないんですよ。」

「へ、何、お邸のお嬢様では在らつしやいません？」

「貴下、不可いんですかねえ、私も矢張見に来たものなの。」

小男は胸を反らして笑ひ、

「成程、御影間ですかい。は、は、は、可うございませうとも。まあ、お掛けなさいまし。何ね、愚圖々々いや今の口上で追拂ひまさ。貴女がお嬢様でも、何うです、あれぢや厭とはいへますまい。」

「然う、眞個にお上手ね、」と莞爾した。

些と此の返事は意外だつたか、熟と瞻つて、

「や、」帽子の下で膝をはたり。

「人形町においでなすつた、——柳屋のお夏さん。」

「今日は、今日ア、」

かみさんが、

四

「あ、い、」といつて、上櫃の障子を閉め、直ぐ其の足で臺所へ、

「誰？おや、床屋さん、」

「へ、へ、へ、何うも晩くなりまして済みません、親方が然う申しました、え、何だもんですから、つい、客がございましたもんですから、」

袷の上に白の筒袖、仕事着の若いもの。豫て誂の剃刀を、あはせて届けに來たと見える。かぬしが脂下つたといふ體裁、笏の形の能代塗の箱を一個、掌に据ゑて、ト上目づかひに差出した。それは讀めたが、今聲を懸けたばかりの、勝手口の腰障子は閉まつたり、下流の板敷に、どツしり聲を据ゑて膝の上に顔を載せた、括猿の見得は是れ什麼。

「まあ。」

奴は、目をきよろしくして、

「へ、へ、へ、」

「御世話様でした。」といつて唯受取つたのが、女房の解せない様子は、奴固より承知之助。

臺所に踞んだまゝ、女房の、藍微塵の太織紬、些と古びたが黒縹子の襟のかゝつた小薩張した半纏の下から、秋日和で紙の明るい上櫃の障子、今閉めたのを、及腰で差のぞき、

「可、鹽梅に歸りましたね。」

「誰さ。」

「今來やがった野郎でさ。」

これで分つた。女房は頷いて、

「あ、今の。何だらう？お前さん知つてますか。」

「知つてますツて、飛だ奴です。」と最う一度首を伸ばして見る。

女房も振返つたが、受け取つた剃刀を其まゝ、前垂を挟んで、粹に踞み、

「何、町内の若い衆かい。」

「ぢや、おかみさん、此方ぢや御存じないんですか。」

「見た事もない人さ、でもお嬢さんは何うだか。」

「へい、何てつて來やがったんで。」

「え、御免下さいまし、此方様のお嬢様はお内ですかつていつたがね。」

若い衆、板の間に手をかけて、分別ありさうに、傾いた。白いのを着た姿は、前門の虎に對して、荒神様の御前立かと頼母しく見えたので。

「いつたんだがね、尤もお留守だからお留守だといつたら、ぢや又後ほどツて歸つたがね。」

いひく、くるりと身をかへして立つと、踞んで居た腰を伸ばし切らず、直ぐ其處に、てらて

らの長火鉢。

「誰方でございますえッて聞いたら、何にもいはないで、への字形の口で、へ、へ、へは些と氣障だつたよ、あ、あ。」

と傍の茶棚の上へ、出来て来たのを仰向いてのせた、立膝で、煙草盆を引寄せると、引立てるやうに鐵瓶をおろして、一寸觸つて見て、埋けてあつた火を一拂み。

番煙草と見ゆるのに、長煙管を添へて小取廻しに板の間へ押出した。

「まあ、一服おあがんなさい。」

さほど思案に暮れるほどの事でもないが、此の間待つて黙つて控へた。奴、鼠のやうに鼈甲羅字を引いて取り、

「おかみさん、頂きます。」

「まづいよ、私だから。」

「どういたしましたして、へい、後に又來ますッて。」

「いつたがね、何かい、筋が悪いのかい。」と斜に重忠といふ身で尋ねる。

「悪いの何の！から、手のつけられた代物ぢやないんですよ。」

「ゆするの？」

「否、ゆするも、ゆすらないも、飲んだくれ、酒ッ癖の悪い、持て餘しものなんですか。私どもの社會ですがね。」

「おや、矢張、床屋さん。」

「床屋にも何にも、下町ぢや何てますか、山手ぢや、皆が火の玉の愛吉ツていひましてね、險難な野郎ですか。」

五

「三厘でもありさへすりや、中波だらうが、焼酎だらうが、徳利の口へ杉箸を突込んで、ぐらぐら沸え立たせた、ピンと來て、腦天へ沁みます、其のね、私等で御覽なさい、香を嗅いだばかりで、ぐらくと眩暈がして、背後へ倒れさうな奴を、湯香水吞で煽りやがるんで、身體中の血が燃えてまさ。」

ですから、おかみさん、一寸でも彼ン畜生に觸るが最後、直に誰でも火傷をします。火の玉のやうな奴で、東京中の床屋といふ床屋、一軒残らず手を焼いて了つたんで、何處へ行つても店口から水をぶっかけて追ひ出すッて工合ですから、しばらくね、消えました。

多日、誰の處へも彼奴の影が見えねえで、洗桶から火の粉を吹き出さないもんですから、おや

「おや、何處へ潛つたらう、と初手の中は不氣味でね。」

「上げ板を剥つて見ろ、押入の中の夜具ぢやねえか、焦臭いが、愛吉の奴がふて寝をして居やあがるだらう。」

なんてつて親方徒が、申戯にもいつたんですが、それでも雑と一年ばかり、彼奴の火沙汰がなかつたんです。

すると、おかみさん、何うでせう、念にや念の入つた、此の夏、八月の炎天に、虚空を飛んで、ころ／＼と舞ひ戻りやがつて、又候、其處等轉がつて歩行くでさ。へい。」

といつて煙を吹いた。顔が赤く、目が圓い。此若いもの、餘程おびえて居るのである。餘りの事に、はじめは笑つて聞いて居た女房は、何爲か陰氣な顔をして、

「厭だよ、何處から舞ひ戻つて来たんだねえ。」

「其れが如何です。そら、然ういつた工合で、東京中は喰ひ詰める——し、勿論何でさ、此の近在、大宮、宇都宮、栃木、埼玉、草加から熊ヶ谷、成田、銚子。東ちや、品川から川崎續き、横濱、程ヶ谷までも知つて居て對手にし手がないもんですから、飛んで、逗子、鎌倉、大磯ね。國府津邊まで、其までに荒しやあがつたんでね、二度目に東京を追出ても何處へ行つても何でせう、おかみさん。」

(は、愛吉か、きなツくさい。)

と鼻ツつまみで、一昨日来い！と門口から水でせう。

火の玉が焼を起して、伊豆の大島へころがり込んで行つたんですつて。芝居ですると、鎮西八郎爲朝が爪を上げて、身代りの鬼夜叉が館へ火をかけて、炎の中で立腹を切つた處でさ。」

「あ、／＼、と束ね髪が少し動いて頷く。」

「月に一度、靈岸島から五十石積が出るツてますが、三十八里、荒海で恐ろしく揺れるんですつてね。甲板へ潮を被つたら、海の中で、大概消えて了ひさうなもんですけれど、因果と火氣の強い畜生で、消火半を打たせません。」

然も何です、珍しく幾干か残して来たんですぜ。

何しろ、大島なんですすからね、婦女が不斷着も紋付で、する／＼引摺りさうな髪を一束ねの、天窓へ四斗俵をのせて、懐手で腰をきらうといふ處だツていひますぜ。

内地から醤油、味噌、麥、大豆なんか積んで、船の入る日にや、男も女も浪打際へ人垣の黒だかり。遙の空で雲が動くやうに、大浪の間に帆が一ツ横になつて見える時分から、爪立つものやら、乗り出すものやら、やあ、人が見える、と手を拍いて嬉しがるといふ處でさ。

さすがに火の手を上げなかつたもんですから、そら、些とばかり残つたでせう。

處で、炎天を舞ひ戻ると、最う東京ぢや、誰も對手にしないことを知つてますから、一番自前で遣らうといふんで方々捜したさうですがね。

當節は不景氣ですから、幾干も床店の賣もの、貸家はあるにやありますが、値が張つたり、床屋に貸して置くほどの差配人、奴の身上を知つて居て斷つたりで、とうとう山の手へお鉢をまはすと、近所迷惑。生憎と又此の音羽續きの櫻木町に一軒明いたばかりのがあつたんです。

其處へ談を極めましてね、夏のこつたし、わけはありません。仕事着一枚の素裸。七輪もなしに所帯を持つて、上げた看板がどうでせう、人を馬鹿にしやがつて！——狐床。」

六

「其の狐が配つたんです。あとで蚯蚓にならなかつたまでも、隣近所、奴が引越蕎麥を喰つた徒は、皆腹形を悪くしたらうではありませんか。

開業の日から横町大騒ぎになりました。といふは、何です、まあ、口あけのお客と、あとを二人ばかり仕事をしたツていひますが、すぐに祝酒だ、とぬかしやあがつて。店をあけたまゝ、見通しの六疊一間で、裏長屋の總井戸を其の鍋釜一ツかけない乾いた臺所から見晴しながら、箆を臺へ横ツ倒しにしたまんま掃除もしないで、火の玉小僧め、表角の上州屋から三升と提込んでね、

おかみさん、突當りの濁酒屋から、酢章魚のこみを、大皿で引いて来てね、

友達三人で煽つたんです。

友達といつたつて、まともなものは、附合ひませんや。自分ぢや佛だ、佛だといひますが、寢釋迦だか、化地藏だか、異體の知れない、若い癖に、鬼見たやうな痘痕面で、渾名を鍍金の銀次ツて喰ひ詰めものが、新床だと嗅ぎ出して、御免下さいまし、か何かで、せしめに行つた奴を、おともだち、お前さんも不景氣で食へねえのか、飯はないが酒はあるてつて、引摺り入れた役雑とね。

最う一人は車夫でさ。生れてから七轉びで一起もなし、其處で通名をこけ勘といふ夜なし。前の晩に店立てをくつたんで、寢處がない。禪の掛がへを一條煮染めたやうな手拭、こいつで顛巻をさしたまゝ、疊み込んだ看板、兀げちよろの重箱が一箇、薄汚え財布、雑ツとこれで、身上のありつたけを臺箱へ詰め込んだ空車をひいて、何うせ、繪に描いた相馬の化城古御所から、ばけ牛が曳いて出ようといふぼろ車、日中は躰だつて乗りやしません。

ごろり／＼とやつて、櫻木町を通りかゝつて、此奴も同く路地床の開業を横目で見たからぬかりませんのさ。

右のね、何ですつさ。にこり屋の軒下へ車を預けて、苜蓿のしとつたやうな破毛布を、後生大

事に抱へながらのそくと入り込んで、鬼門から顔を出して、若親方、些とお手傳ひ申しませうかね……とね。

此奴等、其處で三人、蟲拳で寄り合をつけたんでさ。」

「驚いたねえ、火の玉に鍍金に、こけだえ。全然三題噺のやうぢやないか。嗚差配様がお考へなすつたらう、あゝ、むづかしい考へものだね。」

思はず警句一番した、女房も餘りの話、つい釣り込まれてふき出したが、翻つて案ずるに笑事ではないのである。

「申戯ぢやないよ。」

と向き直つて、忘れて居た鐵瓶を五徳の上。又一寸觸つて見たのは、これからお茶でも入れる氣だらう。首尾が好いと女世帯、お嬢さん、といふのは留守なり、かみさんも隙さうだ。最中を一火で、醬油をつけて、と奴十七日だけれども、小遣がないのである。而已ならず、乙姫様が困はれたか、玄人でなし、堅氣でなし、粹で自墮落の風のない、品がいゝのに、媚かしく、澄ましたやうで優容やか、お俵に見えて懐かしい。特に生垣を覗かるゝ、日南の臥龍の南枝にかけて、良き墨薰る手習草紙は、九度山の眞田が庵に、緋緘を見るより由緒あり氣で、奥床しく、しをらしい。憎い事、戀の手習するとは知れど、式部の藤より紫濃く、納言の花より紅淡き、青柳町の薄紅梅。

の薄紅梅。

此の彌生から風説して、六阿彌陀詣がぞろ／＼と式部小路を抜ける位。

月夜鳥もそれかと聞く、時鳥の名に立つて、音羽九町の納涼臺は、星を論ずるに違あらず。關口からそれて飛ぶ螢を追まに垣根に忍んで、おれを吸つた藪ツ蚊が、あなたの蚊帳へとまつた、と二の腕へ赤い毛糸を今でも結へて居る此の若い衆、願くは其のおかへりを、半日こゝで待つ氣である。

七

於此乎、いよく熱心。

「でも其の、拳ぐらるで騒ぎが静まりや可いんですが、酔が廻ると火の玉め、何うだ一番相撲を取るか、と瘠ッばちぢやありますがね、狂水が總身へ廻ると、小力が出ますんで、いきなり其の箒の柄を蹴飛ばして、血眼で仕切つたでせう。

可からう、で、鍍金の奴が腕まくりをして、ト睨み合ふと、こけ勘が濫團扇を屹とさして、見合つて、見合つてなんて遣つたんですつて。

表も裏も黒山のやうな人だからだらうぢやありませんか。

晴の勝負でさ。じり／＼と寄合つて呼吸が揃つたから颯と引くと、ハツケもノコツタもあつたもんですか。

火の玉め、鍍金の方が年紀上で、私あ佛の銀次だなんて、はじめツから挨拶が癪に障つたもんだから、豫て其のつもりだつたと見えませ。

喧嘩には馴れてますから素敵い。立つか立たないに、ぴしや／＼と、平掌で銀の横ツ面を引叩いた、其の手が火柱のやうだから堪りません。

鍍金の奴、目がくらんで、どたり突倒る。見物喝采。愛吉も、どんなもんだと胸を叩いたはいが、此方あ蒼くなつて、

「何の意趣だ。」
と突立ち上ると、

「はり手といふんだ。お行司に聞いて見ねえ。」
と、空嘯いて高笑ひをしたでせう。

こけ勘はこけてるから、あツ氣に取られて、黙つてきよろ／＼して居るばかり。
「可し、相撲にや己が負けた、刃物で来い。」
と此方も銀でさ。すぐに店へ駆け出して剃刀を逆手に取つて構へたでせう、最う目が据つて、

唇が土氣色。」

「何うしたい。」

「火の玉は眞赤になつて、

（何を、何を。）

ツていひながら、左の肩で寸法を取つて、尺取蟲のやうに、じり、じり、

（愛吉さん。）

五合ふるまはれたお底にや、名も覚えりや、人情ですよ。こけ勘はお里が知れませ、ト楯棒へ掴つた形、腰をふら／＼させながら前のめりに背後から、

（愛吉さん、危え、危え。）

ツて澁團扇で煽いだのは、何ういふものか、餘程トツチたやうだつたと、見て居たものがいふんでして、見物わツとなる騒動。

どツちを取おさへようにも眞剣で、一人は剃刀だから危うござんす。

其の内に火の玉が、鍍金の前を電のやうな斜ツかけに土間を切つて、ひよいと、硝子戸を出たでせう。集つて居たのは、バラ／＼と散る。
（遁げるかツ。）

で、鍍金の奴が飛びつくと、

(べらぼうめ、いくら山手だつて恠う、赤城に芝居小屋のあつた時分ぢやねえ、見物の居る前で生命の取遣りが出来るか、向う崖の原ッ場までついて来い、殺して遣る、来い！)

といふと前へ立つて駆け出したんで、皆がぞろ／＼とついて行くと、鍍金の奴は一足おくれで、其のあとへ、こけ勘。

處かね、おかみさん、いざ原場の頂上へ薄りと火柱が立つて、愛吉の姿があらはれたとなる。

と、こけ勘はいきせい切つて追ひあがりましたが、遠巻にした見物も、二人の徒も、いくら待つても鍍金が来なかつたといふぢやありませんか。

其の筈でさ、来ないも道理。どさくさ紛れに、火の玉の身上をふるつた、新しいばかりかんを二挺、櫛が三枚、得物に持った剃刀を其のまゝ、おまけに、あはせ砥まで引攫つて遁亡なんですつて……

類は友だつていひますがね、此奴の方が華表かすが多いだけに、火の玉の奴ア脊負なげを食つて、消壺へヂウ……へ、へ、い、様ぢやありませんか、お互です。」

女房怪しからず、と刺つた痕に皺のまじつた眉を擧め、
「お互つて、ぢや今来た愛吉つてのも一寸々々盗るの。」

「いづれ、そりやね。」

「氣味が悪いね、じろりと様子を見ていづれ後程、は氣障ぢやないか。」

「ですからね、何ですよ、氣をおつけなさらなくツちや不可ません、此の頃は恐ろしく、さがり切つて居やあがるんです。」

八

「尤も其の何ですよ、開業式の日、ばかりかんなんぞ盗まれたのが、けちのついた印なんです。焼を起してあくる朝、おまんまを抜きにしてすぐに晝寝で、日が暮れると向うの飯屋へ食ひに行つて、又煽りつけた。歸りがけに、(おう、翌日ツから、時分時にや、一寸御飯ですよツて聲をかけてくんねえよ。三度々々食ひに来ら。茶碗と箸は借りて行くぜ、こいつを持って驅出して来るから、)

ツて、両手に片々づゝ持つて歸つた。妙なことをすると思ふと、内へ歸つて、どたり大胡坐を搔込んでね、燈は店だけの、薄暗い汚い六疊で、其の茶碗のふちを叩きながら、トテトンツ、ト

ン、
不孝ものだが相談づくで、

酒になりなよ江戸の水。

なんて出鱈目に怒鳴るんですつて、——コリヤ〜と噓してね、やがて高嶺、勿論唯一人。
「呆れた奴だねえ。」

「から箸にも棒にもかゝるんぢやありません。私なんぞが参りますと、にこり屋のかみさんが沈
沈愚痴をいひますがね、勘定はいふまでもなく悪いんです、——連を引張つて来りや屹と喧嘩。
然うかと思ふと、其處等の乞食小僧を、三人四人、むくんだ茄子のどぶ漬のやうな餓鬼を、ど
ろどろと連込んで、食ひねえ〜つて、煮ッころばしの湯氣の立つお芋を餌に買つて、ニヤ〜
笑ひながら、ぐびり〜。」

何でも其奴等を手馴けて、拘摸や放火を教へようつていふんです。かゝつたもんぢやありませ
んや。

處かね、おかみさん、女ツてものは不思議と慍う、妙に意固地なもんで。四丁目の角におふく
ろと二人で蜆、蠣を剥いて居ます、お福ツて、一寸ぼツとりした蛤かね、顔なんぞ剃りに行つた
のが、何うした拍子か、剃毛の溜つた土間へころりと落ちたでさ——兇状持には心から惚れて、
と密と言つて厭な顔色、些と遣恨があるらしい。
(愛吉さん、詰らないもんですが、)

なんてやがつて、手拭や巻煙草を運びまさ。
いつか中も、前垂の下から、目筈を出して、

(お茶になさいな)
と硝子戸を開けて、湯あがりの顔を出す、とおかみさん。

珍らしく夜延でもする氣かして、火の玉め洋燈の心を吹きながら、呼吸で點れさうに火をつけ
て居た處。

(入ツて遊びねえ、遊びねえよ。)

ツたが、初心ですからね、うぢ〜嬌態をやつて居た、とお思ひなさい。
いきなり、手をのばすと、其の新造の胸倉を打搦えて、ぐいと引摺り込みながら硝子戸を片手
でびツしやり。持つて居た洋燈の火屋が、パチン微塵、眞暗になつたから、様子を見て居た裏長
屋のかみさんが、何ですぜ、殺すのか、取つて食ふのか、生血を吸ふのかと思つたつていふんで
すぜ。

やがて何ですとさ、火の玉の野郎が臺所口から廻つて、のそ〜戸外へ出て行くから、密と其
のあとを覗くと、新造かね、薄暗い中にぼんやり幽霊のやうに坐つて居ましたツて。

愛の奴は何處へ行つたらうと思ふと、お定りのにこり屋。

(おう、媢々が出来たから、今日は内で飯を喰ふんだ、道具を貸してくんねえ、)
 と先づ七輪を一ツ運んだでさ。あとで鍋に醬油を入れて貰つて、茶碗を二ツ、箸二人前。もう
 一ツ借込んだ皿にね、歸りがけにそれでも一軒隣の餅菓子屋で、鹿の子と大福を五錢が處買つた
 んですつて、鬼の涙で、こりや新造へ御馳走をしたんですとさ。
 そら、食ひねえは可いが、燈は點けたさうですけれど、火屋なしの裸火。むんむと瓦斯のあが
 る奴を、店から引摺つて来た、毛だらけの椅子の上へ。達引かれたむき身をじわく、とやつて、
 (阿魔、やい、注いでくりや。)
 と前はだけの平胡坐、ぬいと腕まくりで突出したのが飯喰茶碗。
 五合を三杯半に平げると、
 (愆う、向うへ行つて、取つて来い)
 は亂暴ぢやありませんか。
 打たれさうだから、おどくして、白鳥を持つて立ちにや立つたが、極りの悪さうに、うつむ
 いた、腰のあたりを、ドンと蹴上げたから堪りませんや。

九

(あれ)といつてどたり横倒れになつて、ワツと杖を嚙んで泣くと、
 (三日辛抱が出来るか、べらぼうめ、歸れ、)
 とばかりで、蹴つけた脚を投出したまんま、仰向けにふんぞり返つて、え、鼻。
 其の筈で、愛の奴だつて、まさか焼跡の芥溜から湧いて出た蚰蜒ぢやありません。十月腹を貸
 した母親がありましてね。こりや何ですつて、佃島の辨天様の鳥居前に一人で葦簀張を出して居
 るんですつて。
 冬枯れの寒さ中毒で、茶釜の下に島の朝煙の立たない時があつても、まるで寄ツつかず、不孝
 な奴ツちやねえけれど、それでも、
 (大島の磯へ出て、日本の船を見いゝした時にや、おつかあ、お前を思ひ出した、)
 と今度店を持つた折に、一所にならうつていつたさうですが、どうして肯入れるもんですか、
 子を見ること何とかといふわけで、三日酒のまず、喧嘩をしないで居たら、世話にならうといひ
 ましたとさ。

どんなもんです。
 考へて御覽なさい、第一其の新造なんざ、名からして相性があはねえんです、お福なんて。
 彼奴が相當に、抱ツこで夜さり寝ようといふのは、こけ勘が相應なんで、其の夜なしの貧乏神

は縁があつたと見えまして、狐床の序開き、喧嘩以來、寝泊りをして居たんです。

お福ッ子は倒れたなり、突伏して居ましたッて。先刻餅菓子を買はれた時、嬉しさうに莞爾して、酌をする前に、其れでも自分で立つて、臺所の戸障子を閉めて、四邊を見たから、其の時は戸袋へ附着いて、色ッほい新造の目を遣過して置いて、閉めて入つたことを、破れた透間から、ト覗いて居た、其の裏長屋のかみさんが、堪らなくなつたでせう。」

「然うだらうともさ。」

「其處で何です。見るに見兼ねて、密と入つて、お福ッ子の背中を叩いて、しく／＼泣いて居るのを手を引いてね、臺所口から連れ出したは可いが、店から入つたんで跣足でせう。」

それまで世話をして、女房がね、下駄をつまんで、枕頭を通り抜けたのも、何にも知らず、愛の奴は他愛なし。

それから路々宥めたり、賺したり、利害を説くやら、意見をするやら、どうやら、恚うやら。でもまあ、目白下の寄席の辻看板のあたりで、やう／＼顔へあてた袖をはづして、恥かしさうに莞爾したのを見て、安心をして歸つたさうですが、——不安心なのは火の玉の茅屋で。

奴裸火の下に大の字だから、何、本人はどうでもいゝとして、近所づから、火の元が危いんでね、乗りかゝつた船だ、又臺所から入つて見ると、平氣なもんで、ぐうす、ぐうすう。

鼠が攫つたか、其れとも長屋うちの腕白がしよこなめたか、五錢が餅菓子一つもなし。

から、だらしがねえにも何にも。其處で、火の用心に、洋燈はフツと消したんですが、七輪の鍋下の始末をしなかつたのが大ぬかり。

尤も火のある事は氣がついたさうですが、夜中にや、こけ勘が歸つて来る。其までは隣家の内が、内職をして起きて居る、と一つにや流元に水のない男世帯、面倒さも面倒なりで、其のまゝにして置きました、さあ、これが大變。」

「失火たかい。」と膝の進むを覺えず、火鉢を後に、先刻から摺つて出て、聞きながら一服しようとする、心を得て、若い衆が拭つて返した、長煙管を、殆ど無意識に受け取つて、煙草盆を引寄せる。

「お前さん、とう／＼小火です。」

「ね、行つたらう。」

果せる哉と煙管をト——ン、
「ふう、」と頷きながら煙を吹く。

「夜中の事で。江戸川縁に植ゑたのと違つて、町の青柳と櫻木は、間か離れて居りますから、此の邊ぢや別に騒ぎはしませんでしたが、つい此の月はじめの事です。」
「私や最うぼけて了つて物わすれをするからね、確には覚えて居ないが、お待ちよ、然ういや、お湯屋でちらりと聞いたやうにも思ふね。」
「は、何しろ居まはり大騒動。」

十

「いづれそれ、焦ッ臭い焦ッ臭いがはじまりでさ。隣から出て出ると、向うでも戸を開ける。表通ぢや牛込邊の歸りらしい紋付などが立留まる。鍋焼が来て荷をおろす。瞬く間に十四五人、ぶらぶらと彼方へ此方へ。暗の晩でね、空を見るのもありや、羽目板を撫でるのもあり。其の内に、例のかみさんが起きて出て、屹とだよ、それぢや、とすぐに狐床の前へ行つた時分にや、もう蒸氣を吐くやうに壁を絞つて煙が出るんで、けた、ましい金切聲で床屋さん、親方！とこんな時だけの親方、喚いても寂として返事がないんで、構はず打壞せツて、氣疾なのがくわらりと開けると、中は眞赤、紅色に颯と透通るやうに光つて、一疊ばかり丸く慥う、疊の目が一ツツ見えるやうだつたてこつてす。」

臺所へ行く柱なんざ、半分がた火になつて障子の棧をちよろ／＼と、火の鼠が傳ふやうに嘗めてました。と哄と、皆が躍り込むと、店へ下り口を塞いで、尻をくるりと引捲つて、眞俯伏せに、土間へ腹を押ツつけて長くなつてのたくツて居たのが野郎で、蹴なぐつて横へ勿ねた袴の裾なんざ、じり／＼焦げて居ましたとさ。

此奴最う黒焼けかと思ふと、然うぢやないんで、そら通れますまい、構はず踏んで、飛び上つた人があつたさうです。

すると、しやツきりと起きました。
(や、なぐり込みに來やがつたな、さ、殺せ)といふと、椅子を取つて引立てて、脚を掴んでぐンと揮つた。一番乗りの火がかりは、水はなし、續く者なし、火の玉は突立つたり、此の時、戸が開いたのと、人あふりで、それまで、火で描いた遠見の山のやうだつた、蒸焼のあたり一面、めら／＼と慥う掌をあけたやうに炎になつたから、わツといふと、うしろ飛びに退つちまつたさうですよ。

(來やがれ、此奴等、一足でも寄つて見ろ。)

と炎を脊負つて、突立つて椅子をぐる／＼とまはすんですつさ。
何でも小石川の床店の組合が、殺みに來たと思つたんださうで、奴は寢耳で夢中でさ、其の癖、

燃えてる火のあかりで、ぼんやり詰めかけてる人形が認えたんでせう。煙が目口へ入るのも、何の事はありません、咽喉を締められるんだぐらるに思つたさうでね。

あとで聞いたら、大勢につかまつて焼殺される夢を見て居た處ですつて、然うでせう。寝返りに七輪を蹴倒して、それから燃え出して、裾へうつる時分に、熱いから土間へころがつて、腹を冷して居たんださうで。巡査の姿が、ぶつと出た時、はじめて我に返つたか、どさくさ紛れに影が消えたさうですが、何處まで亂脈だか分かりません。火の玉め、悠悠々落ちて井戸端へまはつて出て、近所隣から我れさきに持ち出した、ばけつを一箇、一杯汲み込んで提げたは可いが、汝が家の燃えるのに、そいつを消さうとするんぢやないんで。店先に込合つて居る大勢の彌次馬の背後へ廻つて、トねらひをつけて、天窗ともいはず、肩ともいはず、羽織ともいはず、ざぶり、瀧の水。

「大變だ」と女房。

「そら、ポンプだ、といふと呵々と高笑ひで、水だらけの人間が總崩れになる中を澄まして通つて、井戸端へ引返して、ウイなんて酔醒の胸のすく嘔でね、すぐに又汲み込むと、提げて行くんです。後からあとから人集りでせう。直にざぶり！差配の天窗へ見當をつけたが狛犬へ驟雨がかるやうで、一番面白うございました、と向うのこり屋へ来て高話をしますとね。火事場にか

見物が多いから氣が咎めるかして、誰も更つて喧嘩を買つて出るものはなし、交番へ聞えたつて、水で消さずに何で消す、おまけに自分の内だといや、それで済むから持つたもんです。處が濟まないのは差配の方です。悪たれ店子の上に店賃は取れず、瘡せた蟻でも地内に飼つて置くやうなもんですから、最う疾くにも追出しさうなものを、變つた爺で、新造が惚るやうぢや見處があるなんてね、藥罐をさまして居たさうですが、御覽なさい。愛吉が彌次馬に水を浴びせて居る内に、長屋中では火を消して、天井へもつかないで納まつたにや納まりましたが、其の晩の爲體には怖毛を震つて、搦立退いて貰ひましょ、御近所の前もある、と店立ての談判にかゝりますとね、引越賃でもゆるする氣か、酢のこんにやくので動きませんや。」

十一

「ぢや仕方がない。恚いふこともあらうためだ、路は遠し、大儀ながら店請の方へ掛け合はうと、差配さん、ばつちの裾をからげにかゝると、愛の奴のうろたへさ加減ツたらなかつたさうで。其の店請といふのは、何ですよ。兜町の裏にまだ犬の尿があらうといふ横町の貧乏床で、稻荷の紋三郎でツて、これがね、仕事をなまけるのと、飲むことを教へた愛吉の親方でさ。だから狐床ツてくらるなんで。鯨に鯨、末社に稻荷。是に逢つちや叶ひません。其癖奴が、

どんな亂暴を働いたつて、仲間うちから、いくら尻を持つて行つても、うけはしないんですがね。對手が差配さんなり、稻荷は店請の義理があるから、的切剣呑みと思つたさうで、家主の蕎麥屋から配つて来た、引越の蒸籠のやうだ、唯今あけます、と這々の體で引退つたんで。是で、梟がつけば、今時此處等をうろつくこともないんですが、名は體を顯しますよ。

止せば可いに、此の貧乏くじを又自分で買つて出たのが、こけ勘なんですさ。

(先晩の鹿忽は、不殘手前でございます。愛吉さんは宵から寝て居て何にも知りやしねえもんですから、申譯のために手前が身體を退きます。)ツて、言つたでせう。

差配の癖に、近所ぢや、掛賣を厭がるほど、評判の工面の悪い親仁だからねえ、これを又のみこむ奴でさ。

(貴様は何だ、おらが内の、汽車ぎらひな婆さんを積込んで、小火のあつた日から泊りがけに成田へ行つて居た男だけれど、申譯を脊負つて立つて、床屋を退散に及ぶといふなら、可々心得た。御近所へ義理は濟む。)

と、くだらねぢやありませんか。

何だつて意固地な奴等、放火盜賊、ちよつくらもち、掏摸の兄哥、三枚目のゆすりの肩を持つんでせう。

どうです、おかみさん、然ういつた奴ですからね、どうせ碌なこつちや來やしません。孰れ幾干か飲代でございませう。それとも、お嬢と、おかみさん、二人、御婦人ばかりだから、又仕事でもしようといふんで様子でも見に来せやあがつたか。

から段々落ちに、酒も人間も悪くなつて、此の節ぢや、まるで狂犬のやうですから、何を何う食ツてか、らうも知れませんか。何しろ火の玉なんぞね。彼奴の身體のこすりついた處は、そこから焦げねぢや治まらんとしてあるんで。へい馳が鳴いてもお呪禁に、柄杓で三杯流すんですから、おかみさん、さつさと鹽花をお撒きなさいまし。おかみさん、

といつたが、黙つて居る。

「え、おかみさん。」

頸を垂れて屈託さう、眉毛のあとが著るしく擧いで、熟と小首を傾けたり。はて此の様子では茶も菓子もと悟つたが、其のまゝ身退くことを不得。最う一呼吸するりと乗出し、

「何、又何でさ、私どもが、しばらく見張つて居てお上げ申しても宜いんですさ。いよ／＼となりますりや、内にや、親方も、今日は何處へも出ないで居るんで、」

「否ね。」

と女房は、煙管の鴈首を、壘に長くうつむけたるまゝ、心こゝにあらすでもなかつたらしい。

「いくらか、飲代處なら構ひはしないけれど、お前さんの話しぶりでも其の今の愛吉とかいふ若い衆が、火の玉だの、火柱だの、炎だの、小火だの、と厭にこだはって居るから心配なんだよ。はてな、と沈んで目を閉ぢる。

「へい、氣になりますかね、何ぞ……」

「何うもね。心配なのさ、恚うやつてお前、私がおもりをして居る方はね、妙に火に祟られて居なさるのさ、否ね、丙午の年でも何でもおあんなさりやしないけれど、私が心で然う思ふの、二度までも焼け出されておいでなさるんだからね、」

「何處で、へい？」

「一度は、深川さ、私たちも風説に聞いて知つて居るが、木場一番といはれた御身代がそれで分散をなすつたやうな、丸焼。

二度目が日本橋の人形町で、柳屋といつてね、……」

十二

「最う其の時分は、大旦那がお亡くななんすつたあとで、御新姐さんと今のお嬢さんとお二人、小體に繪草紙屋をしておいでなすつた。其處でもお前火災にお逢ひなすつたらうぢやないか。

尤も其の時の火事は、お宅からぢやなくつて、貫ひ火でおあんなすつたさうだけれど、ついお向うの氣の違つた婆さんの許から、夜の十二時といふのに燃え出すと、直ぐにお店へあふりつけたもんだから、それといふ間もなし、それにお前さん、御新姐は煩つていらしたさうだし、お生命に別條がなかつただけで、お嬢さんも身體ばかり、跣足でお遁げなすつたさうなんだよ。」

「へい、それで何ですか、此方の方へお引越しなすつたんですかね。」

「否、三年前の秋の事さ、其の後御新姐さんもお亡なんなすつたさうだもの、矢張御病氣の處へ、そんなこんなが障つてさ。

旦那様も又然うなんだよ。火事で、それだけの身代が煙になつた御心配から起つた御病氣だらうぢやないか。だから眞個に火は祟つて居るんだよ。」

と何となく聲も打沈んでいつたのであつた。

此の扇屋の焼けた時、新聞に黒くなつて描かれた焼あとの地圖も、最う何處かの壁の破れに貼られたらう。家も残らず建揃つた上、市區改正に就て、道は南北に擴がつた、小路、新道、横町の状も異つたから、何のなごりも留めぬが、但當時繪草紙屋の、下町の此の邊にも類なく美しいのが、雪で炎を撫づるやう、見る目にも危いまで、ともすれば門の柳の淡き影さす店頭に亘んで、とさかに頬摺する事のあつた、凡そ小さな鹿ほどはあつた一羽の軍鶏。

名を藏人藏人といつて、酒屋の御用の胸板を仰反らせ、豆腐屋の遁腰を怯したのが、焼ける前から宵啼といふ忌はしいことをした。火沙汰の前兆である、といったのが、七日目の夜中に不幸にして的中した事と。

當夜の火元は柳屋ではなく、却て其の不祥の兆に神経を悩まして、もの狂はしく、井戸端で火難消滅の水垢離を取つて、裸體のまま、表通まで駆け出すこともあつた、天理教信心の婆々の内の鹿火であつた事と。

それから、數萬の人ごみ、軍のやうな火事場の中を、何處を飛んだか、潜つたか、柳屋の柳にかけた、賽が一箇、夜のしらくあけの頃、兩國橋をころりと、邪慳な通行人の足に蹴られて、五が出て、三が出て、六が出て、ポンと欄干から大川へ流れたのを、橋向うへ引揚げる時五番組の消防夫が見た事と。

及び軍鶏も、其の柳屋の母娘も、其の後行方の知れない事とは、同時に焼けた、大屋の隠居、酒屋の亭主などは、未だ一ツ話にするが、其の人々の家も、新築を知らぬ孫が出来て、二度目の扁額が早や古びを持つて来たから、さてもしばらくになつた。

「ぢや、お内のお嬢さんは柳屋さんといふんですね、屋號ですね、お門札の山下お賤さんといふのが、では御本名で。」

「否さ、そりや私の名だあね。」

「おかみさんの？然うですかね。」と些とおもはくのはづれた顔色。こんなのは其の手に結んだ紅毛糸の下に、賤といふ字を書いてはつてあらうも知れぬ。

「だつて、私だつて名ぐるるはあらうぢやないか。」と鐵槌つけた齒を洩らしたが、笑ふのも浮きた、ぬは、渾名を火の玉と聞いたのが餘程氣になつたものであらう。

奴そんな事は無頓着で、

「へ、そりや何、そりや然うですが、ぢやお嬢さんは何とおつしやるんでございますね。」

「お夏さんさ。」

「お夏さん？」

「婀娜な佳いお名だらう。」

「すると姓は何とおつしやるんで、柳屋は、何でせう繪草紙屋をなすつた時の屋號でせう。」

で、何ですか、焼け出されなすつてから、其處で、まあ御娼賣、

「御商賣？」と聞き直した目の上に、嶮も、あ、今は皺になつた。

「深川の方で、え、其の洲崎の方で、」

女房聞くや否や、些と高調子に、

「お前、何をいふんだね。」

「だつて、おかみさんは何でせう、辨天町に居たんでせう。山手だつて其くらゐな事は心得てるものがありますぜ、丁と探素が届いてまさ。」

聊か軽んずる色があつて、ニヤ／＼と顔を撫でる。女房お賤はこれにはびくともせず、自若として、

「あゝ、然うさ、私は、然うさ。些ね、お客さまをお送り申して居たんだがね。落ちたといつちや勿體ない、悪所から根を抜いて、お庇さまで慥うやつて、おもりをして居るんだがね。お嬢さんが、洲崎になんぞ、お前、そんなことを噓に出したつて濟まないよ。素の堅氣でいらつしやらあね。」

「ですからさ、皆が不思議だつていつてるんで。孰れ慥う一寸々々此のお二階へ入らつしやる方があるつてのは、そりや分つて居ますけれど、どうも其のお嬢さんの御身分が分りませんが、ええ、おかみさん。」

十三

「ねえおかみさん、可いちやありませんか、町内のこつてさ、話してお聞かせなさいよ、えゝ、

おかみさん。」

早やいつの間にか自墮落に、板の間に腹這ひになつた。對手がソレ者と心安たてに頤杖ついて見上げる顔を、恰もそれ、少い遊女の初會惚を洞察するといふ目色、瘦せた頬をふツくりと、凄いが優らしい笑を含んで熟と視め、

「こりやお前さん、お錢にするね。」

「え、」

「旨く手繰つて聞き出したら、天井でも御馳走になるんだらう。厭だよ、何處の誰に憚つて秘すツといふことはないけれども、そりや不可いや。」

「嘘々々、」

口を尖らせ、慌てた早口、

「申、串戯をいつちや不可ません。誰がそんな、だつてお前さん、火の玉の一件ぢやありませんか。えゝ、おかみさん。」

私等が口を利くにや此方の姉さんの氏素性來歴を、丁と呑込んで居なかつた日にや、いざツて場合に、二の句が續かないだらうぢやありませんか。」

「其れだよ、其の事だよ、何も、押借や強談なら、」

「呀！」

十四

蒼くなつて、咽喉で、ムウと呼吸を詰め、

「愛吉さんか、まあ、お入んなさい、煙草があります。」

うろく、胸す目が坐らず、

「おかみさんもお在でなさなあ、お入んなさい。」

「ウンや、恠う、お友達、お有難うよ。汝にすつかり棚おろしをされ了つちや、江戸中は構はね

えが、此方様ばかりや、面が出せねえ、やい。

出る、こん畜生。

出る！」

といふと、ぐいと引くのと同時であつた。足の指に力はないが、氣に打たれたか、ひよいと腰、ひよろり板の間の縁が放れて、腰障子へふツと附着く。

途端に、猿臂がぬツくと出て、腕で無手と鷲掴み、すらりと開けたが片手業、疾いこと！びつ

しやり閉ると、路地で泣聲。

「御免なさい、御免なさい。」

といふのが聞える。膝を立てて煙管をついて伸上つた女房は、八ツ下りの日が明るく、あかり窓から、てらくと自分の前垂にも射して、ほこりのない、静な勝手を見るばかり。

戸の外で二ツ三ツ、ばたくと音がする。

「堪へて下さい、堪へ給へ、愛吉さん、愛吉さん、」

「堪へた、堪へたとも。恠う私アな、生れてから今日ッて今日ほどもを堪へたことはねえんだ。

は、は、は、」

と高笑を鼻に取つて、

「へ、へ、堪へて大概聞いて居たんだ。お友達、おい、お友達、汝が口で饒舌つた事を、もしか、

一言でも忘れたらな、私に聞きねえ、けちりんも残らずおさらひをして見せて遣らい。こん、畜

生、」

「苦ッ」

「あれ、お前さん方、其處で喧嘩をしちや困りますよ。」

女房は思はず立つた。

「おかみさん、」

と奴、弱い事、救を呼ぶ。

「来やがれ、さあ、戸外へ歩べ。生命を取るんぢやねえからな、人通のある處が可いや、握拳で坊主にして、お立合ひにお目に掛けよう。来やがれ、」

ざら／＼と落葉を踏む音。此方の一間と壁を隔てた、隣の平家との廂合へ入つて、しばらく楚音が聞えなくなつた。が、やがて胸倉を取つて格子戸の傍の横町へ揉んで出たのを、女房は次の座敷へ行つて、往來に向いた出窓の障子から伸上つて透かして見た。

其の間に、座敷中を行つたり、來たり、勝手口から出ようとしたり、上框を開けようとしたり、止めたり、引返して坐つたり、煙草を吞まうとしたり、見合はせたり、とやかく係合ひに氣を揉んだのは事實で、……うつかり長煙管を提げたツきり。

ト向うが勳三等ぐらゐるな立派な冠木門。左が其黒塀で、右が其の生垣。つつと續いて護國寺の通りへ、折廻した大構の地續で。

此方側は、其の生垣と向ひ合つた、しもた家で、其の隣が又しもたや、中に池の坊活花の教授、とある看板のか、つた内が、五六段石段を上つて高い。其處の竹垣を隔てて、角家がト○の中に(の)を大きく(あり)と細筆で書いたのを通へ向けて、掛けてある荒物店。斜かけに、湯屋の白木の格子戸が見える。

椿、柳、梅、櫻、花の師匠が背戸と、冠木門の庭とは、草も樹も、花ものを、枝も莖にたわ、に咲かせて、これを派手に、故と低い生垣にし、――まばらな竹垣にしたほどあつて、春夏秋の眺めが深く、落葉も、笹の葉の亂れもない、綺麗に掃いたやうな小路である。

時に、露、時雨、霜と乾いて、日は晴れながら廂の影、自然なる冬構。朝虹の色寒かりしより以來、狂ひと、亂れと咲きかさなり、黄白の輪搖曳して、小路の空は菊の薄雲。

但それよりもしをらしいのは、お夏が宿の庭に咲いた、初元結の小菊の紫。蝶の翼の狩衣して、櫛子に据ゑた机の前、縁の彼方にイむ風情。月出でたらば影動きて、衣紋竹なる不斷着の、翁格子の籬をたよりに、羽織の袖に映るであらう。

内の小庭を東に隣つて、次第に家の數が増して、商家はないが向ひ／＼、小兒の泣くのも聞ゆれば、牛乳屋で牛がモウ／＼。――いや、其處どころでない、喧嘩だ。喧嘩だ!

十五

赤大名のすたく／＼給が、廂合を先へ出ると、あとから前のめりに泳ぎ出した、白の仕事着の胸倉を掴んだまゝ、小路の中で、

「え、」

と小突いて、入交つて、向の生垣に押つけたが、蒼ざめた奴の顔が、赫と燃えて見えたのは、咽喉を絞められたものである。

女房はハツと思つた。

「蚯蚓野郎、ありつたけ、腹の泥を吐いッ了へ。」

「う。」

と唸つて、足をばたくと拵く状を、苦笑ひで、睨めつけながら、手繰つて手元へドン、と引くと、凧かと思えて面くらふ、自分よりは上背も幅もあるのを、絲目を取つて絞つた形。今度は更に小路の中途に突立たせた。

「わ、わ。」

と大な口を開いて、ふうふうと呼吸をはずませ、拜みたさうな手附をする。

此方は屹と二の腕から條を入れた握拳を、一文字に衝と伸した。

女房は思はず伸上つて顔を出して、又ハツと思つた、腹の裡で、

「あゝ、悪い處へ……」

がら／＼と車が来て、花の師匠の前で留まつた。内まで引きつけでもする事か！

「さ、お立合、此の泣ッ面を御覽じろ。」

と、あはや打据るむとしつつ前後を見た無法ものは、フト其の母衣の中に目を注いだ。

是より前、湯屋の坂上の蒼空から靨々菊の影の中、路地へ乗り入れた其の車。鬚の島田の氣

高いまで、胸を屹と据ゑて居たが、母衣に眞白な兩手が掛ると、前へ屈んだ月の俤、とばかりあ

つて、はずみのついた、車は石段で留まつたのであつた。

車夫の姿が眞直に横手に立つた。母衣がはらりと下へ垂れ、

一目見ると、無法ものの手はぐつたりと下に垂れて、忘れたやうに、掴んだ奴の咽喉を離した。

身を翻すと矢を射るやう、白い姿が、車の横を突切つて、一呼吸に飛んで逃げた。此小路の出

口で半身、湯屋の格子を、間のある背後に脊負つて、立留つて、此方を覗き込むやうにしたが、

赤大名の襦袢姿、一足二足、其方へ近づくと見るや否や、フイと消えた、垣越の其の後姿。ちら

ちらと見えでもするか。刻苦精勵、凡そ數千言を費して、愛吉を女房の前に描き出した奴は、爰

に現實した火の玉小僧の姿を立たせて、唯ひめのりの看板に、あツけなく消えて了つたのである。

女房は三たびハツと思つた。

無法者が、足を其方に向けて、じり／＼と寄るのを避けもしないで、却て、膝掛を取つて外す

と、小褌も亂さず身を軽く、ひらりと下に下り立つたが。

紺地に白茶で矢筈の細い、お召縮緬の一枚小袖。羽織なし、着流ですらりとした中肉中脊。紫

地に白菊の半襟。帯は、黒縹子と、江戸紫に麻の葉の鹿の子を白。地は縮緬の腹合、心なしのお太鼓で。白く千鳥を飛ばした緋の絹縮みの脊負上げ。しやんと緊まつた水浅葱、同模様の帯留で。雪のやうな天鵝絨の緒を、初霜薄き爪先に軽く踏へた南部表、柁の通つた船底下駄。からりと鳴らしながら、其の足袋、其の脛、千鳥、菊、白が紺地にちらりと、浮いて揺いでなほ冴ゆる、緋の紋綾子の長襦袢。はらりとひらめく、八ツ口、裳、こぼれず、落ちず、香を留めて、小路を衝と駆け寄る姿。

恠くてこそ音羽なる青柳町の此の枝道を、式部小路とは名づけたれ。

冠木門の内にも、生垣の内にも、師匠が背戸にも、春は紫の簾をかけて、由縁の色は濃かながら、近きあたりの藤坂に對して、是れを藤横町ともいはなかつたに。

「愛吉、」

と垣の際。上の椿を濡れて出て、雨の晴間を柳に鳴く、鶯のやうな聲をかけると、いきなり背後から飛びついて、両手を肩へ。年も三ツ、三年越。火難以來こゝにはじめてめぐり逢つた。柳屋のお夏は二十を越した。脊丈さへ、や、伸びて、樂に上から負はるゝやうに、袖で頸を包んだのである。

尤も愛吉の身はすくんだから。

「愛吉、」

と直ぐ續けて、肩越に藤長けた、清い目の横顔で差覗くやうにしながら、人も世も二人の他にないものか。誰にも心置かぬ状に、耳許に其の雪の素顔の口紅。此の時此の景、天女あり。寂然として花一輪、狼に散る風情である。

「何うしたの、まあ、しばらくだつたわねえ。」

「へい、」と唯呼吸をつくやうにいふ、悪髪結の垢じみた袷の肩は、どつきり震へた。

一たび母衣の中なる車上の姿に、つと引寄せられたかと足を其方に向けたのが、駆け寄るお夏の身じろぎに、亂れて揺ぐ襦袢の紅。ぱつと末枯の路の上に、燃え立つを見るや否や、慌ててくるりと背後向、踵を逆に回らしたのを、袖で留められた形になつて、足も地にはつかずと知るべし。

追つかけて冴えた調子、

「よく来たことねえ、愛吉、」

「へい、」

「逢ひたかつたわ！」
「へ」とばかりさへ口に消えた。

お夏はいよ／＼爽に、
「懐しいよ。」

といつて、其の前髪を、ひやりと肩。片頬を襟に埋めた時、
「……………」

腕組をした、しかみツ面。げぢ／＼のやうな眉が動いて、然も重さうな首を此方に捻向けむとして、それも得せず。酒の汚點で痣かと思ゆる、皮の焼けた頬を傳うて、こけた頤へ落涙したのを、先刻から堪りかねて、上框へ最う出て来て、身體を橋に釣るばかり、杳腕の上へ乗り出したから、格子戸越しに瞻つた、女房が見て呆氣に取られた。
時にお夏の背後へ、密と寄つたは、乗せて來た車夫で。
トもぢ／＼立迷つたが、横合から、
「お傘を、お嬢様。」

「あいよ、」

爾時袖が放れたので、愛吉は傍に人のあるのを知つて、じろりと車夫の姿を見る。

格子の中から、
「若衆さん此方へ。」

と聲をかけて、女房は土間を下りた。

「え、此方様で、」

車夫は、はじめて爰が其住居と心着いた風である。

愛吉が、

「寄越ねえ、」

で差出した手首は、綻びた袖口を纜に洩れたばかりであるが、肩の怒りやう、眼の配り、引手繰さうに見えたので。返事と、指圖と、受取らう、を殆ど三人に同時に言はれて、片手に搦んだ蝙蝠傘を、くるりと一ツ持直したのを、きよとんとして响したが、罷り違ふと殺しさうな、危険な方へ先づ不取敢。

「ぢや、親方、」

「む、」

と取つたが、縷子張のふくれたの。ぐいと胸中を一つ結へて、白の袴で留めたのは、古寺で貸す時雨の傘より、當時は是が化けさうである。

愛吉は、握太な柄を取つて、べそを掻いた口許を上へ反らして、

「こりや、酷いや、」

「おや、お世話様でございますね。」

と女房は格子を開け、

「貴女、お歸んなさいまし。」

「あ、唯今、といひながら帯をぎゆうと取出した。

小菊の中の紅は、買つて歸つた鬼灯ならぬ緋鹽瀬の紙入で。

可愛き銀貨を定め、

「御苦勞様。」

「お持ちなすつたものは此れツ切かね。」

「や、未だ臺函に、お包が、とすツ飛んで取りに驅けたは、火の玉小僧の風體に大分怯えて居るらしい。」

「酷いや、お嬢様、見つともねえや。こんなものをさして歩行いて、こりや、貴女ンですかい。」

「可いぢやないか。」

と莞爾したが、勝山の世盛には、團扇車で侍女が、其の湯上りの霞を拂つた簪の花の撫子の露

を厭ふ日覆には、餘處の見る目もあはれであつた。

十七

「否、そりや、あの私ンでございますよ、ほ、ほ、」

と女房も寂しい微笑。

愛吉心着いて其方を見向き、

「え、然やうで。へ、へ、へ、先刻はどうも、」

と其れも是れも弱つた顔色。

お夏は耳敏く聞きつけて、

「おや、さつきも來たの。」

女房のいらへぬ前、慌てて調子高に愛吉はごまかす氣、

「だつて、お嬢様、見ツともないや、」

「可いよ。」

「日、日傘をさしてお歩行きなさいな、深張でなくつてもです。」

「人が笑ひますよ。」

「誰か？え、何奴が笑ふんで、」

と、すぐにひらめく眉の稲妻。

お夏は眞面目に、故と澄ました顔で、

「威張つたつて不可ません、」

「それだつて、馬鹿ンつら。」

「でもさ、」

「何故、お嬢様、」

「笑ふ人はね、お前より強いんだもの。喧嘩をしたつて負けますよ。」

「といひ得て、花やかに浅笑した。お夏さん残らず、御存じ。」

女房思はず吹き出して、

「ぼ、ぼ、ぼ、」

狐床の火の玉小僧、馬琴の所謂、きはだを嘗めたる啞の如く、喟然として不言。丁ど車夫が唐

縮緬の風呂敷包を持つて来たから、黙つて引手繰るやうに取つた。

「さあ、お入りな。」

後姿で、お夏は格子を、

「をばさん、緩りだつたでせう、」

女房が前へ立つて、

「お疾うございましたこと、何は、あの此間から行つて見たいつて、おつしやつてでした、佛橋、

海晏寺や瀧の川より見事だつて評判の、大塚の關戸のお邸とやらのもみぢの方は、お廻りなすつ

て入らつしやいましたか。」

「否、路順が悪かつたから、今日は止したの。」

深川からぢや大廻りでね、内の前を二度通るやうなものですもの、出直しませうと思つて。

でも車だから、かへりはぶら／＼歩行にして、行つて見ようかと思つたんですがね、お茶の水

邊まで来ると、何だか頻に氣が急いでね、急いで／＼ツていふもんだから、車夫が慌ててさ。壹

岐殿坂だつたか不知、些と此方へ来る坂下の處で、荷車に一度。つい此先で牛車に一度、打附り

さうにしたの。蟲が知らせたんだわね、愛吉、お前のお庇で、

と入つたま、長火鉢に軽く膝を支いて、向うへ廻つた女房に話しかけたが、此の時門口を見返

ると、火の玉は未だ入らず、一件の縷子張を引提げながら、横町の土六尺、同一處をのそり／＼。

「お入りなね、何をしてるの、愛吉、お入んな、さあ、」

「お前さんお入んなさいましとさ。」

女房の此のときが些と木戸になつた。愛吉入りそびれて、又のそり。

「あら、劍舞をしてるわ、一寸、田舎ものが宿を取りはぐしたやうで、見つともないよ、私の情人の癖にさ。」

引手茶屋の女房の耳にも、これは破天荒なことをいつて、罪のない笑顔を俯向け、徒らに衝と火箸で灰へ、言を消した霞に月。

「私の仲好なの、でも役難なんです。先刻來た時屹と又威張つてぞんざいな口でも利いたんでせう、それで極まりが悪いんだよ。」

と取做すやうにいひながら、再び愛吉を顧みて、

「馬鹿だわねえ。」

「さあ、お前さん、どうぞ。」といった、これならば入られる。

「眞個になまけもんで仕やうがないの。」

「お、」

「酔ッばらつちや喧嘩するが商賣なの。」

「お嬢、」

「其の癖弱いだよ。」

「お嬢さん、」

と行詰つて、目と口を一所に、むッ。突當つたやうに句切りながら、次第ににじり込んだ框の上。

割膝で畏まつて、耳を搔いて頸を窘め、貧乏ゆすり一つして、

「へ、へ、口の悪いツちやねえ、お嬢ッ公。」

十八

「でも蟲が知らせたんだよ。愛吉、お前のお庇で、然うやつてさ、最う些とで車が引くりかへりさうになりました。」

「濟みませんでございます。」

「濟みませんでございます。」と口眞似をしたが、何となく品があつた。

「人を馬鹿にしていらつしやら、」

「先刻一度來たんだつて、」

「え、つい、其の、」

額をびつしやりで頸を抱へる。

「それではお前、入つて待つておいでなら可いのに、戸外へ出るもんだから、又都合ひなんかするんだわ。」

をばさん、此の人はね、馴染のない町内へ来ると、誰とでも喧嘩をするの、

とはじめて座につき、火鉢の前に落着いた。お夏も此の時氣がついて思はず袖で口を蔽ひ、

「まあ、」

とばかり、纒に堪へて、

「ほ、ほ、愛吉、お前、其の膝の上の蝙蝠傘をどうにかおしよ。」

「や、や、」といふと、慌てて落した、うつかり膝の上に、ト琴を抱いた姿だつた、毛織子の時代物を急いで掻き取り、ちよいと敷居の外へ出して、膝小僧を露出しに障子を閉めて壓へつけたは、餘程とツちたものらしい。

女房は年紀の功、先刻から愛吉が、お夏に對する舉動を察して、非ず。此の壮俊、強請でも、緞賣でも。よしや其の渾名の如き、横に火焰車を押し出す天魔のおとしたねであらうとも、此の家を取つては、籠の下を焚きつくべき、火吹竹に過ぎず、と知つて、立處に心が融けると、放火も人殺もお茶うけにして退けかねない、言語道斷の物語を聞く内にも、おぞ毛を震つて、つまはじきをするよりも、寧ろいふべからざる一種の憐さを感じて、稻妻の如く、胸間にひらめき渡る。

同情の念を禁ずることを得なかつた。自分の不思議が疑團氷解。さらりと胸がすくと、故とではなかつたが、何となく無愛想にあしらつたのが、此處で大いに氣の毒になつたので。

「眞個ねえ、お前さん、溜池から湧いて出て、新開の埋立地で育つたんですから、私はそんなに大した事だとも思ひませんでした、成程、考へて見ると、其のお持物は、こりや些と變でしたね。」

最うね結構なものとは思はないけれど、今朝お出かけの空模様ぢや、屹と降らうとも思はれませんし、然うかつて、一雨来ないでもないやうだつたもんですから、傘もお荷物と思つて、ついそれをね、お嬢さんも又、澄してさして入らつしやるんだもの。」歎息するものの如し。

「ですから、何でさ、日傘をおさしなさりや可いといふんぢやありませんか。」

「愛吉、笑ふといふのにね、」

「否さ、ですから、誰が、」と直ぐ力む。

「でも何ですよ、此の邊ぢや不思議がりますよ。」

私もね、ありやうは持つて居ましてね、佃島へおまるりをする時くらゐしか使はないもんですからね、今でも、通用するだらうと思ひましてね、

「をばさんは通用ツていふの。」

「どうかしたんでございますか。」

「それをさ、おさ、せ申しましてね、暑い時でござんした。」

此處へ引越して、しばらく経つて、護國寺が直ぐだといひますから、音羽々々ツて音ばかりだつたでせう。

行つて見ませうツて、お嬢さんをおさそひ申して、不斷のまんま、ぶら／＼片陰になつて出かけたんですよ。

袴を召した姉さん方が、フンといつてお通んなさる。何だか背が見られる處を、小兒衆が大勢で、やあ、狐の嫁入だつて、ばら／＼石を投げたらうぢやありませんか。お顔もお頭も、容赦なさんざないんですから、お嬢さんは日傘のま、路傍へおしやがみなさる。私はね、前からお抱き申して立つてましたかね。

そら、傘に化けた、といふと、ろくろへポン／＼當るから、氣がついて、私が取つてね、すぼめて帯へさしたんです。騒ぎは、それで静まりましたけれども、其の時黒子一つないお身體へ、疵がついたらうぢやありませんか。

十九

お夏は袖をくると白く、

「こんなよ、愛吉。」

いはれた其の二の腕の不審紙。色の褪せたのに齒を嚙んで、裾に火の粉も知らずに寝た、愛吉が、然も痛さうに、身ぶるひした。

三人齊しく慄然とせり。

女房しめやかに口を開き、

「ですからさ、時節ですよ。何だつてお前さんねえ、私なんざ話に聞いて、何だか草雙紙にでもあるやうに思つて居ました。木場の勝山様のお一人子のお嬢さんが、恚うやつて私等風情と、一所においでなさるんだもの、眞個ですよ。」と年紀だけに諭すが如く、自らは悟りましたやうにいつたのであるが、何のおかみさん、日傘が深張になつたのは、敢て勝山の流轉の如き、數の奇なるものではない。

「まだ／＼ね、お前さん、此のくらなるなこぢやないんですよ、もつと／＼變つておいでなすつたんですよ。」としんみり言ふ。

略其の幼馴染とでもいッつべき様子を知つて、他人には、堅く口を封するだけ、お夏のために、天に代りて、大いに述懐せむとして、續けてなほ説はうとするのを、お夏は軽く手眞似で留めた。

「およしなさいな、まあ後でゆつくり。をばさん、お土産があるんだわ。可いもの。」

でも、愛吉、お前は、これね、」

とあられもない。指で口許を挟む真似、そして其の目の仇気なさ。

「え、私あ、私あ、もう、」と逡巡する。

「もうなもんですか。御馳走するわ。」

をばさん、良いでせう。」

と火鉢に手をかけ、斜めに見上げた顔を一目。鬼神なりとて否むべきか。

「可うございますとも、行つて取つて参りませう。次手に何ぞ見繕つて参ります。」

愛吉は忙はしく膝を立て、

「私が、私が参りますよ、申戯ぢやない。てつて、飛出すのも餘り無遠慮過ぎますかい、へ、」と

結んだ口と、同じ手つきで天窓を搔く。

「何、お前さん、晩の支度もあるんですよ。」

「をばさん、私が行きませうか。」

「御申戯ばかり、」

「だつて私のお客ですもの、酒屋へなんぞお氣の毒です。」

「飛んだことをおつしやいまし、——先生様も貴女のお客ぢやありませんか。」

氣の毒がるのをいぢらしさうに沁々といったが、軽く立つた。酒と聞いて、氣もそゞろで、此の(先生様)といった言は、此時愛吉の耳には入らなかつたのである。

「あ、然ういへばね、」

お夏は火鉢を隔てながら、膝を摺寄せるやうに、裳を横に。

「晩に来るつて、」

女房は立ちかけたのを坐り直した。

「おや、それはまあ、まあ、貴女、お音信がございましたかい。」

「途中でね、電話をかけたの、」

「直接に、」

「否、花井さんを呼んで託づけて貰ひました。」

「花井さん、例のですか、」

「あ、」と頷く。

「それでは、其の分も、」

「あ、然うね。」

「いづれ、何も召食るやうなものはありませんけれど、」

「私がいゝものを買つて来たの。」

女房は茶棚の上を、ト風呂敷包がそれである。

「よく、お氣が着きましたねえ。御褒美に、それこそ深張を買つてお貰ひなさいまし。」

頭をふつて、

「要らない。」と活潑にいつた。

「でも貴女、貴女が、そんなにお氣がつくんですもの。可うございます。貴女がおつしやいませんでも、私からお強請り申しませう。」

「をばさん、氣がついた御褒美なんて、不可い。先生が怒るものなの。」

「へい、何でございますえ。」

二十

「何だか、怒るものよ、をばさん當てて御覽なさい。」

「……………」

黙つて熟々見たばかり、當てものして遊ぼうには、些と年紀が老けて居た。

「當てて御覽。愛吉、」

と唐突に此方と呼んだ。此時まで、お夏が女房といひかはした言は、何となく所帯染みて、ひ

そめいて、傍聴きするものの耳には、憚る節があるやうであつた。

いかばかり酒に咽喉が鳴つても、生憎耳が澄まされて、お夏の口から、(先生)といふのを聞いて、はッと胸に應へたのは、風説に聞いて尋ねて来た、式部小路の麗人は然る人の、愛妾である

といふのである。

果して其が柳屋のならむには、米が砂利になる法もあれ、お圍ひなどは、推參な！井戸端の悪口穴埋にして、湯屋の雑言焼消さう、と殺氣を帯びて来たのであるから、愛吉は是は、と思つた。

ト同時に、此の内證話からは、太く自分が遠ざけられ、憚られ、疎まれ、且卻けられ、邪魔にされた如く思つたので、何となく針の筵。眉も目も鼻も口も、歪んで、曲つて、獨りで拗ねて、殆ど居堪らないばかりの心地。

もうお夏の、恚う隔てのない、打開けた、——、敵討の、駈落の相談をさるゝやうな、一の(當てて御覽)がなかつたら、火の玉は轉がつて、格子の外へ飛んだであらう。

が、忽然として青天、急に其の膝へ抱き上げられたやうに感じた。但不意を喰つたから、どぎまぎして、

「酒、酒です。」

と筒抜けのぼやけ聲。然も當人時ならず、春風駘蕩として、今日九重にほひ来る、菊や、菊や——酒の銘。

お夏は驚いて目を睜つた。眞面目に啞然たるものは是を久うして、

「駄目。をばさん、此の人はね、酒だか私だか分らないの。一寸早く吞まさないとい、私を嚙らうも知れないよ。」

「お嬢さん、と例の敗亡。」

「唯今、ですがお嬢さんは、ほんとうに何を買つて入らつしやいました。大概そんなことはありますまいが、もしか、つくど不可ません。」

「可いのよ。先生のめしあがるもんなんざ、ねえ、愛吉、」

「まあ、貴女、」

「可いの。ねえ愛吉、お前が来ると知れて居るのなら、呼ばなくつてもいゝんだつけね。首尾は大極上々吉、愛吉堪りかねて、」

「御、御串戯おつしやらあ。」

「どれ、急いで行つて参りませう。」

と女房は、半纏の襟を抜いて立ち、臺所へ出ようとして、少々気がかり、

「貴女え、」

「あゝ、」

「先生が入らつしやらなくつて、寂しい、寂しい、とおつしやりながら、お憎らしい。あとで私が言附けますよ。」

「あゝ、可いとも、ねえ、愛吉、姫様がついて居る人なんか、ねえ。」

聊かも其の意を解せず、偏に膝を搔つて、

「御、御、御串戯おつしやらあ。」

「一寸、愛吉さん、」

と女房優しく呼びかけ、

「よく、おもりをして下さいよ。お泣かせ申さないやうに、可ござんすかい。お前さん、又酒と間違へて飲んぢまつちや不可ませんよ。」

「御、御、御串戯おつしやらあ。」

勝手かつての戸とがかたりとしまると、お夏なつははらりと袂たもとを疊たみへ、高髻たかまげを衝つと低ひくく座ざを崩くづして姿すがたを横よこに、
絶たがるが如ごとく摺すりり寄よつて、

「何どうしたの、お前まへ、」

とて、膝ひざにつむりを載のせないばかり。

愛吉あいきちしやツきりと堅かたくなつて、居丈高ゐたけだか。腕うでを突揃つっそろへて、畏かしこまつて、

「しばらくでえ、」

「愛吉あいきちや。」

「お嬢ぢやうさん……」

二十一

「まあ、お前まへ何處どこに居ゐたんだねえ。」

「え、私わたしは何なに、其處等そこらの芥溜はきだめに居ゐたんですがね。お嬢ぢやうさんは？」

「私わたしかい、」

「何なんですか、蔭かげで聞ききますすりや、御新造ごしんぞうさんもお亡なくなんなさいましたッて、飛とんだ事ことで、」と震ふるへて蒼あをくなつていふ。お夏なつも心こころが激げきしたか、目めのふちに色いろを染そめて、

「あ、愛吉あいきち、お前まへのおともだちの藏人くらんと（軍鶏呼名ぐんけいよびな）もね、人形町じんぎやうちやうの火事くわじッ切きり、何處どこへ行いつたか分からないんだよ。愛吉あいきちてば、お前まへ、おつかさんが亡なくなつても、家が焼やけても、まるで顔かほを見みせないんだもの。」

お前まへ、おつかさんが亡なくなつては、私わたし一人ひとりぼつちぢやないか。人形町じんぎやうちやうの内うちが焼やければさ、私わたしは何なん處どこにも行いく處ところがないぢやないか。

それなのに、些ちつとも來きては呉くれないんだもの、随分ずいぶんだわ。」

愛吉あいきちは堪こらへかね、堪こらへかねて、火ひの粉こなが入はいつたやうにぐツと其そのの目めを壓おさへ、

「だつて、だつて何なんでさ、加茂川かものがわ互たごさんて——その、あの、根岸ねがしの歌うたの先生せんせいね、青公家あをくげの宗匠そうしやうン許まじへ、お嬢ぢやうさんの意趣返いしゆがへしに、私わたしが暴あばれ込んだ時とき、細ろの紋附もんつきと、目錄もくろくの入費にふひを現金げんきんで出だしておくんなすつたお嬢ぢやうさんを大最良おほひいきの——新聞社しんぶんしゃの旦那だんなでさ。遠山金之助とほやまの金のすけさんですよ。」

其そのの方に、意見いけんをされて、私わたしのやうないけすな野郎やろうが、お嬢ぢやうさんと附合つきあつちや、お前まへさんの何なんでさ、爲ためにならねえからッて、いはれたもんで。

私わたしもね、何なんですよ。成程なるほどこいつは尤もつとだ、と思おもつたから、然しかもお宅たくが焼やけた晩ばんでさ、そら、最もうしばらく参まゐりませんッて、お暇いとま乞こひに行いつたでせう。

私わたしも思おもひ込んだんでさ。否いえ、何なんでも参まゐりません。否いえ、否いえ、最もう御無沙汰ごぶさたいたしますッて、然さう

いつたら、お嬢さん、……」

としばらくものを言ふ能はず、隆いが、ぞんざいな鼻を吸つて、

「唯一人の、佃のおふくろにまで、愛想を盡かされて、湯灌場にさへ屋根代を出さねえぢやならねえ奴を、どうお間違へなすつたか、來なくツちや厭、寂しい、と勿體至極もねえ。

涙ぐんでおくんなすつた。あゝ難有えこつた、と思ふと、猶々お前さん、貴女のお身體が大事になつて、御出世の邪魔になるんだから、と萬倍もお前さん、敷居を跨ねえ氣になつたんでさ。

もう何ですぜ、お店から出て、あの門の柳の下で悄乎して、看板の賽ころがね、ぼかん、と噓の出さうな容體、仰向いて又すゝり、

「と面へ打つかると、目が眩んで、眞暗三寶章駄天でさ。路地も壁も突抜けて其切、どんぶり大川へでも落つこちたら、其處で茫乎目を開けて一番地獄の淨玻璃で、汝が面を見て呉れませうと思つたくらゐでした。

すると、近間で、すりばんでせう。私あ自分で何處に居たか知りませんがね、火の手はお宅様の見當でせう。ほい、了つた。お暇乞はもう一晚我慢をすりや可かつたが、こりやお見舞にも上られねえ。然うかと思やあお嬢さんと御病人切。藏人は忠義だつて、羽ばたきをするばかり、袖を叩へて引張り出す方角もあるまいと思ひますとね。矢も楯も堪りませんや。さも貴女と御新造

さんが烟に捲れて赤い舌で嘗められて居なさるやうで、私あ身體へ火がつくやうだ。然うか、といつて唯た今お暇乞をしたもの、と地踏鞆を踏みました、と、我慢が仕切れねえで、駆けつけると、案の定だ。

まだ非常線も張らねえのに、お門にや、枝垂れ柳の花火が綺麗に見えませう。柱は残らず火になつたが、取着的壁が残つて、戸棚が眞紅、宛で緋の毛氈を掛けたやうな棚を釣つた上と下、一杯になつて燃えてるのを私あお宅を行き抜けにお出入の合つたお庇にや、要害は知つてまさ。お嬢さんが生命から二番目の、大事の大事のお雛様。呀！大變だ。深川の火事の時、丁どお節句で飾つてあつた、あの騒ぎに内裏様の女の方、珠のちら／＼のついた冠が唯た一つ紛失したのを、いつも氣にかけておいでなさるくらゐだのに、あゝ、情ない。」

お夏はこれを、うつとりとなつて聞くのであつた。

二十一

「せめて其の骨でも拾つて、腕までも拵へよう、とまつしぐらに立向つた、火よりも赤き氣競の血相、猛然として躍り込むと、戸外は風で吹き散つたれ、壁の残つた内は籠つて、颯と黒煙が引包む。

「無茶でさ、目も口も開きやしねえ、横もうしろも山のやうな炎の車がぐるぐると驅けてまさ、から意氣地はありません。」

夢のやうな氣です。まして棄鉢に目を眠つた處を、裾からするくと引張るから、はあ、こりやおいでなすつたかい。婆さんが衣ものを脱ぐんだらう、三途川の水でも可い、末期に一杯飲みてえもんだ、と思ひましたがね、口へ入つたなあ冷酒の甘露なんで。呼吸を吹返すと、鳶口を引掛けて、扶け出して呉れたのは、火掛を手傳つてました、紋床の親方だつたんでさ。

焼あとへね、遠山さんもおいでなさりや、其の新聞社の探訪の、竹永丹平といふのも來ました。親方と四人でね、柳の根方でしばらく、皆で、お嬢さんの噂ばかりしましたつけ。夜露やら何やらで濕ッほくばかしながら、しら／＼あけの寒いのには皆悄れて別れたでさ、其ッ切。

何處へおいでなすつたか、お行方は知れませんか。又最うお目にかゝるまいと心ぢや極めて居たんですから、口へ出して人に聞くのも何だか氣が咎めてならねえんで、尋ねるわけにもなりませんで、程たつて、勝山さんの御新造が築地の何とかいふ病院で、お亡なんなすつたつて、風のとよりに聞きましたか、ともかくも病院へお入んなさるくらゐぢや、立派にお暮しなさるんだらう。お嬢さんは、お手車か、それとも馬車かと考へますのが一式の心ゆかしで、此方あ蚯蚓見たやうに、芥溜をのたくつて居ましたんで。

へい、決して其の、決して何でさ、忘れたんぢやありません。」
語つて涙を拭ふ時、お夏ははんけちを脚へて居た。

「ぢや何、あの晩火事の時、火の中へ飛び込んだの、大變ねえ。」

「へ、何、そりや、那樣事はわけなしでさ。熟と大人しくして居る時が堪らねえんで。火でも水でも、ドンと來た時はおもしれえんで。へ、何、わけなしでさ。殊にお嬢さん許の灰になりや、私あ本望だつたんです。」と、思はず拳を握つたのである。

お夏は黙つて瞻つた。其の時はじめておくれ毛がはら／＼と眉を掠めた。

「でもお前、目をまはしたとおいひぢやないか。」

「一寸、眠つたんで、時々でさ。」

「だつてお前、屹と火傷をおしだらう。」

直垂に月がさして、白梅の影が映つても、かゝる風情はよもあらし。お夏の手は、愛吉の燒穴だらけの膝を擦つた。愛吉たら／＼と全身に汗を流し、

「え、／＼、脇腹を少し焦しましたが、」

「可哀相に、お見せな。」

「何、身體中、疵だらけだから、から最う何が何だか分かりません。」

とはだかつた胸を慌ててかくした。

「愛吉、それでもお前、無事に逢へて可かつたねえ、眞個によく来たねえ。」

「ですから、ですから、其の上がられました義理ぢやねえんで、お門口へだつて寄りつく法ぢやありませんがね、些と其の、」

と口籠つた。妾沙汰の一條で、いひかねたものであらう。

お夏は聊かも氣に留めず、

「おいひでない。愛吉、お前がそんな事をいつて来ないお庇で、私がどんな出世をしたのよ、どんな出世が出来たのよ。」

と詰るが如く聲強く、

「お前たちを袖にして出世をしたつて何うするの、よ、愛吉、」

「ぢやあ、何、何うしてお嬢さん、貴女は何うして何處においでなすつたんでございますね。」

「芥溜よ。」

「え、」

「私も矢張り芥溜なの。」

「飛、飛んでもねえ。」

「だつて、お前も好なんだから可いではないか。」
と澄ましていふ。

二十三

其の物腰と風采は、人形町の頃よりも、三ツ四ツ年紀もたけ、臍たさも、なほ増りながら、やや人に馴れ、世に馴れて、其の芥溜といへりし間、浮世のなみに浮沈みの、さすらひの消息の、略傳へらるゝものがあつたのである。

愛吉は悚然とした。

「寒くはなくツて、」

「御申戯おつしやらあ、」

「だつて素裕でおいでだよ。」

「其處へ行つちや職人でさ、寒の中も、これで凌ぐんで、」

「威張つたね。」

「へ、どんなもんで、」と今度は水漬をすゝり上げた握拳、元氣如恁にして且悄然たり。

「眞個に眞面目ねえ、あゝ、然う、酒氣のない處で、些と算盤でも持せて弱らして遣らうかな。」

と莞爾と笑み、はじめて瞳を座敷に轉じて、島田の一角いとさした、撫子の花を透彫の、銀の平打が身じろぎに、稍抜け出したのを挿込みながら、四邊を視めて、茶棚に置いた剃刀にフト目が留まつた。

「愛吉、それよりかお前、眞個に一寸困つておくれでないかい。」

「困りますえ。私が、何を。お嬢さん、」

「久しぶりだ、あたつておくれ、」

「お顔を、」

「あゝ、私は自分ぢや不器用だし、をばさんは上手だけれど、目が悪いからツて危ながつて遠慮をするしね。近所ぢや厭だし、何處へ行つてもしやぼんをぬらゝなすくつて、暖かい、あぶらツ手で掴まへられて恐れるわ。困つて居るの、ねえ、愛吉、後生だから、」

「遣りますかね、」

「あゝ、」

「や、そいつあ素敵だ、占めたもんだ。丁ど可いや、剃刀が来て居まさ。」

お夏は車で知つて居る。

「喧嘩をしたもんだから、よく知つておいでだね、をばさんは忘れて行つたに。あひかはらず、

對手さへありやいがみ合ふんだよ。」

愛吉は勇みをなし、

「對手、對手は紋床の親方だけだ。稲荷に仕込まれましたお庇にや、剃刀を持たせた日にや對手といふものはねえんですぜ。まあ、叱言はあとにしてお嬢さん、一寸お襟をお預けなせえ。

すつ、するゝすつと來ら。私あ伊豆の大島へ行きましたがね、から、唐人見たやうなお百姓でも、刃あたりが違ふと見えて、可いなアツていやあがるんで。

「慥う、爲朝は、おらが先祖だ。民間に下つて剃刀の名人、鎮西八郎の末孫で、勢ひ和朝に名も

高き、曾我五郎時致だつて名告つたでさ。」

「太平樂は可いけれど、何、お前大島ツて流しものになる處ぢやないの、大變な處へまあ、」

江の島をさへ知らない娘の驚いたのは然もありなむ。

「で、お嬢さんは何うしておいでなすつたんで？」

「あれ、芥溜を又た聞くよ。そんな事はあとにして、疾く困つてくれないと、暗くなる、寒くなる、さあ、此方へおいで、さあ、」

足許から美しい鳥の立つやう、すらりと身を起す、其の片手に手巾を持つて居たのを、無意識に引くと、放れぬこそ道理なれ。片端膝にかゝつたのを、愛吉は我れ知らずつかんで居たので。

向うへ一所に立たうとすると、足がふら／＼として尻餅の他愛なさ。疊まれたやうにぐたりとなる。お夏は知らずに出ようとす。手の手巾を愛吉が一心になつて掴んだ、拳が凝つて指がほぐれず。はつと腰を擡げると、膝がぶつかつて蜻の脚、ひよろ／＼と縫れて、づしん、又腰を抜く。おもみに曳かれて、お夏も踉蹌く。もつる、裳、揺めく手巾。

「おや、」
と思はず熟と見られた、愛吉の其の顔は……

二十四

「お前しびれを切らしたね。ほ、ほ、」
「む、」
氣を入れると直ぐに、よたり。
「馬鹿だね。」
「これは！」と片手を疊へ、しつかりと支くと、直ぐにお夏が其の手巾で引かれるから、是はとあせるほどなほ放れず。
「だらしない爲朝だよ。」

路小部式

「勢ひ！和朝に、」
強さうな顔をして、漸ツと起きると、ひよろりてトン、足を投げてきよとんとする。
お夏は密と引いて見て、はらりと放した。手巾を疊に残して、隣座敷へ、すいと立つた。背姿で忙しさに、机の前なる紅入友禪の唐縮緬、水に撫子の坐蒲團を、するりと座敷の眞中へ持出したは、庭の小菊の紫を、垣から覗く人の目には、頸の雪も紅も、見え透くほどの淺間ゆるゑ、其處で愛吉の剃刀に、衣紋を抜かむ心組。
坐りもやらす蒲團の上。撫子の花を踏んで立つと、長火鉢の前、障子の際に、投出されたといふ形。目ばかり光らす愛吉を、花やかに顧みて、
「鎮西八郎、爲ちやん。」
「や、」
「曾我五郎、時さん。」
「こいつあ、」
「泥酔の愛ちやんや。」
「え、」
お夏は片襷を、背からしなやかに肩へ取つて、八口の下あたり、緋の長襦袢のこぼる、中に、

指先白く、高麗結びを……仕方で見せて、

「一寸、恠ういふ風でね。」

恠くて酒肴の用足しから歸つて来た女房は、其手中を片襷に、愛吉が背後へ廻つて、互交に睦じく語らひながら、艶なる頸にきら〜と片割月のきらめく剃刀。物凄きまで美しく、向うに立

てた姿見に頬を並べた雙の顔に、思はず見惚れて敷居の際。

此の聲音にも心着かず、餘念もない二人の状を、飽かず視めてうつとりした。女房の何となく悚然としたのは、黄菊の露の置きかはる、霜の白菊を渡り来る、夕暮の小路の風の、冷やかなばかりではなかつた。

明り取りに半ば開いた、重なる障子の薄墨に、一刷黒き愛吉の後姿、朦朧として幻めくお夏の背に蔽はれかゝつて、玉を伸べたる襟脚の、手で搔い上げた後毛さへ、一筋一筋見ゆるまで、ものの餘りに白やかなるも、剃刀の刃の蒼すんで冴えたのも、何となく、其の黒髪の齡を縮めて、玉の緒を断たむとする恐ろしき夜叉の斧の許に、覺悟を極めて首垂れた、寂しき佛に背て見えたのであつた。

「所謂其の影が薄いといった形で。詰り俗にいふ蟲が知らせたんだらうな。」

「え、女房もいふのでありますし、恠やうな事は、先生の前ぢや些と如何な儀ではありまするが、其を聞いた手前なども、又然やうかに考へるので、どうも争はれないものですよ。」

「いや、一々銷魂な事ばかりです。幸病氣は良いのですけれども、實に腸九廻するの思ひで聞くに堪へん。が、其處で。」と問掛けて、後談を聞くべく、病室の寢床の上で、愁然として先づ早や頭を垂れたのは、都下京橋區尾張町東洋新聞、三の面軟派の主筆、遠山金之助である。

「第一手前が巢鴨の關戸の邸の、紅葉の中で、不意に出會した時も然うですが、沈んだ明い、しかも陰氣な、しかし冴えて、冷かな、炎か紅の雲かと思ふやうな四邊の光景にも因りましたらうが、すらりと、此のな、」

と圓満にして凸凹なき、且光澤のある天窓を正面から自分指しながら、相對して、一等室の椅子にかけたのは同社名譽の探訪員、竹永丹平である。

別に必要はないけれども、其の着つけ、背恰好、容貌、風采、就いて看らるべし。……

第二回の半ばに出でたり。

此の處築地明石町、明石病院の病室である。

探訪員は天窓をさした、其の指を、膝なる例の帽子の下に差入れた。此のいかゞはしき古物を、兜の如く扱ふこと、こゝにありても亦然矣。

却説、打咳き、

「ト此の天窓の上へ、艶麗に立たれた時は、餘り美麗で、神々しくツて、其處等のものの精靈が、影向したかと思ひました。櫻の精、柳の精といふやうにでございますな。しかし寂寞とした四邊の光景が、空も餘りに澄み渡つて、月夜か、それとも深山かと思はれるやうでありましたのは、天地が、其の日覺悟を極めて死に行く、美人に對する、彼の同情といふものを表はしたのでありませう。

見ると、——柳屋のだらうぢやがせんか。面と向つてつひぞ言を交はしたといふこともないので、先生、貴下も御同然に、こりや社用外のさがしもので、しばらく行方が知れないのを、酷く心配をいたして居りましたで、思はず膝を拍つて私。

（お夏さん。）と申しました。……

思ひがけない様子でした。こりや理だ。實は私の方が思ひがけないんで。お顔を覚えて居りません。誰方、といふ挨拶で、些と照れましたがな。以前、人形町邊に居りました時分一寸々々お店へ參つて、といつて此の天窓に對して、（肖顔畫などを孫どもに買つて遣りましたで存じて居

ります、）などと遣つたですて。

先づ、これへ、と人様のものでお愛想。自分も拜借をして居りましたし、未だ二ばかり据ゑてありました陶器ものの床几を進めると、悪く辭退もしないで靜に腰をかけたんですが、もみぢの中に其の姿で、如何にも品が佳い。これでさげ髪だと何の事はない、もみぢ狩の前シテといふ處ですが、島田の姉さんだから、女大名。

私は太郎冠者といふ奴、腰に瓢があれば一さし御舞ひ候へ、といひたい處でしたが、例の下卑藏。殊に當日は彼處を心掛けて參つたので、煙草は喫まず、其の癖、樹下石上は思ひも寄らん大俗で、唯見物も退屈、と豫しめ、紙に捻つて月の最中といふのを心得て居ましたから、（些とお

歌でもなさりませんか、）といひますとね。

どゞ一か端唄なら、文句だけは存じて居りますが、といつて笑顔になつて、それはお花見の船でなくツては肖りません。こゝはどんな方のお邸でござんすえ、ツて聞かれたから、（こりや關戸とおつしやる御華族でいらつしやる。）と答へますと、華族さんなの。それでは町人が來ては叱られませうツて莞爾しました。

お夏は爾時町人といつた。

「痛快でがした。——」

服装といひ、何となく人形町時分から見ると落着きが出て氣高い。私最初は其の關戸伯爵の姫様と間違へて、突然低頭に及んだくらゐで、天下此の人に限つてはとは思ふが、其處は女であらうと、淺はかにも考へたが違ひました。

這個江戸兒、意氣未だ衰へず、と内心大恐悦。大に健康を祝さうといふ處だけれども、酒ますまい。其處で、志は松の葉越の月の風情とも御覽せよ、且其の、憚んながら擲揄一番しようと欲して、ですな。一ツ召食れ、といつて件の餡ものを出して突きつけた。

「柳屋のに、」

と金之助は眉を擧めた。

丹平泰然として、

「然やう、」

「驚きますな。」

と遠山は止むことを得ざらむ體に、

「あの窈窕たるものとさしむかひで、野天で餡ものを突きつけるに至つては、刀の切尖へ饅頭を貫いて、食へ！……といった信長以上の暴虐です。貴老も意氣が壯すぎるよ。」

「先生、貴下は又、神經痛如きに、然う弱つては困りますな。」

「何、私は最う退院をするんだから構はんが。」

とて愁ふる色あり。

丹平は打領き。

「しかし、佛の像の前で、其の言行を録した經を讀むと同一です。此處でお夏さんの話をするのは。まあ、お聞きなさい。」

と聲を低うしていつた。

此の突當右側の室に、黒塗の板に胡粉で、「勝山夏」——札の其のかゝれるを見よ。

二十六

病室の主客が、如慙く亡き佛に對する如き、言語、仕打を見ても知れよう。其の入院した時、既に釣臺で昇がれて來た、患者の、危篤である事はいふまでもない。

「實は其の人を歎美して申すのですから、景氣よくお話しはしますけれども、第一私がもう恚ういふ内にも、(難有う)といつて、人の志を無にせん風で、最中を取つて、親か、祖父の前でもあるやうに食へなすつた可愛らしさが、今でも眼前にちらついてならんでがすて。」

鼻を詰らせながら、掌で口を拭つて咳一咳。

「私もな、昨年一人、末ッ兒を亡くしたですが、それを思ひ出してもこんなぢやない。」
と椅子をずらして、

「で、何でげすか、どうしても六ヶしいと申すんで？」

「あ、看護婦がいひます、勿論悉しいことは話さない。

入院した日は、何事もなく静かだったが、一昨日の晩でした。

私は、はじめ申戲かと思つた。

うら若い女の聲で、

「あつうあつう、」

といふのです。

「暑い！暑い！」

と聞えて、

「暑いよう、暑いよう、」といふのが、夢中のやうだね。

「快くなりますよ、直によくになりますよ、」とひそくすかすのが、幽に聞えるから、あ、それ

ぢや病人だな、と思つたんです。ひっそりしたつけが、又、

「熱いねえ！熱いねえ、」

「最う直ぐに快くなりますからね、」

「あ、」

と調子高に、しかし上の空のやうにいつて、少し氣がついたか、落着いた聲で、

「熱いこと！」

恚ういつてね、其ッ切。ひっそり陰氣になつたが、いや、其の間、はッと思つて、私も呼吸が

つけないのでした。

丹平しめやかに頷くことあまた、び、

「成程々々成程。」

「二三日最う手はかゝりませんから、其處に、」

金之助は扉に並べて一枚を敷いた、疊の隅、鐵の火鉢の方に目を遣つて、

「編物をして居た附添のね、福崎(看護婦)といふのに、(何うしたの)ツて聞くと、何も問ひ返す

までもない。

「苦しいんですよ、」といひます。

「不良いのかね。」

(入らしつた時から釣臺でしたから)

それさへ其の時まで私は気がつかないで居たくらるで。尤も前晩、夜更けてから些と廊下に入組んだ蹺音がしましたつけ。恚うやつて時候が可いから、寂寞して入院患者は少いけれども、人の出入は多いんですから、知らなかつたんです。

「まさか自分の病院で、治療するといふわけにも行かなかつたものでありませう。」

「は、あ、祕密のやうですかい。」

二十七

「だから私も其の、事件の場所へ立會つた程な、此の度のことには就いては淺からん縁がありますけれども、實は遠慮をして差控へて居たのがす。然し、経過が、何うか。容體が、何うか。氣になつて、どうも心配でなりません、處が、幸ひ、

といひかけて、兀天窓を、はツと壓へ、

「貴下の御病氣を幸ひといつては恐縮千萬、は、は、は、と、四邊を憚つた内證笑。

「實は私も自分で幸ひと思つて居る。」

「否、恐縮ですが、又、然ほど大した御容體でもなかつたと見えまして、貴下が、此方へ御入院

といふ事は、眞個、今朝はじめて聞いて一驚を吃しました。勿論社の方へは暫時御無沙汰、そんなこんなで、些とも存じませんで、大失禮。其處で、すぐにお見舞と申す内にも柳屋の方が主であるやうで相済まんですが、尤も向うへ顔出しをする氣はないので。それでなくツても私商賣などは、祕密の祕の字でもある向には、嫌はれるで、遠慮をしますから、惡からず。」

私はまた(何の病氣)と聞くと、

(熱が酷いんでせう)といったばかり。

(婦人だね)

(はい、少いお嬢さん)

(幾歳ぐらるの)

(二十か、九でおいでなさいませう。)

柳屋のは最う些になつたでせう、こりや少く見えたくらるで。

其處まで聞いて、まさか、名は?とまで尋ねるでもないから、其まゝにしましたが、一體何となく繼穗のない、素氣ない返事だと思つたんですが、尤もだ。ぢや、山の井先生のために、此の病院長が、全院を警戒して祕密にしたんだ。」

「さうでがすとも、極内證ですから、憚つて、自分の病院があるのに、此方へ依頼をされたんで。

此の明石病院の院長は、山の井醫學士の親友でがす。

尤も他の新聞にも出ましたから、事件は、さして秘密ぢやありませんまいが、自分がお夏さんの世話をしておいでだった光起(山の井醫學士の名)さん。

薄々青柳町に圍つてある、妾だ〜といふ風説なきにしもあらずだつたもんですから、多くは知らんにもせい、と聲をひそめる。

「何うして、私は又、不意に貴老が見えたのを、神の引合はせかと思ふ。一寸筋向うのが柳屋のだと、聲をさへかけて下すつたら、素通りにされても怨まない。實際然うでない、纔か廊下を七八間離れたばかりで、一篇悲劇の女主人公、特に光榮ある關係者の一人で居ながら、何にも知らないで退院する處でした。あとで聞いては千載の遺憾だつたに、少くとも其の呼吸のある内に、時鳥と知つて聲を聞いたのは、光榮です。私は是れを一聲の時鳥だといひます。あの血を吐く聲が實に腸を斷つやうで。竹永さん、」

と面を上げて、金之助は今も其の音や聞ゆる、と背後を憂慮ふものの如く、不安の色を湛へつ

つ、
「引續き此の快晴、朝の霜が颯と消えても、滴つて地を汚さずといふ時節。夜が明けると此の芝濱界限を、朗かな聲で聲で――

生鏝と賣つて通る。鬨こい、鬨こいは、威勢の好い小兒が呼ぶ。何でも商ひをして歸つて、佃島の小さな長屋の臺所へ、笹と天秤棒を投り込むと、お飯を掻込んで尋常科へ行かうといふのだ。賣り勝たう、賣り勝たうと、調子を競つて、そりや高らかな沙えた聲で呼び交すのが、空気を漉して井戸の水も澄ますやうに。其に居まはりが居留地で、寂として静かだから、海まで響いて、音楽の神が棲む奥山から罅でも返しさうです。其の音楽の神といへば、見給へ、此の硝子窓の向うに見える、下の外科室の屋根を隔てた煉瓦造りを。外國婦人が住んで居てね、私なんぞにや朗朗としか聞えんが、凡そ目には見えんで、各自は其の黒髪の毛筋の數ほど、此の天地の間に、天女が操る、不可思議な蜘蛛の巣ぐらゐるはありませう、戀の糸に、心の情が觸れる時、音に出づるかと思ふやうな、微妙な聲で、裏若いのが唱ふ。ピアノを調べる。時々あの向うの硝子戸を取りまはした、濃い緑の葉の中に、今でも咲いて居る西洋種のぼつとりした朝顔の花を透かして、藤色や、水紅色の裾を曳いたのがちら〜する。日の赫と當る時は、眩いばかり、金剛石の指環から白光を射出す事さへあるぢやありませんか。

路小部式

同一色にコスモスは、庭に今盛だし、四季咲の黄薔薇は一寸覗いても最う其處等の垣根には咲いて居る、とメトロポリタンホテルは近し、耳馴れぬ洋犬は吠えるし、汽笛は鳴るし、白い前垂した廚女がキャベツ菜の籠を抱へて、背戸を歩行くのは見えるし……」

刻下、口を衝いて數百言、竹永は我が探訪の職に對し、生殺與奪の權を握れる、將かれ神聖なる記者として、其の意見に服し、其の說に聽くこと十餘年。未だ此の日の如きを知らなかつた。三面艶書の記者の言、何ぞ、それ爾く詩調を帶び來れるや。惘然として耳を傾くれば、金之助は其の筋疼む、左の二の腕を撫でつついつた。「これ實に侮るべからざるハイカラですよ。」

二十八

「竹永さん、金之助病の爲に此の境に處して、尙巴里、伊太利の歌に魂を奪はれず。却つて佃島の(鯛)に心を澄まし、初冬の朝の鯉にも我が朝の意氣の壯なるを知つて、窓の入口に河岸へ着いた帆柱の影を見ながら、此の蒼空の雲を眞帆、片帆、電燈の月も明石ヶ浦、どんなもんだ唐人と太平樂で煩つて居たのも、密に柳屋のお夏を健在、と思つての事であつた。」
いひかけて寂しく笑つた、要するに記者の凡ての言は、お夏に對する狂熱の勃發したものであつたのである。

「それが何うです。」

(熱い、熱い、熱いねえ、)

今もいひます通りね、一昨日の晩は、其ッ切だつたが、昨日の午後二時頃には又、

(熱いの、熱いねえ、熱いねえ、)

晝間だから、夜分のやうにはないんですが、傍で何かいつて切に慰めたやうだつた。

(熱いわ、何て熱いんでせう、)

とあきらめたやうに、然も哀にきこえた處へ、廻診の時間ぢやないのに、院長が助手と看護婦長とを連れて、ばたくと上つて見えて、すつと此の室の前を通つたんだね。

其處へ私の看護婦が來ましたが、體溫器を掛けにです。戸口へ立停つて、しばらく其の方を見て居ました。

しばらくすると、皆下りて行く。看護婦が入つたから、

(彼處のはわるいのかね、)

(はい、どうも不可ませんさうです、)

……は心細い。

(氣の毒だね、)

(眞個にお可哀相でございますよ、)と婦人は相身互、又一倍と見える。

私は素人了簡で、何とか、其の熱が上らないだけの工夫はありさうなものと思つたから、

(矢張り冷して居るんだらうか)

(氷嚢を七箇で最う晝夜通して居ますんです)

(七箇!)

と私は驚いた。

(お頭へ一箇、一箇枕におさせ申して、胸へ二箇、鳩尾へ一箇、兩足の下へ二箇です。)

恚ういひひく體温器を入れられた時は、私は思はず、人事ながら慄然とした、お庇で五分其時は熱が上つたですよ。

丹平も呆氣な顔して、

「酷うがすな。」

「酷いんですとも!でもまあ、氷嚢を七ツと聞いて、疾に對して殆ど八陣の備だ。いかに何でも、と思つたが不可ない。」

日の暮方に、又、夕河岸の鯉、生鯉、鱒、鱒こ、鱒こい——伊太利ぢや晚餐の朗々朗が聞えて、庭

のコスモス、垣根の黃薔薇、温室の朝顔も一際色が冴えようといふ時、廊下が暗くなると、

(あ、熱々々々)と火がついたやうに、凡ての音楽を打消して、けたましく言ひ出したぢやないか。

何うです、それがお夏さんだ。

餘り何だから、私は廊下へ出て、二三間、其方の方へ行つて見ました。薄暗い扉に紙を貼つて、昨日の日づけで、診療の都合により面會を謝絶いたし候——醫局、とぴたりと貼つてある。愈々

穩でない。

それまで見たが、名札を見ようといふ氣もなし、扉は其の字が讀めるやうに此方へ半ば開けてあつたんですが、向うには、附添と見えて、薄汚い、然ういつちや悪いが、それこそ穴だらけの

衾を素膚に着た、風體のよくない若い男が、影のやうに立つて居ました。

で、爲ることは看護ですな。昇永水の金盥と並べた、室外の壁の際の大きな器に、氷嚢から氷

が溶けたのを、どくどくと開けて居ました。けれども、私は、其の姿の、ぼツとしたのといひ、

背後だつた形といひ、折から、其の令嬢といふのを惱ます、病の魔のやうな氣がして、此方も病

人だ、悚然としましたよ。

すぐにひよろ／＼と室へ入つて、扉を音もなくひとりでに閉めるとね、トタンに燈と點いて來

たと思つた電燈が、すぐに忘れものを思ひ出して引返したやうに消えたでせう。

(熱いよ!熱いよ!)と言ふでせう、まさに病魔だと思つた奴がぢや、竹永さん——可哀相に愛

吉ですな。」

「愛吉、愛吉、」

と二ツいつて二ツ頷いた、丹平の打惚れた物腰舉動、いかにもく約束事、と断念めたやうな様子であつた。

「全く病の魔と見えましてがすかな、争はれないもんだ。青柳町の女房は——前申した如くて、此をお夏さんの生命を縮める鬼のやうに思つた。観画、其の剃刀で殺つたですな。たとひ人違ひにもしろでがす。」

繰返して重ねて、

「争はれないもんだ、争はれないもんだ。」

しばらくして金之助が、

「しかし竹永さん、奴あればこそ、お夏さんは、我が柳屋の姉さんで、單に醫學士山の井光起君に對するだけでは、尋常、勝山の娘に留まる。」

奴なきお夏さんは、撞木なき時の鐘。涙のない戀、戦争のない歴史、達引きのない江戸兒、江戸兒のない東京だ。あゝ、しかし贅六でも可い、私は基督教を信じて可い。

私が愛吉の尻押しをして、權門に媚びて目錄を貪らむがために、社會に階級を設くるために、弟子のお夏さんに、ねえ竹永さん。……

合弟子の、山河内といふ華族の娘の背を、團扇で煽がせた。婦人ぢや不可ない！其の體慣を、なり替つて晴さうといふ、愛吉の火に油を灌いで、大の字形に寝込ませた。

丁ど同じ日に一足後れて、お夏さんを娶らうといふ、山の井醫學士の親類が、どんな品行だか、内聞、といふので、お夏さんの歌の師匠の、根岸の鴨川の處へ出向いたのが間違の因です……

今まで其處にふんぞり反つて、暴れて居た床屋の職人が、其の人の使者だといふお夏さんを、譬ひ親だつて好くいほうか。

況して、縞子の襟も、前垂も、無體平生から氣に入らない、凡そ粹といふものを、男は拘摸、女は不見轉と心得てる、鯨坊主の青くげだ、ねえ竹永さん。

よくも、悪くも、背中に大蛇の刺青があつて、白木屋で萬引といふ題を出すと、同氏御裏方、御後室、いづれも鴨川家集の讀人だから堪らない。ぞ、や、なり、かなく、侍る、なんと、手

爾波を合はされて助りますか。……あとで竹永さん、貴下が探りましたね、第一、愛吉が知つて居たんだね。……

お夏さんは人知れず、あの氣象には珍らしい、豪家が退轉をすといふほどの火事の中でも、

兩親で子の大事がる雛だけ助けたほど我まゝをさした娘に、いひ遣した遺言とかで、不思議に手習をする、清書草紙に、人知れず、醫學士(山の井光起)の名を書いて、惚れ抜いて居たんださうですな。

何と、其の戀人を、然も自分が、師匠のいひつけて焔がせられて、口惜しがつて泣いた、華族の娘に取られようとは、何うです。

一人は醫學士の意中を計つた親類の周旋。一方は其の母親から持込んだ華族の縁談。

山河内定子は、今現に、山の井醫學士の令夫人だ。竹永さん。

私は蔭ながら、大なる責任者だ。

私が愛吉なら屹と行る、愛吉ならずとも、こりや屹と行らねばならん處だ。定子を殺さねばならないわけだ。確だ。

が、幸か、不幸か、二三冊読んで居るから、まさかに剃刀を逆手に取つて、可愛い娘のために、其の戀の敵を、暗殺しようとは思はなかつた。

しかし文字のあるものが、目に一丁字のない床屋の若いものに、智慧をつけて、嵩じたいたづらをしたのが害になつたんだから、なほ責任は重大です。しばらく行方の知れない内も、寢覺が悪くツてならなかつた。お夏さんが然うと知つたら、私が先んじて行れば可かつた。私は死んで

も可い、然うすれば、まさかに人違ひをするやうなことはなかつたらう。

平生に似ず言もしどろで、はじめの氣焰が、述懐となり、後悔となり、懺悔となり、慚愧となり、果は獨言となる。

體温器がばたりと落ちた。

かけ忘れて寢着の懷にすつて居たのが、身を揉んだので這つたのである。我に返つて、顔を見合はせ、二人一所に、はゝゝ——歎息した。

三十

「申戯ぢやない眞個です、私は基督教になつても可い。今の其の根岸の歌人に降伏をして、歌の弟子になつても構はん。何うかして治して遣りたいぢやありませんか。」

「いや、先生、貴下は凡て空にもをお考へなすつてさへ其の通りだ。それから見ると、私は一倍上だらうと思ふですがよ。何故とおつしやい。あの娘が、これから、故と殺されに行かうといふ日、其の菓子的一件でせう。悪氣でしたのではなかつたのですが、死なうといふ覺悟をした、それも二日三日と間のある事ではない、四五時間前といふのに、もみぢ

の中で、さしむかひに食べられた時を思ひますと、我最う、此處が、

と大きな懐中物で、四角に膨れた胸を撫でつつ、
「何ともいへないので、まるで熱鐵を嚙下す心持でがすよ。はあ、それぢや昨日、晩方にも苦し
みましたな。」

「あゝ、然うです、」

金之助は話の絲の、亂れた苧環巻きかへし、

「其の、氷嚢をあげて居た、厭な人影が中へ入る、ひとりでに扉が閉る。途端に電燈が點くかと
思ふと、すぐに消えた。薄暗を、矢のやうに、上衣なしの短衣すぼん、丁ど休憩をして居たと見
える宿直の醫師がね、大方呼びに行つたものでせう、看護婦が附添つて、廊下を駆けつけて來た
のに目禮をして、私は室へ戻つたですがね。停電暫時で行燈を點けるといふ、いや、酷い混雜。

其の内に、

(おゝ、熱い事、)

と其の聲が、一度不思議に婀娜ツぼくきこえた。何となく正氣でいつたやうに思つたが、看護
婦に聞くと注射をしたんださうで、あとは昏睡ですと。

それも二時間とは續かない、すぐに又、

(熱々々々！)

は情ないぢやありませんか。

(熱いよ、熱い、熱いよう、)

と夢中で泣く。それは未だしもだ、竹永さん。

(熱いなあ、熱いなあ、)

喃といふに至つて、私は天窓から此の搔卷を引被つて、下へ、下へ、とすり下つて、寢床に沈
んだが、なほ聞える。

(暑いなあ、暑いなあ、)

其處で、もぐつても、くゞつても兩方の肩から水を浴びるやうに、ぞく／＼するから堪らなく
なつて、刎ね起きて、きよろ／＼見ると、其側の帆柱が見える硝子窓の上の方が、眞暗に三寸ば
かり透してあつたから、看護婦は、と見ると、扉を細目に開けて、白い身體をびつたり附着けて、
突當りの其の病室の方を覗いてね、憂慮しさうにして居るから、聲をかけて閉めて貰つて、

(悪いか、)

(とても、)

(氣の毒だ、)

(お可哀相でなりません。)

早くしておくれ、早くさ、早くさ、と其の病人のじれる聲は、附添が賺しても、重い頭を掉るんでせう。

すたくと廊下を駆ける音。

(幾人ついて居るの、)

(三人です。)

(親たち?)

(否、此方の看護婦と、向うから附いておいでなすつた、それはく美しい、看護婦さんと、最う一人職人のやうな若い衆が、最うつきつきりで、此の間ツから夜一夜一目も寐なさないで、狂人のやうですよ。)

私は愛吉とは思ひも寄らない、が、先刻見た一件だ。

(何だね、それは、)

(家來衆とも見えませんが、お嬢様、お嬢様といつて居ます。多分乳母さんの兒で、乳兄弟ともいふやうななんぢやありませんか。何しろ一方なりませんお主おもひ、で、お嬢さんがね、あつ、あつといとおつしやる度に、額からたらく、膏汗を流すんですよ。)

(水天宮様の方角は何方ですがえ、)と聞きましては、一室に大勢ですから、お嬢さんの寢臺の下

へ、はひ込んぢや手を合はせて拜みます。

まるで夢中ですもの、すぐに忘れては又、

(モシ、茅場町は何方でえ、)ツちや、寢臺の下へもぐり込んで拜みます。

(いちらしくツて、皆見ては泣くんですよ。)

といつて、涙ぐんで居るだらうぢやありませんか。)

丹平は又溜息をした。

「噫。」

金之助も吐いきをついて、

「看護婦も話すうちに鼻をつまらせて、

(全で氣が違つたやうですよ。つい昨夜、夜中は些とばかり、すやくしておいでだつたさうで

すが、七箇もかけた氷嚢が、しばらくの内に溶けますから、始終、氷を割りますが、又夜がふけ

ると、四邊へ響きまして、カンカンツて、凄いやうだもんですから、うるさかつたと見えて、お

嬢さんが、

「厭な音ねえ、」ツて現に然うおいひなさいますと、何と思つたのか、若い衆が、大きな氷の塊を取つて、いきなり、自分の天窗へ打つつけたんですつて。一念か、こなぐに、それはもう、霜柱のやうに砕けましたツてね、額を斜ツかけに打切つて、血がたら／＼出たさうです。それを痛さうな顔もしないで、

「モシ、水天宮の方角は、」ツて……」

私は皆まで聞かないで、引被つて了つたが、成程愛公だ。竹永さん、

「馬鹿め。」

「否、」

「野郎、しやうのない瓦落多だが可哀相に、可愛い奴だ。先生、憎くはない。」

丹平此處で又椅子を寄せ、

「先生、如何です、呼ばうぢやありませんか、一寸な。」

「何うして顔が見られるもんか。いぢらしくツて、」

「しかし……」

遠山は頭を掉つた。時に其眉秀でて鼻筋通り、口を一文字に結んだ、凜たる記者の風采は、直ちに老探訪をして伏従せしめ得たのであつた。

「成程々々、成程。いや、こりや私、些と了簡が若うがした。」

「今日はなほ酷い、夜があけると最う、

(熱いなあ、熱いなあ、)

で、鯉——生鯉も、鱒こも、私は耳にや入らんのだ。尤も、昨夜は耳について、私も寐られな

いから、初中うとくして居たので、迎も氣の毒で聞くに堪へんから、早く此處を引上げようと

思つて居た處へ、貴老が見えて、恚う柳屋のと知れては、何とも口へ出していふ言はない。

昨夜から今日の午へかけて、注射を三度したと聞いたです。

其の所爲か、今は寂寞して居るでせうがね、さあ、然うと知れると、残酷なやうで申譯はない

が、血を吐く聲も懐かしい、是ツ切、聲が聞えなくなつて何うします。

竹永さん、貴下を今夜は歸さないよ。隣のホテルからお飯が取れるから、それでも食つて、病

院だから酒は不可んが、夜とともに二人で他所ながらお伽をする氣だ。

而して貴下が、佛像の前で、其の言行録を誦する經文だといつた、悉い話を聞きませう。

病人に代つて其の人の意氣の壯なのを語るのは、少くとも病魔退散の祈禱にもならうと思ふ。」

「至極でがす。いや私望む處、先生といふ楯がありや、二日でも三晩でも、お夏さんの前途を他

所ながら見届けるまでは居坐つて動きません。」

「私も退院の日延べをする。其處で、其處で竹永さん、關戸の邸の、もみぢの下で、其の最中を食べてから何うしたんです。」

「私もつツと乗が来て、もう一ツお食んなさい、と自分も撮みながら勧めました。」

(澤山)とあるから、(それぢやお土産に)と洒落にいつて、捻つてお夏さんに差着けると、腕もちらりと透きさうに、片袖の振を、黙つて此方へ向けました、受け入れようといふんでね。

(もみぢを御見物と見えますが、これから巢鴨へ抜けて、)先生、あの邸はね、私どもが居た池のふちから、通天門と額を打つた煉瓦の石の門を潛つて、矢張紅葉の中を裏へ出ると、卵之吉といふ植木屋の庭を、庚申塚の手前へ抜けられますわ。

(其處から、瀧の川へでもお廻りか)と尋ねると、(上野へ)といふ。

私方々の紅葉の風説などと、出鱈目に饒舌るのを、嬉しさうに聞いて居なすつたつけ、少し傾いて耳を澄まして、

(可いことね)といった。

(はて)私には何だか分らん。

(お囃子の笛が聞えますよ。)

些とも聞えん。

(はてな)と少々照れたでがす。其の癖心寂しいほど寂——
花にはあらず七重八重、染めかさねても、もみぢ衣の、膚に冷き、韓紅。
「——閑として居るぢやがあせんか。」

三十二

「お夏さんが、

(聞えますよ。あら、ヲヒヤラー、ヲヒヤ、ヒウーイ、ねえ、貴下、聞えませう。)

と打傾いて、遠くへな、私を導いて教へるやうな、其の、目は冴えたがうつとりした顔を熟と見ながら聞き澄ますと、此の邸ぢやありません。

もみぢを隔てて、遙に悠々、雲の中で吹き澄ますといつた音色で、ヲヒヤラー、ヲヒヤ、ヒウーイ、ヒヒヤ、イウリ、ヲヒヤラーアイ、ヒウヤ、ヒユールイ、ヒヤウルイヒ、と蒼空へ響いて、幽に耳に留りました。

(成程、お囃子ですな。)

と腕組をして、おつき合ひに天窓を突出して居ると、

(何處でせう、ほんとに好いこと。)

といつて葛桶を——ぢやない——其の陶器の床几をすつと立ちました。

(え、御近所だから、慶喜様のお住居かも知れません。)

(然う、)

といつて、お夏さんが空を仰いで見ましたがね……」

虹を刻んで咲かせた色の、高き梢のみぢの葉の、裏なき錦の帳はあれど、蔽はれ果てず夕春日、光颯と射したれば、お夏は翳した袖几帳。

「丁ど、ばら／＼と散つて来るのが、其の夕日を除けた、袂へ留まつたのですがね。餘りに綺麗だ。これにや相當のワキ師があらう。

尤も大抵禿げて居ますで、諸國一見の僧になりや、ワキヅレぐらゐるは勤まらうが、實は私、狂言方だ。

樂屋で囃子の音がすれば、最う引込んで可い時分。フト氣が着いたのは、悪くすると、こりや出家でない。色ワキを此處で待合さうなどといふ、寸法で来たのかも知れん、それだと邪魔になる。さらば急いで参らう、と思ひますとね。

妙なことをいひました。

其大木のもみぢの下を、梢を見たなり、くる／＼と廻つて、

(否、お雛様が遊ぶんでせう。丁ど此の上あたりで聞えるんですもの、而して、こんな細い、小さな音するのは五人囃子が持つて居る、かはい、笛でなくツてさ。)

異はつたことのおほせ哉。お夏さんは熟ツと見て居る。帯も襟も、顔なんざ其の夕日にほんのりと色がさして、矢筈の紺も、紫のやうに見えましたがね。

暮れか、つて来ました。夜晝を分けるやうに、下の土は冷たく濡れて、黒くなつて、裾が薄暗く見えたんで、否、申戲はよして餘り艶麗過ぎる。是なり天人になつて、雲の上へ舞ひ昇られてはなるまい、と、のこ／＼と近く寄つて、

(最う暮れ方になりましたな。)

とさそひをかけると、はつと氣がついたやうに、

(あ、暗くなつて来た、こんな處に遊んで居るのは焼け出されたお雛様でせうねえ。

こんなに眞赤で、これが炎になつたらどうでせう。而したら死んで了ひませうねえ、氣味が悪いやうになりました。)

と、いふことが少し變だ。

氣つけをと思つたし、聞きたくはあつたしで、

(度々御災難でありましたな。唯今は、どちらに、)

(ついで此の青柳町のね、菊畑のある横町ですよ。些とお寄んなさいましな。母は亡くなりましたが、をばさんが居ますから、)

成程をばさんが居ますからな筈でがした。……自分は居なくなる積りだから。

(それでは、)

(左様なら、)

と挨拶をして、もう一度梢を視めなりに、づつと向うへ、紅葉の下を、うしろ姿になりましてな。其切見返りもしなかつたが、ヨヒヤ、ヒウイ、ヒヒヤ、イウリといふのが、いつまでも私、耳の底に残るんで。獨で見送つて居ると、大浪の裾が何處までも畝つた形の、低くなつた方へ遠ざかつて行くのが、何となく暮方で、影が薄い。

ト緋色の雲の、隧道の入口、突當りに通天門とある。彼處のもみぢは、實際、其處からが自慢なんです、足も停めず、視めもせず、アーチ形に中の透く、燃え立つ炎のやうな中へ、消え失せた體に入つて了つた。

氣になる。

私、すぐあとから驅出して、

「件の通天門を入ると、赫と明るく、不殘眞紅。兩方から路をせばめて頬がほてるやうだが、それは構はん。

お夏さんは、と見ると此の一條路、大分長いのに見えず。きよろ／＼四邊を眺したが、まさか消え失せたのぢやあるまい、と直ぐに突切つてぐるりと廻ると、裏木戸に早や山茶花が咲いて居て、其處を境に巢鴨の卵之吉が庭になりませ。

もみぢは此處も名物だが、些と遅い。紅は萬兩、南天の實。鉢物、盆石、水盤などが、霞形に壇に並んだ、広い庭。縁には毛氈を敷いて煙草盆などが出してあり、世界が違つたやうに、此處は外套やら、洋服やら、束髪やら、腰に瓢箪を提げた、絹のばつち革足袋の老人も居て、大分の人出。其の中にもお夏さんが見えますまい。

はてな、巢鴨の通へ出て了つたか、餘り不思議だと思ふ。生垣の外は、馬士やら、牛士、牛車、からくたと歩行いて、其らしいのありません。

夢かと思ふと、然うぢやない。漸と氣が着いた、分らないのも道理こそ。

向うに見える、庭口から巢鴨の通へ出ようとする枝折門に、曳きつけた腕車の傍に、栗梅のお

召縮緬の吾妻コオトを着て……いや、着ながらでさ、……立つて居たのがお夏さんでね。車は今雇つたのぢやありません、裏道から大廻りに、もみぢ邸を卯之吉の木戸まで廻らせて、此處へ待たしてあつたんで。コオトなぞも預けてあつたものと思はれます。で、直ぐに上野へ殺されに行かうとする處だつたのです。一體何處で降りましたか、」

之は探訪も知り得なかつたのであつた。お夏は其の日、人知れず、今はのなごりを、浅瀬の石に留めたので。俤橋の俤の、月夜の狀に描かれたのは、其の俤を寫したのである。

見よ。(此の第一回を。) 然れば、お夏の姿が、邸のみぢに入ると齊く、だぶく肥つた、赤ら顔の女房が、橋際の件の茶店の端へ納戸から出て来た。砂利を積んだ車が又ぐらくと橋を揺つたので、砂塵濛々、水も空も、日が暮れて月が冴えねば、お夏がゐんだ時のやうに澄みはしない。些と疾いが晚餐。豫てあつらへてあつたから、此時看護婦が持つて来たので、日は未だ鐵砲洲の帆柱の上に高い。

お夏の病室も、危く物靜である。

愛吉の咽喉を鳴らした其の夜の酒は、日が暮れてからであつた。女房は暮合ひに歸つて来て、間もなく、へい、お待遠、と臺所へ持込んだけれども、お夏の心

づけで、湯錢を持たせて、手拭を持たせて、錫の箱入の薰の高いしやぼんも持たせて、紫のゴロの垢すりも持たせる處だつた。が、奴は陰でなく面と向つて、舌を出したから、それには及ばず。あ、未だそれから羽織るものを、固より男ものは一ツもない。お夏は衣紋かけにかけてあつた、不斷着の翁格子のを、と笑ひながらいつたが、それは串戲。襟をあたつて寒くなつた、と鏡臺をわきへすらしながら自分で着た。雖然……愛吉は、女房の藍微塵の肩に掛けて、暗くなつた戸外へ出たが、火の玉は、水船で消えませす。湯の中で唄も謡はす。流で喧嘩もせず。ゆつくり洗つて、置手拭、日和下駄をからりと歸り途、式部小路を入らうとして、夜目にもしるき池の坊の師匠が背戸の山茶花を見て、しばらくしたのは、恐らく生れてはじめてであつたらう。

其の石壇の處まで来て、詩人が月宮殿かと想ふやうに、お嬢さんの家を見た時、小じんまりとした二階の障子に明がさした。

思はず頸をすくめたが、密と格子から杳脱の下駄を覗いて、すぐに遠慮して廂合に潛り込んで、ちよろりと臺所へ面を出すと、開けてはあつたが、働いても居ず、女房は長火鉢の傍に、新しい能代の膳立をして、ちやんと待つて居た、さしみに、茶碗、煮肴に、酢のもの、——愛吉は、ぐと咽喉を鳴らしたが、はてな、此邊で。……

食事が済む、と探訪員は、渠自から經典と稱する阿夏品を誦しはじめた。是よりさき金之助は、事故あつて、訪問の客に面會を謝する意を、附添の看護婦に含ませたことはいふまでもない。「話の續は、今其の吾妻コオトを着た處でしたな。それから、同一く、それも矢張、とつて置いたものらしい。藍鼠の派手な縮緬の頭巾を取つて、被らないで、襟へ巻くと、すつと車へ乗る。庭に居たものは皆一齊に其方の方。

母衣をきり／＼と巻き下ろして、楯棒を上げる内に、お夏さんは乗りながら、袂から白いものを出した。や、最中を棄てるのかと思ふと、然うぢやなかつたんで、手巾でげす。

でね、妙なことをしたといふのは、最う一ツ小さな壘を取出して、其の手巾の中へ、俯向けにしました。車が二三間駆け出す内に、はらく／＼と、肩から胸へ振りかけたと思ふと、其の壘を、母衣のすかしから、白い指で、往來へ棄てたんでがす。

後で知れました。白薔薇の香水なんです。山の井醫學士夫人、子爵山河内定子は、いつでも此の香水の薫がする。と、お夏さんが愛吉に教へて置いたものだって、いふぢやありませんか。

何と驚いたものでがせう。其の袖の香を心當てに、谷中のくらがり坂の宵暗で、愛吉は定子(山の井夫人)を殺さう。お夏さんは定子になつて殺されようといふ、——未だ尤も、他に暗號も極めてあつたんではありまするがな、髪を洗つて寢首を搔かせた、大時代な活劇でさ。あの棄鉢な氣紛れものと、此の姉さんでなくツちや、當節では出来ない仕事。又出来されちや大變でがすのに、とう／＼見事仕出來した。何といふ向不見な寄合でせうな。

先生。話は前後になりまするが、丁ど此の場合だから申しますがね。私、前にも申す通り、何んだか氣になる。お夏さんの跡から上野へ行つて、暗がり坂で、きやッ！天地顛倒。途轍もない處へ行合はせて。——お夏さんに引込まれて、其の時の暗號になつた、——山の井醫院の梅岡といふ、これが又神田ッ兒で素敵に氣の早い、活潑な、年少な藥劑師と、二人で。愛吉に一剃刀、見事に胸をやられたお夏さんを、まあ兎角してです。私懇意な、彼處、上野の三宜亭。尤もこりや谷中へ行く前に、お夏さんが呼び出しをかけた其の梅岡藥劑兄哥と二人で、休んだ縁もあつたんでがすから、其の奥座敷へ内證で抱へ込んだ折でした。

愛吉に、譯を尋ねると、奴人間の色はねえ。据眼になつて饒舌つた、豫ての相談、お夏さんの謀といふのを聞きなさい。(ぢやね、愛吉、お前、何でも彼でも私のために、醫學士の奥様を殺して、願ひを叶へて呉れる

んなら、水天宮様の縁日に、頭の乾兒と喧嘩をするやうにして暴れ込んで行つたつて殺されるものぢやない。私がね、旨く都合をして、定子さんを可い處へ引出すわ。

それにや、本宅の薬剤師に、梅岡さんといつて、大層私を可愛がつて呉れる人があつて、何時でも先生を呼出すには、其の方に手紙を出したり、電話をかけたたりして頼むんだよ。矢張お前とおんなじやうに、大の姫様嫌ひ。おもて向き私を御新造にしてやりたい。でも定子さんがあつちや何だから、一寸一服モルヒネでも装りませうか、手のもんでわけなしたつて、洒落にもいつて居る人だから、すぐに味方して、血判をして呉れます。

いや、遠山さん。」

と丹平苦り切つた顔色で、

「愛吉が、手負の傍で、口を尖がらかして呼吸を切りながらせいくいつて饒舌つた時には、居合はせた梅岡薬剤。神田の兄いだが、目を圓くして驚いた。

其の筈でがす。隣家の隠居の溜飲にクミチンキを飲ますんだつて、メートルグラスでためした上で、びたり水薬の瓶に封。薬剤師其の責に任ず、と遣る人を、人殺の相談に、わけなし血判。自分の醫院の奥様に、一寸モルヒネをなんて、から、無法極まる。ねえ、先生。」

三十五

「これを又眞面目にうけさせる氣で、口へ出した、柳屋のも柳屋の。聞いて眞個にした奴も奴だ。で、お聞きなさい。

(其梅岡さんに頼んで、何時の幾日——今日だ。)と愛の野郎がいひました、即ち一昨々日。

其處で、又お夏さんの言を愛吉がいふんですが、

(奥さんを上野まで連れ出させよう。お前、前へ廻つて支度して、待伏せをしておいで。い、處があるかい。)

といふから、愛吉が、(占たな! 占たな!)

(それだつてお前、時の都合と、所はえ?)

トこりやお夏さんが心あつていつたんですな。考へて居ると、愛吉は何、剃刀で殺すぐらるは、自分が下駄の前鼻緒を切るほどにも思はない。都合をして、定子阿魔の顔さへ見せておくんなさりや、日本橋でも、萬世橋でも、電車の中でも、劇場でも、何處でもかまはないツていつたさうでさ。するとお夏さんの方は覺悟があるから、

(谷中なら、墓原の森の中を根岸で下りる、くらがり坂が可い。踏切の上の。あすこいらで、笹

ツ葉の下へでも隠れておいで。

こりや、それ、今もおつしやつた歌の先生、加茂川の馬車新道へ、炎天にも上野まで、鐵道馬車。後を歩行いて通つたから、不幸にして地の理が明い。

(私は梅岡さんに頼んで、慫うしよう。奥様は歌が好で、今でも一寸々々、加茂川ン許へお通ひだから、梅岡さんに、——私も歌が習ひたい、紅葉の盛り、上野をおひろひのおともをしなから、お師匠さんへ、奥様から、御紹介せ下さいまし。と慫ういつて貰ひませう。

好きな道だから、二ツ返事で。其日に限つて、おひろひかなんか。梅岡さんが、其の上野をおともといふ間に、いゝ加減に日を暮らして、夜になつて、くらやみ坂へ連れ行かせるから、而したら、白薔薇の薫をあてに。)

其の相談の出来たのは、お夏さんが三年ぶりで愛吉に逢つた夜で。餘所ゆきを着て居た上衣だけ脱いで、其のまゝ、寢床へ入つた、緋の紋綸子の長襦袢のまゝ、手を伸ばして、……こりや先生だと、雪の腕、といふ處だ。

手近な床の上の、鏡臺の抽斗から、其の壘を出して、未だ封も切つてなかつたさうで。是はね、丁ど其日行合はせた山の井さんの土産でしたと。

くちが堅く入つて居たのを、ト取らうとすると、占つて居たので、高島田にさした平打を抜い

て、蓮葉に、はらんばひになつたが、絹蒲團にもつかへたか、動きが悪いから、するりと起き上つて、慫う膝を立てて居ましたツてね。

抜けるほど色の白い處へ、其の姿だから、媚かしさは媚かし、美しさは美ししで、まるで畫に描いたやうに見えましたツて。

こりや何んです、小石川青柳町、お夏さんで名がついた、式部小路の内に居る、お賤ツて女房が丁ど其の時、行燈を持つて二階へ上つて、見たんでがすと。

ね、洋燈と取替に行つたんですと。先生、話はいろくになりませんが、お賤といふのは洲崎で引手茶屋をして居たんで、行燈組でね、特にお嬢さんには火が祟る、とかいつて居たんだから、あの陽氣家を説き伏せて、殘燈は行燈と取極めたんでさ……洋燈はかんく明かつた。

すぐに消さうとすると、

(お待ち、見えなくなるわ。)ツてくちを抜いた。芬と薫つたでせう。

(まあ、佳い匂でございますこと。)

(光ちやんが好なの。)

光起さんの事です。——

(私に此の匂をさして、抱かうと思つたツて、然うはいかない。)

少とやんちゃん。尤もね、少し飲んで居たんださうで。
(ねえ、愛吉。)

と聲をかけた。奴は、ぎごちなささうに小さくなつて、半分もぐりながら、目ばかり、ぱちぱち。

「ちや、愛吉は、」と遠山が口を入れた。

「勿論、枕を並べて。」

遠山金之助、

「え。」

竹永丹平は、然もこそといふ片頬笑み、泰然自若として、

「ま、ま、お聞きなさい。此處だ、是が眼目、此經難持、若暫時、此經は保ち難し。もししばらくも保たむものは、唯お夏一人といふ處でがすから。」

三十六

「其處で女房は、

(なるほど、貴女には似合ひません、でございますよ。)

愛吉傍在。で、其の際、些と諷する處あるが如くにいつて、洋燈を持つて階下へ下りた。あとはどうしたか知らないさうでさ。

勿論普通の人間ぢや寐られる處ではなかつたが、廓出の女房。生れてから雑と五十年。一年三百六十五日、のべつ、那樣處には出會して居たんだから、然したる大事とは思はなかつたし、何が何でも人殺の相談をしようなどは、夢にも、此の私にしたつて思ひませんや。

其後で、愛吉の鼻のさきへ、顔と一緒に、白薔薇の塚を押つけか、何かで、

(可いかい。此の匂ひだよ。最う一つはね、くらがり坂へ行つたら、奥さん!と其の梅岡さんが四邊を見計らつて聲をかけて下さるやうに、相談をして置くから、可いかい!此の薫と、其の奥さん!を暗號にして、……とくれぐれもおつしやつたんで。)

と愛吉が云ふんです、先生。

三宜亭で、夢中ながら目を光らせて、鼻をフン／＼とやつて、

(私あ、固唾を飲んでた處だ。符帳が合ったから飛出した。)と拳固で自分の頬げたを撲りながらいふんでせう。

いや、傍聞きをした山の井光起、こりやもう、すぐに電話でお呼び申した。其の驚いたより、十層倍、百層倍、仰天をしたのは梅岡藥劑で、

(國手の前ぢや申しかねるが、僕は又、三宜亭まで是非とお夏さんに呼出されて、實は相濟まんが、友達に頼んで一寸抜け出して來ると、いつも世話になると禮をいつて、お小遣が澤山あるから御馳走をするかはり、濟みませんが、姫様におつしやるやうに、奥さん、といひながら歩行いて下さい。貴下を、旦那さま、とでも、此方の人とでもいふわ。と大吞氣だから、愉快い、と引受けたんで。あれから東照宮の中を抜けて、ぶら／＼しながら谷中の途中、こゝが御註文と思ふから、多勢人の居る處ぢや、奥さん——山の井の奥さん。時々、夫人——などといふと、顔を赤くならずつたッけ。

岡野へ寄らうと、くらがり坂へかゝつた時は、別に其處で、といふ誂へがあつたわけではない。一層、特にあの坂で、とでもいふことなら、如何にお夏さんが神色自若として居たから、いつて、此方が吞氣だからといつて、墓といひ、森といひ、暗さといひ、たとひ其處までは上の空でも、坂の下り口ぢや一寸でも氣がさして、他の路をいきませうぐらゐるはいへるだらうのに。何事もなかつた。

坂を下りかゝると、今から思や、禮の心であんなすつたか、並んで歩行いて居た僕の手を、一寸握つて、そのまゝすた／＼と、……然やう、六足ばかり線路の方へ駈け出しておいでなされる、と思ふと、よろ／＼となすつたやうだから、危い!と聲をかけようと思つて、こゝでつい我知らず、奥さん!といつた。

すると愛吉が飛出しました。

これでお助んなすればよし、然もないと僕が手傳をして殺したも同然だ。)と藥劑師、其の責に任じて、涙ぐんでいつたんでがすがね。

先生、命數、

といつた。同時に、

「命數、」

目と目を見合はせ、

「敷。」

「も知れませんか。」

「竹永さん、貴老は又何うして其處へ行き合はせました?」

「そりや恠うでがす。

え、お待ちなさいよ。」

と丹平前に屈んで、握拳を掌で揉み、

「然うだ、唯今の其巢鴨の植木屋、卯之吉の庭で、お夏さんの車の、矢のやうに飛んだを見て、

別にあとをつけようといふ考はなかつたんですがね。懐しくツてなりますまい。

青柳町だといつた待て、何な處に住つて行つて見ようと、逆戻りにもみぢへ入ると、や、ぞろ／＼と人が居る、通天門を潜つて出ると、ばら／＼と見物でさ。妙なことがあるもんで、此處で何も俗にいふ死神が取着いたといふわけではないから、私のやうな筈破りは除外例、其の死神がお夏さんを誘ふためにしばらく人を拂つたといふのぢやがあせん。私の口でいつちや似合ひませんが、死を決すれば如神で、名僧の如く、知識の如く、哲人の如し。女とてかはりはない、おのづから浮世の塵を拂つて、此の仙境にしばらくなごりを惜んだのでありませう。

爾時は然うとも思はず、は、あ、こりや矢張自分たちと同様風説ばかりで、一體、實際縦覽をさせるか、させぬか、そこどころ些とあやふやな華族の庭。こりや、遠慮をして見合せて居た處へ、二人。お夏さんはともかく、私といふのまで其の中から顯はれたのを見て、卯之吉の庭に居た連中、氣を揃へて推參に及んだな。

何うだ善知識だらうと、天窓は是なり、大手を振つて通り抜けた——愚にもつかぬ。

あれから、今の眞宗大學を右に見て、青柳町へ伸して、はて、何處等だらうと思ふ、横町の角に、生垣の中が菊の盛。其處に立つて唯一人視めて居た婆さんがあつた、其の顔を見ると、塞つたやうになつた細い目で、おや！といつた。

三十七

「(まあ、おめづらしい、)と莞爾したらうではありませんか。方なしの敏になりましたが、若い時は、其の薄紅に腫ぼったい臉が恐ろしく婀娜だつた、お富といつて、深川に藝者をして、新内がよく出来て、相應に賣つた婦人でしたが、極じみな質で、八幡様寄の米屋に、米搗をして居た、渾名をニタリの鮫鱈、鮫鱈に似たりで分かる。でぶ／＼とふとつた男。ニタリニタリ笑つて居るのに、何處へ目をつけたか、其の婀娜な、腫ぼつたいのをなくすほど惚れましてな、勤めをよすと、夫婦になつて、資本を注ぎ込んで米屋を出すと、鮫鱈俄に旦那とかはつて、せつせと辨天町へ通ふ。其處で見張り旁々といふので、引手茶屋の賣据を買つて、山下といふ看板をかけて居ましたが、ニタリ殿はます／＼狂ふ。抱への藝妓は、甘いと見るから、授けちや證文を捲かせませう。せめてもの便にした養女には遁げられる、年紀は取る、不景氣にはなる、看板は暗くなる、酒は酸くなる、座蒲團は冷たくなる、火は消える、聲は出なくなる、唄は忘れる、猫は煩らふ、鼠は騒ぐ、襖は破れる、寒くはなる、大戸を閉める。何處へ何うしたらうと思ふ……お婆さん。串戲ではない、何時だと思ふ。仲ノ町ぢやチャラン／＼今時は知らないが、店すががきで、あかりがちら／＼廻る頃を、餘所の垣越に立つて、菊を見て居るやうな了簡だから、引手茶屋退

轉だ。しかし達者で可い、どうした、と聞くと、まあ、お寄んなさいまし、直そこが内だ、といふ二階家です。門札に山下賤、婆さんの本名でせう。

豪いな、といふと、否、御奉公をいたして居ります、御主人といふのは？

旦那だから申しますが、……些とこりや新聞のたねとりにや可笑ないひぐさだが。

眞個に世の中ッてものはわかりませんもので、あの、木場の勝山さんね、分散をなすつた。其のお嬢さんのお世話を、と半分聞かず、私、火鉢の前に腰を据ゑた。

さて、女の主人は知れた。男の御主人は、と聞くと、これは尙の事。

極々内證ですが、日本橋のお醫師で、山の井光起さんとおつしやる方、といふ。いよ／＼となりましたらう。

いや、江戸兒の醫學士め、すてきなものを圍つたぞ。

フムお妾だ。是がお前だと丁ど名も可い。イヤサお富と、手拭を取る、此の天窓で茶番になるだらう。といふと、否、私にも分りません、不思議なことには、久いあひだ、つひぞ未だ一所におよつた事もなし。

(夏ちゃん)

と洒落におつしやつたり、お眞面目な時も、

(勝山さん、勝山さん)と丁寧にお呼びなさる。

其の癖、此の通り、それは／＼勿體ないほど、ざく／＼お寶をお運びで、嬢さんが又ばら／＼撒く。土地が邊鄙で食物こそだが、おめしものや何か、縮緬がお不斷着で、秋のはじめに新しい

コオトが出来ました。

しかしそれも旦那さまませ。又珍らしい事には、櫛一枚、半襟一かけ、お嬢さんが、自分の口から、欲しいとおつしやつた事がないので。

旦那様は男の事、お氣がつくやうでもぬかりがあつて、ちぐはぐでをかしいくらる。つい此の間も嬢さんが、深川の淨心寺、御菩提所へ、お墓まるりにおいでなさるのに、當世のがないもんですから、私の縷子張のお持たせ申して、化けさうだといつて、床屋の職人にお笑はれなすつた。——これから先生、婆さんが、其の三日前に来て泊つたといふ、愛吉の野郎のことを話したんでがすよ。

尤も私も又、床屋の職人といふのが、直ぐに氣になつたから、床屋の職人？知己か、といつて尋ねたんで。

「お待ちなさい。」

と金之助は、寢臺の上から乗出しながら、

「氣に入つた！あゝ、其處に其の人は將に死なむとして居るが、氣に入つた、といはねばならんですよ。」

「ぢや何だ、醫學士はざく／＼注ぎ込む、お夏さんはばら／＼遣ふ、しかも何一つ自分から欲しいといつたことはないのか。而して一たびも枕をかはさぬ、豪い！其の清淨な膚を以て、緋の紋綸子の、長襦袢で、高髻といふ、其の艶麗な姿を以て、行燈にかへに來た雇の女に目まじろがない、其の任俠な氣を以て、凡てを愛吉に與へて其晩……」

「……………」丹平默然として少時不言。此の間のせうそく、そもさんか、偈無可爲證。

三十八

やゝあつて丹平他をいふ。

「其の癖、光起さんを戀しがつて、懷しがつて、一日と顔を見ないと、苦勞にする、三日四日となると鬱ぎ出す、七日も逢はなからうものなら、涙ぐむといふ始末。」

「ぢや顔を合はせれば何うかといふと、すねるやうな、くねるやうな、其の素ツ氣のなさ加減、傍で見る婆さんの目にも氣の毒なくらる。まぢんとして、

(先生、)

(勝山さん、)

といふ工合が、何の事はない。大町人の娘が、戀煩ひをして、主治醫が診察に見えたといふ有様。

先生がうまい事をいひましたつて。

(勝山さん、)何うか其の醫學上の講釋を聞くのと、手習を教へてくれだけはあやまる。私は藪の上(勝山さん)に悪筆だ、というたのださうです。

又屹と、心臓といふものは何處にあるの、なぜ御飯が肺の方へ行かないで濟むの、誰の目も綺麗なのは、水晶と同じ事か、なぞとね、番ごと聞く。第一顔を見ると直ぐに清書を持出して、お目にかける。

(いや、まづいこと、私の醫者のやうだ、)と申戲にいふのを真にうけては、せつせと双紙に手習をするんださうで。

然うかと思ふと、時にやがらりと巫山戲出して、肩へつかまる、羽織の紐を引斷る、膝を打つ、擦る。車夫でも待つて居ないと、歸りがけに門口からドンと突飛ばす、尤もそんな日は、醫學士の姿を見ると、いきなり飛出して框から手を引いて、すぐ其のまんまで二階へ上らうとするから、

狭い階子段、で行詰つて何方へも片附かずに、揉む。

しなだれるんぢやない、媚びるんぢやない、甘えるの。派手なんぢやない、騒々しいので、戀も情も未だ知らない、素の小兒かと思ふと、歸つたあとを、二階から見送つて、其のまゝ消えさうに立つて居る。

其處で附添ひが引手茶屋の婆さんだから、些と其の、其處ン處をな。

何して、いゝ工合に、と獨りで氣を揉んださうですが、さて口へ出さうとすると、何となく、氣高い、神々しい處があつて、戰場往來の古兵が、却つて、武者ぶるひで一言も出んのださうで。

まあ、不思議な縁といふのであらう。迎も人間業で行くのおぢやない。其の内に、出雲でも見るに見かねて、といふことになるだらう、と斷念めながらも、醫學士に向つて、すねてツンとする時と、烈しく巫山戯て騒ぐ時には番毎驚かされながら、ツンとしても美人の娼妓のやうでなく、騒いでも、賣れる藝者のやうでなく、品が崩れず、愛が失せないのには舌を巻いて居た處、いや又愛吉が來た晩は、熟々目覺しいものだつたと言ひます。……」

其は慙うである。愛吉は、長火鉢の前で唯旨さうに飲んで居たが、心以つて嬉しさうな顔に見えなかつたのを、酌をしながらお賤も不思議に思つた。蓋し生れつき面が狼に似たばかりでない。

腹に暗き鬼を生ずとしてある疑心の蟠があつたのも、お夏を一目見たばかりで、霧の散つたやうに、我ながらに摺へ處もなくして濟んだ爾時、今其處に婆さんの顔ばかりとなつたのみならず、二杯三杯と重るにつれて、遠慮も次第になくなる處へ、狂水のまはるのが、血の燃ゆるが如き壯俊、況して渾名を火の玉のほてりに蒸されて、むら／＼と固る雲、額のあたりが暗くなつた。

「ウイ、」

と抑つけるやうに猪口を措いて、

「嬉しくねえ、嬉しくねえ、へむ、馬鹿にしねえや。何でえ、」

と、下唇を反らすのを、女房は此の藝なしの口不調法、お世辭の氣で、何處かで喧嘩した時の

假聲をつかふのかと思つて居ると、

「何てやんでえ、へッ笑かしゃがら、へッ馬鹿にすら、へッへッ馬鹿にしゃがら、へッ土百姓、

へッ猿唐人め、」

太夫しゃくりが出るから、湯のかはりに、お賤が、

「あいよ、お酌、」

「へッ、ありがたうさい、」と皆一所。吃逆と、返事と御禮と、それから東西と。

「おかみさん、難有え、お前さんの思召しも嬉しけりや、肴も嬉しけりや、酒も旨え、旨えけれど可笑くねえや、何てつて恚うおかみさん、おかみさん、」
「おや、私のことかい。」

「お聞きねえ、伺ひやすがね、恚う見渡した處、雑とこりや一兩がもんだね、愛吉一年の取り高だ。先刻お湯銭が二錢五厘、安い利だが持ちませんぜ。誰が、誰が此の勘定をしやがるんでえ。へッ、人をつけ、嬉しくねえ。」

女房は笑つて逆はず、

「景氣がついて來ましたね、些とは可い心持になりましたかい。」

「好いにも、悪いにも何だが氣になつてならねえんで、變てこに恚う胸へつつかけて來るんでね、其の勘定の一件だ。」

「まあ、何をいふんですね、お嬢さんが御馳走なさるんぢやありませんか、をかしな人だよ。」といつた、これはよめなかつたに相違はない。
愛の口益々尖つて、

「分つてら、分つてらい、否分つてます。御馳走は分つてら。御馳走でなくつて、此の霜柑に活のいゝきはだと、濁りのねえ酒が、私の口へ入りやうがねえや、ねえ、おかみさん。」

「ですから、澤山めしあがれよ。」

「なほ心配だ。何が心配だつて、こんな氣になることはねえ。何がぢやねえやね、お前さん、其の勘定の理合因縁だ。え、知つて居ら、お嬢さんの御馳走だが、勘定は誰がするんで。勘定は、へッ、」

としやくりをきつかけに聲を密め、拇指を出して見せ、

「レコだ、野郎がしやがるんだ。へむ、異う旦那ぶりがつて笑かしやがらい。恚う聞いとくんねえ、私アね、お嬢さんの下さるんなら、溝泥だつて、舌鼓だ、這ひ廻つて嘗めるでさ。」

土百姓の酒ぢや嬉しくねえ。へッ、ぢや飲むなといつたつて然うはいかねえ。第一私あ飲む氣はねえが、腹の蟲が承知しねえや。腹の蟲は承知しても、矢張私あ飲みてえや。からだらしがねえ、また、びだね、鼠のてんぶら、このしろの揚物だ。眞個でえ、死ぬ氣で飲んでら、馬鹿にしねえぜ。何をいつて居やがるんでえ。おかみさん、何をいつてるんだか、分りますめえ。御道理で、私あ自分にも分らねえんだからね、何ですぜえ、無體、癩に障るから飲みますぜえ、頂かあ、頂くとも。酌いどくんねえ、く、」

「可いから、まあおあがんなさい。」

「む、あゝ、旨え、馬鹿にしやがら、堪らねえ旨えや。旨えが嬉しくねえ、七目れんげめ、おかみさん、お憚りながら然ういつておくんねえ、折角ですが嬉しくねえツて。否、滅相、途轍もねえ、嬢的にそんなことをいはれて堪るもんか、へッ、」

と頸を窘めたが、

「内證だ、嬢的にや極内だがね。旦那の野郎に然ういつておくんねえ、私あ厭だ、大嫌だ、そんな奴にや口を利くのも厭だから、おひかへ下さいやし、手前ことはなんて頼んだつて挨拶なんぞするもんか。」

「憚う小馬鹿にするぜえ、へッ、癩だ、此奴をおさへるにや叩切だ、」とぐツと飲む奴。

「……………」

「憚うおかみ、憚りながら然ういつておくんなせえ、濟まねえがね、私あ氣に食はねえから勘定をして貰つたつて、お禮なんざいはねえツて、」

お賤は氣が練れた苦勞人、厭な顔は些ともしないで、愛想よく、

「あゝ、可いともね、又禮なんぞいはせるやうなお方ぢやありません。」

「トおつしやる！へゝゝゝ、おかみさん、厭に肩を持ちますね、いくらか貰つたね。」

「貰ひましたともさ、貰つた處ぢやない、お嬢さんだつて、私だつて、九死一生な處を助けて下さつた方ですもの、」

「九死一生、」

お嬢さんと聞いたばかりで最う眼を据ゑ、

「煩つたかね。尤も肝の蟲が強いからね、あれが病だ。」

「しかもお前さん、大道だつたらうぢやありませんか。」

「大道で、何が大道で、此處あお嬢さんの内ぢやねえかね。」

「否さ、此方へおいでなさらぬ前にさ、屑屋をしていらつした時の事ですよ。」

「屑屋？誰が、憚う情ねえ、人間さがりたくねえもんだ。こんななりはしてるがね、私あこれでも床屋ですぜ、屑屋は酷い、」といった。

四十

「誰がお前さんを屑屋だといひましたよ。御覽なさいな、然ういはれてさへ腹を立つ、其、お前さん、屑屋をしておいでなすつたんぢやないか、夫だもの、」
變な面で、

「誰が、」

「お嬢さんのことをいつてるんだよ、」

「はあ、問屋か。然う屑問屋か。道理こそ見倒しやがつて。日本一のお嬢さんを妾なんぞにしやあがつて、冥利を知れやい。べらぼうめ、菱餅や豆煎にやか、つても、上段のお雛様は、氣の利いた鼠なら遠慮をして嘗めねえぜ、盗賊ア、盗賊ア、盗賊ア、盗賊ア、」

と大音を揚げて、

「叱！何處の野良猫だ、ニヤーフウー」

一杯に頬を膨らし、呻つて啼真似をすると、極低聲、膳の上へ頤を出して、

「へい、ですかい屑屋ですかい。お待ちなせえ、待ちねえよ、恚う旨えことを考えた。一番、恚う、禪や切立だから、恥は搔かねえ、素裸になつて、二階へ上つて、此奴を脱いで、」

と胸をはだけた、仕方をする氣が、だらしはない、するツカ脱げた兩肌脱で、

「旦那、五兩に何だ、とポンと投げ出しはどんなもんで。ヘツヘツ、おかみさん。」

「いくらお嬢さんだつて其の方にや苦勞人でいらつしやるから、お前さん、其の裕は五兩にやおつけなさりやしまいよ。」

「へい、ぢや嬢的も旦那かぶれで、いくらか贓物の價が分るんで？」

扱は、と女房心づいて、

「まあ、お前さん、をかしなことをおいひだと思つて居たが、ぢや何にも御存じぢやないんだね、私の留守のうちにお話しぢやなかつたのかい、」

「何をね、」

「それだもの、ちぐはぐになる筈だ。屑屋をなすつていらつしやつたのはお嬢さんだよ、お嬢さんなんだよ、お前さん。」

「お夏さん、」

「あい、然うさ。」

「呀！串戯ぢやねえ、眞個ですかい。」

「眞個にも何にも、」

「あの、屑屋いつて。踊にやないね、問屋でも芝居でもなけりや、それぢや、外にやねえ、屑い、屑いつて、籠を擔いだ、あれなんぞ？」

「あ、然うともお前、私がお目にか、つた時なんぞ、そりやおいとしかつたよ。霜月だといふのに、汚れた中形の浴衣を下へ召して、襦袢にも蹴出しにもそればかり。縞も分らないやうな袴のね、肩にも腰にもさらさの布でしき當のある袴を、お端折でさ、足袋は穿いておいでなすつた

が、汚いことツたら、草履さ、今思ひ出して何ですよ、おいとしいツたらないんですよ。」

「おかみさん、逢つたのか、」

「然うですよ、」

「串戯ぢやねえ、何處でだね。」

「氷川の坂ン處ですよ、」

「何時？」

「一昨年の霜月だつてば。」

「串戯ぢやねえ、一寸知らして呉れりや可いんだ、」

と膳の下へ突込むやうに摺り寄つた。膝をばたくとやつて、齒を嚙んで戦いたが、寒いのではない、脱いだ膚には氣も着かず。太息を吐いて、

「あ、其だ。芥溜ツていつたなあそれだ、串戯ぢやねえ、」

「それにお前、寒い月夜のことだつた。道芝の露の中で、ひどくさし込んで来たぢやないか。お頭を草原に摺りつけて、薄の根を両手に縫つて、のツつ、そツつ、断つてのお苦み。もう見る間にお顔の色が變つてね、鼻筋の通つたのばかり見えたんですよ。」

「ま、ま、待つとくんせえ、待つとくんせえ、」

愛吉聞くうちにきよろくして、得もいはれぬ面色しながら、やがて二階を瞻めた。

「待ちねえ。おかみさん、生きてるね、大丈夫、二階に居るね。」

「お前さん、おいでなさいよ。先刻からお上りなさいって、おつしやつてぢやありませんか。旦那が御一緒ぢや厭なんですか。」

「其處處ぢやねえ、フウ而して、」

「あとで聞いたら何だとさ、途中の都合やら、何や彼やで、未だ其時お午飯さへあがらなかつた、お弱い身體に、それだもの、夜露に冷えて堪るものかね。」

「なぜ、そんな時、大きな聲で、一口愛吉つて呼ばねえんだなあ、大島に居たつて聞えらあ。」

怨めしさうなが眞である。

四十一

「尤もね、日の暮れない内から、長い間其處に倒れたやうになつておいでなすつたんだつてね、何だとさ。」

「晩方、あの坂を、しよんぼりして、とぼく下りておいでなされると、背後からお前さん、道の幅一杯になつて、二頭立の馬車が来たらうではないか。」

ハツと除けようとなさる。お顔の處へ、最う大きな鼻頭がぬツと出て、ぬら／＼小鼻が動いたんだつておつしやるんだよ。

除けるも退くもありやしません。

牛頭馬頭にひツばたかれて、針の山に追ひ上げられるやうに、土手へ縫つて倒れたなりに上らうとなさると、下草のちよろ／＼水の、溝へ片足お落しなすつた、荷があるから堪らないよ。横倒れに、石へお髪の亂れたのに、泥ばねを、お顔へ刎ねて、三寸と間のない處を、大きな鐵の車の輪。

天へでも上るやうにぐる／＼とまはつて通りしなに、

(馬鹿め！)

ツて、何處の馬丁も威張るもんだけれど、憎らしいぢやありませんか。危い、とでもおつしやることか、何處のか華族様でもあらうけれども、乗つてた御夫婦も心なし。

殿様は山高帽、郵便函を押し出したやうに、見返りもなさらない。らつこの襟卷の中から、長い尖つた顔を出して、奥様がニヤリと笑つておいでのが、仰向けながらね、屹とお開きなすつたお嬢さんの目に、熱と留つたとおつしやるんですよ。

「チヨツ、何たらこツてえ、せめて軍鶏でも居りや、そんな時やあ阿魔の咽喉笛を突つくのこ、」

と落膽したやうにいつたが、これは女房には分らなかつた——藏人のことである。

「餘程お口惜しかつたつて、然うでせうとも。……新しい秤をね、膝へかけて二ツにポツキリ。

尤もお足に怪我をしておいでなすつた、其處らぞツとするやうな鼻紙さア。

屑の籠を引つくりかへして、

(モ死にたいねえ)ツて、思はず音を出したよ、とおつしやるんですがね、其のま、お足を投出して、長くなつて、土手に肱枕をなすつたんだとさ。

鴨がけた、ましく啼き立てる。むかうのお薬園の森から、氷川様のお宮へかけて、眞黒な雲が出て、仕切つたやうに此方は蒼空、動く霞になりさうなのが、塗つて固めたやうになつて居たんですつて。

其の中へね、火の粉のやうなものが、ぱら／＼と飛ぶから、火事かと御覽なさると、又白いものが、ちら／＼交つたのを、霞かと思つて見ているうちに数が殖えて、交つて、花車を巻き込むやうになると、なさる内に、何ですとさ。見る見るうちに数が殖えて、交つて、花車を巻き込むやうになると、うつとりなすつた時、緑、白妙、紺青の、珠を飾つた、女雛が被る冠を守護して、緋の袴で練衣の官女が五人、黒雲の中を往來して、手招をするのが、遠い處に見えましたとさ。

づつと立つて行かうとなさると、直ぐに消えて、隠れて居たお月夜になつたさうで。

其處へ私がね、

と仕方をして、

「テンブラクイタイ、テンブラクイタイか何かで、流して行つたんですよ、お前さん。」

「へッ、人の氣も知らねえで、」

「否、處が、私だつて喰ふや喰はず、昔のともだちが、傳通院うらの貧乏長屋に、駄菓子を買つて、蝙蝠のはりかへ直しと夫婦になつて暮して居る處へ、のたれ込んで、せう事なし門づけに出たんですがね、其の身になつてもお前さん、見得ぢやないけれど極が悪くツて、晝間は逆も出られないもんだからね、其の晩も、日が暮れてから出たんでね、直ぐ上へ出りや久堅の通りだし、家の數も多いけれど、一寸のぼしに下へ下りて、田圃とお藥園の、何にも未だ家のなかつた處を通つて、氷川の坂へ、むかしの事をおもひながら、夜露と涙で、音がしめつたのを。」

「どうお聞きなすつたか、土手に腰をかけておいでなすつて、お嬢さんが、(もし、おかみさん)ツて聲をかけて下すつたんです。犬は遠くで吠えてたけれど、狐の居さうな處ですもの、吃驚したらうではありませんか。」

お夏が、すつと、二階から下りて来た。

「おかみさん、何のお話？」

フト肩屋さんの、と行きつまつたから、

「氷川で御覽なすつた、お雛様のことなんでございますよ。」

四十二

「然う、此の人なら話が分るの。はじめから私とお雛様のことを知つて居るから。ねえ、愛吉、と膳の横。愛吉に肩を並べて腰を浮かして居たのは、ついしばらくの假の宿、二階に待つ人があるのであらう。」

お夏は爾時、格子の羽織を着て居たが、年も二ツ三ツ、肩のあたりに威が出来て、若い女主人のやうに見えた。

二階から降りる楚音を、一ツ聞いて愛の奴、慌てて膚を入れたのはいふまでもない。

「愛吉、」

「ん……」

「澤山おあがりよ。おいしいものがなくツて、氣の毒だね、お、其の海鼠がおいしさうぢやないか。」

「え、一ツ如何でございます。へ、へ、へ。」

「然うね、御馳走にならうかね、どれ、」
女房が氣を利かせて、箸箱をと思ふ間もなく、愛吉のを取つて、臆面なし、海鼠は、口に入つて紫の珠はつるりと皓齒を潛つた。

「お、冷こい！」

すつと立ち——臺所へ出ようとする。

「何でございます。」

「二階が寒くなつたの。臺じふが欲いんです。」

「唯今、私が、」

と立つて出る。お夏は、眞四角に。但しひよろ／＼と坐つた愛吉の肩をおして、

「大分おとなしいのね。」

「お嬢様、些とお叱んな……」と臺所から。

「なッ！」

とだしぬけに押伏せて、きよとんとして、

「納豆、納豆ウい、納豆、納豆ウ、」

「をばさん、屑屋より、此の方にすれば可かつたのね。」

女房は火を入れながら、生眞面目に、

「どちらがどちらとも申されません。」

「お嬢さん、と仰ぎさまに、酒くさい口をあけて、熟と顔を視て、

「そんな時に、私を尋ねて下さりや可いんだのになあ、」

「それだつて、お前、来てくれたつて、逢つたつて、お酒も飲ませられないし、煙草も與れない

し、可哀相なもの。」

「否、頂かうといふんぢやねえんで、そんな時だ、私あ、お嬢さんに何うにかすらあ。盜賊でも、

人殺でも、放火でも何でもすらあ。え、お嬢さん、」

「愛吉、難有うよ、」

とかけた手で、軽く二ツばかり揺ぶつて、うつむきさまにはら／＼と落涙した。

唯、こゝに赫としたのは臺十能の中である。

「二階へおいでな。」

「え、なに……」

「構ひはしないよ。」

「え、なに……」

「もう、お嬢様、此の方はね、」
「おつと納豆ウ、納豆、納豆い、」

「あの、唯今、屑屋さんのかはりに、私の蘭蝶をお聞きなさうといふ處なんでございます。」
「然うですか、眞個に思出すわねえ、良い月夜で、露霜で、しとくしてねえ。」

「草の中においでなすつたお嬢さんのお姿が、爪先まで明いんですもの。私は慄然としましたよ。而して些とばかり聞かしておくれ、こんな風で濟まないけれどもツて、銀貨のお代を頂きました時は、私は掌へ、お星様が降つたのかと思ひました。」

追分をお好き遊ばした、辨天様のお話は聞きました、此處等に高尾の塚もなし、誰方が草薙になつておいで遊ばしたんでせうと、唯、最う尊くなりましてね。おんぼろの婆おやありましてございませうが、一生懸命、あんな複雑な三味線でも、思ひなしか、あの時くらゐ、隅田川の水にだつて、冴えた調子は出たことがございませんよ。」

當時の光景、如何に凄絶なるものなりしぞ。

「あ、私も聞いて居る内に、ひとりで涙が出たんですもの、愛吉、をばさんはそりや上手だよ、といひすて、階子段に、蔦がからんだ裳の紅、するくくと上つて行つた。」

「へッ笑かしやあがら、へッ且的めえ、汝が取りに下りれば可い。寒いが聞いて呆れらい。へッ、

悪く御託をつきやあがると、汝がの口へ氷を詰めて、寒の水を浴びせるぞ、やい！

「愛吉、おいでな、」
皆まで聞かず、上へ聞えたかと、「納豆、納豆。」

四十三

丹平は言を改め、

「さて、先生、何んでも愛の奴は、其の中でも、お嬢さんが酷く差込んだといふのを氣にして、尋ねますから、婆さんが、爾時だ。」

一心不亂に蘭蝶を、語り濟まして居る内に、うむといつてお夏さんが苦しみ出したさうで。いや、驚くまい事か、糸も撥も投げ出して、縋りついて介抱をしたんだけれども、齒を切緊つて了つたから、遊女の空癪を扱ふやうなわけには行かない。

自分も打坐り込んで、意氣地はがあせん、お念佛を唱へ出した。

ト珍らしく人聲がして、俣が来たでさ。然も路が悪いんで、下町の抱車夫にやあがきが取れなかつたものと見えてね、下りて歩行いて來懸つた。夜目にも立派な洋服で、背は高くないが、極り處のきちんとした、上手が鑿で刻んだといふ灰色の姿。月明に一目見ると、づつと寄つたのが

山の井さんで、最う立向ふと病魔辟易。病人を包んだ空気が何となく濃とひらくといふ國手だから、最う大丈夫。

やがてお夏さんの望みで、名が良いといふ今の青柳町へ、世話をする事になつたに就いて、其の時の縁で、お賤が、女中、乳母、兼帯のおもり役。

とこ、まで……愛吉にお賤が言つて聞かせて、見なさい、然ういふ御恩人だ、といつても、奴泡を吹いて、ブウ／＼の舌を引込ませない。

日本一のお嬢さんを妾にするたあ何事だ、妾は癩だ、恩人も絲瓜もねえ、弱り目につけ込んで、すけべいの恩を賣る奴は、さし込み以上の疫病神だと、怒鳴るでがせう。

一體何といふ藪だ、破竹か、孟宗か、寒竹か、あたまから火をつけて蒸焼にして嚙ると、些と亂だ。楊枝でも嚙むことか、割箸を横啣へとやりやあがつて、喰ひ裂いちや吐出しますさ。

大概のことは氣にもかけなかつたが、婆さん貧病は治して貰つた、我が朝の、耆婆扁鵲と思ふ人を、藪は些と氣になつたから、山の井さんを何だ、と思ふと極めるとね。

先刻承知だらうと思つて居たのが、耳を立てて、何山の井だ、何處の藪だ。光起さんとおつしやつて、日本橋の眞中にある大藪、といふと、(や、先生か)といつて、愛吉が、呆氣に取りられて、暫時天井を視めて居たさうだッけ。

(親分か)と吹ッ切つた。それで靜まるのかと思ふと然うでない。(あん畜生、根生ひの江戸ッ兒の癖にしやがつて、卑劣な謀叛を企てたな。此方あ、たか／＼恩を賣つて、人情を買ふ奴だ、贅六店の爺番頭か、三河萬歳の株主だと思ふから、むてえ癩に障つても、熱湯は可哀相だと我慢をした。藝妓や娼妓でも圍ひあがりや、いざこざは些ともねえが、

汝が病家さきの嬢さんの落目をひろつて、搔きあげにしやあがつたは、何のこたあねえ、歌を教へて手を握る、根岸の鴨川同断だ。江戸ッ兒の面汚し、さあ、合點が出来ねえぞ)とぐる／＼と廻つて突立つから、慌てて留める婆さんを、刎ね飛ばす、銚子が轉がる、膳が倒れる、どたばた、

がたぴしといふ騒ぎ、お嬢さん、と呼んで取さへて貰はうとしても、返事もなけりや、寂閑は何ういふわけ?……

(もう寐やがつたか、太え奴だ。)

とドンと襖へ打附かつて、眼の稻妻、雷の聲、から／＼／＼と黒煙を捲いて上る。ト、これぢやおもりが悪いやうで、婆さん申譯がありますまい。

あとから夢中で駆け上つた、此の時でさ、——先生。

二人とも驚いたのは。

二階の二人が、クズ／＼笑つて居たといふんですものな。

氣の抜けること夥しい。

ちんくをするやうな形で、棒を呑んでしやつきりと立つた、愛吉の前へ小さな紫檀の食卓の上から、衝と手を伸ばして、

(親方、申上げよう)

といつて猪口をさして、山の井さんが、呵々と笑つたとお思ひなさい。

光起は藍と紺、味噌漉一樂の袷羽織、おなじ一樂の鼠と紺を、微塵織の二ツ小袖、ゆき短にきり、と着て、茶の献上博多の帯、黄金ぶちの眼鏡を、ぼつりと太い眉の下、鼻隆く、髯濃かに、頬へかけて、圓い頤一面に胡麻のやう、これで頬がこけて居れば、正に卒業試験中、燈下に書を讀む風采であつた。

四十四

お夏が又叱言でもいふことか、莞爾して、

(さあ、お酌をして上げようね)

愛吉は手術臺で、片腕切落されたやうな心持で、硬くなつて盃を出した。

お夏の手なる銚子こそをかしけれ。圓く肩のはつた、色の白い、人形の胴を切つた形であつたも断り、天女が賜ふ乳の如く、恩愛の絲をひいて、此方の猪口に裝られたのは、あはれ白酒であつたのである。

さて、お肴には何がある、錦手の鉢と、塗物の食籠に、綺麗に飾つて、水天宮前の小饅頭と、蠣殻町の煎豌豆、先生を困らせると晝間いつた其の日の土産はこれで。丹平がこゝに金之助に語りつつある、這個黒旋風を驚かしたものは、智多星吳軍師の謀計でない、唯一盞の白酒であつた。

丹平語を継ぎ、

「其處で醫學士が、

(どうです、親方、いけますか) などとおつしやる。

お嬢さんの下さるもんなら、溝泥も甘露だといつた口にも、これは些と辟易だ、盃を睨み詰めて、目の玉を白く、白酒を黒くして、もぢつくと、山の井さんが大笑ひして、

(いけますまいな。いや、私も弱る。大辟易だが、勝山さんは、白酒でなくッては、一生お酌は断ちものださうだ。)

又全く徹頭徹尾、白酒でなくッては酌といふものをしないのでがすとさ。婆さんがなかなかほりに、

(私が助けませう、)

と取つて飲んだのを、

(頂戴な)とお夏さんが請け取つて、こゝで一杯、珍らしく三猪口、愛吉の酌で飲んださうで。

山の井さんは止むことを得ず、例の如く其處に持出して——いや、突きつけてある草紙を取つて、一枚づゝ開けて見ながら、白豌豆をポツリ、ポツリ。

時々、

(旨い)なんて小兒のやうな洒落をいふんだ。

然うしちや、

(私は小兒科はいかんよ。)は可うがせう。

お夏さんがね、ばたりと壘へ手を支いた、羽織の肩が少しずれて、

(あゝ、もう眠い)ツて恐ろしい愛想づかしぢやありませんか。

(さあ、お寐なさい、)

といふと、かぶりを振つて、

(厭です、寐かして下さらなくツちや、)

(お婆さん、床を取つておあげ、私も、もうそろそろ歸る。)

(否、先生、貴下が、寐かして、)と切々にいつたが、いつになく酔つちや居るし、つひぞないことはいふんだから、婆さん、はツと氣がついて大喜び。

(さあ、愛吉さん、下へ行つてもう一杯、今度は私も頂くよ。)

善は急げで立ちかゝると、愛吉、前へ立つて、膠が放れたやうだつたが、どゞどゞ、どんといふと四五段下り落ちた。

(危い、)

と婆さんが段の途中でいつた時、

(危いよ、)

といふ醫學士の聲がしたは、お夏が、愛吉を憂慮つて、立たうとして、酔つてるからよろけたんださうでがす。

愛の奴は臺所へ仁王立ちで、杓呑を遣つた。

其處等、皿小鉢が滅茶でせう。すぐに其の手で、雑巾を持つて、婆さんが一片附け、片附けよ

うとする時、二階で、

(親方々々、)

と醫學士が呼んださうです。

上つて見ると、何うでせう、お夏さんは高島田を横に學士の膝につけて、腕をかけて、横顔で寐て居たので。

「其處等に搔卷があらう、見てくれ、」とある。

おつとまかせろナは可いが、愛の野郎、三尺の尻ツこけで、ぬツと足を出して夜具戸棚を開けた工合、見習ひの喜助殿といふのでがす。

勿論、絹の小搔卷。抱へて突出すと、

(かけてお上げ、)

といふお聲がかり。

四十五

搔卷がかゝると、裳が揺れた。お夏は柔かに曲げて居た足を伸ばして、片手を白く、天鵝絨の襟を引き寄せて、軽く寝返りざまに、やゝ仰向になつたが——目が覺めて然うしたものはなかつた。

愛吉は搔卷の裾に跪いて、

(先生、酔つたんで、)

(あゝ、些と酔つたと見えるが、女も、白酒を小さな猪口で寐るやうだと眞に結構だ、)

(愛吉、)

(へい、)

(男も君のやうに飲んぢや困るな。)

納豆を賣るわけにも行かず、思はぬ處でぎよつとする。

(些と控目にしないか、第一身體が堪らない。勝山さんも大層氣にかけて心配してるぜ。

待て、)

といつて、尻ツこけに遁げ出さうとするのを呼び留め、學士は黄金時計を一寸見た。

(少し待て、)

其のまゝ黙つて、其の微塵縞一樂の小袖の膝に、酔はさめたが、唇の紅も搔卷にかくれて、ひとへに輪廓の正しき雪かと思まがふ、お夏の顔を熟と見ながら、此際大病人の豫後でもいひきけるるゝを、待つ如く、愛吉呼吸を殺して、つい居ると、

(此方へ來い、)

(えゝ、)

(些と膝をかせ。)

(先生、飛んだ御串戯もんですぜ。)

(いや、私は時間の都合がある、婆さんは片づけものがあるだらう、すやく寝て居るから、可
いか、密とだ。) 静かな膝は、わななく枕と入れ交つた、お夏の夢は、月に月宮殿をあくがれ出
でて、廢驛の時雨に逢ふのであらう。

立つて、衣紋を正した時、學士の膝は濡れて居た。が、鬢の梅の雫ではない、まつげのそよぎ
に、つらぬきとめぬ露であつた。――

(私は一向、そんな方はございだったが、此の勝山さん娶はうとした時、親類が悪い風説を聞
いたとか言つて、愚圖々々面倒だから、今の、山河内を入れたんだが、身分が反對だとよかつ
た。女世帯の繪草紙屋を棄てて、華族の女を媽にしたといふので、酷く此の深川ッ兒に輕蔑され
るよ。は、は、は、)

と恐縮をしたやうに打笑ひ、

(どうだ親方、些と粹なのを世話しないか。)

と上り口で振返つて、爽に階下へおりた。すぐ上つて來るだらうと思ふと、やがて格子戸が開
いたのは、懐手が出て歸つたのである。

轉寢はかぜを引くと、二階へ床を取りに行つた時、女房は、石のやうに固くなつて愛吉が膝を

揃へて畏つて居たのを見た。月の夜の玉川に、硝を枕にした風情、お夏は愛吉の其の膝に、なほ
すやくと眠つて居た。

密と起して、先生がおつしやつた、愛吉さんもお泊り、といふ時、お夏はぱつちり目を開けた
が、極めて鷹揚に無雜作に、

(……………)

枕の異つたことは何にもいはず、

(お前もお手つだひ、)

と愛吉に教へて、自分も枕など持ち出して、急いで寢床が出來ると、(此のまゝ寢ようや、)と云
つたのが、其の緋の紋綸子の長襦袢。

同一装で、香水の瓶の口を開けて居たのを、二度目に行燈を提げて上つて女房を見た。が、其
の後の事は分らぬ。尤も屏風をたてて下りた。其の後は如何にしむか知らず。

但、眞夜中の頃、みしくと二階を一人が降りて來た。お夏の聲音ではない。うとくした女
房、臺所の傍なる部屋で目を覺すと、枕許を通るのは愛吉で。憚りかと思ふと上櫃の戸を開けた。

(おや、歸るんですか。)

(私も店がございます、濟みませんが、あとのしまりを、)と不思議なことをいつて、戸を開けて出たと思ふと、日和下駄を穿いて来たのに、カラリとも音がせぬ。耳を澄まして居ると、ひたひたと地を踏む音。凡そ池の坊の石段のあたりまで、刻んできこえたが、しばらく中絶えがして、菊畑の前、荒物屋の角あたりから、疾風一陣！護國寺前から音羽の通りを、通り魔の通るやう、手足も、衣も吹靡いて、しなうて行くか、と犬も吠えず鼠もあるかぬ寂とした瞬間のうつゝに感じた。

女房は夢かと思つた。が、起き出て土間へ下りると、幻ではない。格子戸は開いたまゝ、大戸はしまつて居たが、掛けがねが外づれて居た。

火沙汰を憂慮つて、行燈で寝るほど、小心な年寄。特に女主人なり、忘れてもこんな事は、と其處で何か急に恐くなつたか、密とあけて見ると良い月夜、式部小路は一筋蒼い。

塵も埃も寐静つたらうと思ふ月明りの中に、曲角あたりものの氣勢のするのは、二階の美しいの魂が、菊の花を見に出たのであらう。

女房はフト心着いた。黙つて歸して、叱られはしまいか、と其處で階子段の下に立寄つて、様子を見たが、寂寞して居る。覗くやうにしたけれども屏風はたつたり、行燈の火も洩れず。(お嬢さん、)と小聲で呼んで見たが、答へがない。其夜に限つて、上つて見ようとは思はず、いつの間にか時が経つたと見えて、最う冷くなつた寢床へ入つて寐た。

あくる日は、平日より早く目が覺めたが、又お夏が例になく起きて來ぬ。臺所もすつかり片づいて、綺麗に掃除が出来、朝飯が濟んで、しばらくして茶を入れて、毎日飲む頃になつたが、未だ下りぬ。

沸り切つて居た湯が冷めるから、炭を繼いで、其から靜に上つて見た。屏風の端から覗くと、お夏は床の上に起上つて、暖に日のさす小春の朝。行燈の紙眞白に灯が未だ消えず。あゝ、時ならぬ、簾越なる紅梅や、みどりに紺段々八丈の小搔卷を肩にかけて、お夏は靜としてゐた。

(おや、もうお目覺。)

(あゝ、今起きようと思つて居るの。)

女房が、不思議といふのは此の事ではない。唯愛吉が夜中に歸つた時の、戶外が凄かつたもののけはひの事である。

それとなく、

(昨夜夜中に歸りましたね。)

(喧嘩の夢を見て、寐惚けたんだよ。)とばかりお夏は笑つて居たが、喧嘩の夢どころではない、殺人の意氣天に冲して、此の氣疾の豪傑、月夜に砂煙を捲いて宙を飛んだのであつた。

此の意気なればこそ、三日握り詰めたお夏の襟をそつた剃刀に、鎮西五郎時致が大島傳來の寐刃を合はせたとはいへ、我が咽喉ならば不知、いかで誤つてお夏の胸を傷つけむや。衣て居た絹は、膚よりも堅いのには、

くらがり坂で躍り出して、

(こん、畜生！)

コオトの背中を引抱へて、身體を壓にグサと刺した。其でも氣が上ずつたか、頭巾の端を切つて、咽喉をかすつて、剃刀の尖は、紫の半襟の裏に留まつたのである。

お夏がよろける。奥さん、と梅岡藥劑。

啊呀と、駆け寄つた丹平は、お夏が刃物を引きつけるやうに、我を殺すものの頸を、兩のかひなで緊乎と絞めて抱いたのを見た。其の身は坂を上の方、兇漢は下に居た。

(あ、)

と一聲、もつと刺せとか、それとも告別の意であつたか、

(愛吉、)

とお夏が呼ぶと、丹平が引放さうとする愛吉の手は、力も用ゐないで外づれたが、頸を巻いたお夏の腕は放れない。

拵いて解くと、道の上へ、お夏の胸は弓なりに反つたが、梅岡に支へられた。

(國手に、國手に、)とお夏は、其時くりかへしていつたのである。

愛吉は下へ、どんと尻餅をついた。其まゝ、咽喉にあてた剃刀を抜き取つたのは丹平で。

時にはじめて聲を出した、江戸ッ兒の藥劑師の聲は異様なものであつた。

(非常だ、)

(お騒ぎあるな！引き上げました。)

兀げ天窓の小男の一言は、いふまでもなく大いなる力があつたのである。

竹永丹平が病院で尙語り續ける。

「で、三宜亭で聞きますとな、愛の野郎は當日お晝過から、東照宮の五重の塔に轉がつて居たんでがすつて。暮か、つてから、のツそり出かけて、くらがり坂に潜んだんだといひますから、巢鴨ぢや、丁どお夏さんが、私と話を居なすつた時でがす。

影も薄し、それ神々しからうぢやありませんか。

又、青柳町で。婆さんが云ふのには、其晩、件の一陣の兇風、砂を捲いて飛んで返つたツ切、

門口は固より臺所へも、廂合の路地へも寄ツつた様子はない、お夏さんも二日たつて、其日の午過ぎ湯に行くまで、何處も出なかつたといふんですから、白薔薇と、平打の簪とで、生命がけ

の相談、定子を殺さう、と一人は、一人は定子になつて殺されようといふのが極つて、打合せもしないで兩方とも立派に覺悟をして出かけたばかりか、とう／＼眞ものにしてつた。

生命を輕んずること鴻毛の如く、約を重んずること鼎に似たり。とむづかしくいへばいふもの、何の事はがあせん、人殺しの飯事だ。

が、又此の飯事が、先生、あの二人でなくツちや、英雄にも豪傑にも、志士仁人にも、狂人も、馬鹿にも出来ない、第一あなたにも私にも出来ません。

何の出来ずとも事だけれど。……

と丹平は附加へた。

「私、愛吉が来てからの一件。又當日お夏さんが一寸關戸の邸のもみぢを見て來よう、と……尤もいつか中から行つて見よう、といひながら、出ぎらひな方で行かなかつたのを、お午過ぎに湯から歸ると、一人ですん／＼着ものを着かへた。直近の吾妻コオトなり、頭巾なり。些と歸りが遅いから、氣になつて、婆さん、横町の角まで出て居た處を、私に會つたと云ふんでがせう。さあ、氣になる。私一向遣り放しで、もの事を苦にはせんから、蟲が知らしたといふやうなわけではない。

が何だか、卯之吉の門から俣が行つて了つたのが、なごり惜くつて、今にも其の姿が見たくて

ならぬ。

をかしいね。

何も三年越見なかつた人なり、殊に然ういふ知己の婆さんが在つて見れば、これを次手で、又餘所ながら尋ねられないこともないが、何となく、急に見たい。

其所でがすよ。

茶を入れかへる、といつたのを振切つて出て、大塚の通りから、珍らしく俣を驕ると、道の順で、これが團子坂から三崎町、笠森の坂を向うへ上つて、石屋の角でさ。谷中の墓地へ出たと思ふと、向うから——お夏さん。

些と柄がかはり過ぎた。私、目について居るのは、結綿に鹿の子の切、襟のかゝつた衣に前垂がけで、繪双紙屋の店に居た姿だ。

先刻の文金で襟なしの小袖でさへ見違へたのに、栗鼠のコオトに藍鼠の其の頭巾。然も此の時は被つて居ました。

おまけに、並んで歩行して居るのが、茶の中折で、緋の羽織、粹づくりだけれど、お商賣から、何處か上品に見える、梅岡藥劑でがせう。

私もし、青柳町へ寄らないで、此の體を見ると、いよく尻橋だ。紅葉の下で生血を吸ふ……

ね。

其のなりで。思ひがけない二人づれなり、一寸はお夏さんと見えなけれど、其處は私、通から一目で見取つた、俵を下りて、くらがり坂まであとをつけたですよ。何とも以て残念千萬。や、梅岡さんの方が前へ行つたさうですが。あの石段の上の床几、入口のね、彼處だ。毛氈を敷いて出しているのに腰をかけて、待合はして居たんですがすな。

其處へ柳橋とも、芳町とも、新橋とも、たとへやうのないのが、急いで来て、一所になつた。

紅葉の時だが、マビで、そんなにたて込まず、座敷もあいて居たけれども、上らないで、男はカラカラと高談話。

一室だとちぎぎがしたいなぞと、氣を揉んだ女中が居たさうでさ、茶代が五十錢。

其から連れ立つて、東照宮の方へ行くのを、大勢女中がづらりとならんで騒いで見送つたのは、今しがただ、といつて、三宜亭の主人がな。

奥座敷を閉め込んで、血だらけのコートを脱がした時、目を眠つて居るお夏さんの、艶麗な顔を見て、こりや、薬や繻帯をなさるより、眞綿で包んで密として置く方が可いッて、眞面目に

つた。
尤も夢のやうだといひましたつけ。

先生、私なども、眞と思はん、どうしても夢でがすよ、それが一昨々日の晩だ。」

といつて歎息した。

金之助は惱める右手を袴と抱いて、

「私は却つて、其顔も見ないから、些とも夢のやうに思はれんでなほ困る。幸ひ貴老が見えてか

ら、あの苦しむのが聞えないから……」

「私の其の、御経讀誦が、幾干か功德がありましたもんでがせう。」と、泣くより笑ひといふので

ある。

「あ、何うぞあけ方までに、繰返して、最う一度其の經を誦したまへ、絶えず、念じて下さい。

私も覺えて念じよう。明日、又明後日、明々後日も、幾度も、本尊の前途を見届けるまでは、貴

方は歸さん、誰にも逢はん。」

「宜しい。」

竹永が天井を仰いだ時、金之助も齊しく見たが、例よりは壁が高いと思ふと、電燈がすつと消

えた。

あはれな聲で、

青葉しげれる櫻井の、里のわたりの夕まぐれ、

と廊下で繻帯を巻きながら、唐糸の響くやうに、四五人で交るべく低唱して居た、看護婦たちの聲が、フト途切れたトタンに。

硝子窓へばらくと雨が當つた。

廊下を馳せ違ふ人の蹀音。

二人は呼吸を詰めた。

電燈が直ぐに點いた、其の時顔を見合はせた。

木の下蔭に駒とめて、

と又聞える。

吻と、といきをつく間もなく、此の扉が細目に開いた、看護婦の福崎が、廊下から姿を半ば。

「貴下、お案じなさいました五番の方が、」

二人は肩から氷を浴びて、

「何う、」

「何うした。」

「容子がかはりました。」

「然うか、」

期したりといはむやう、落着いていつて、丹平は椅子を放れる。

と同時である。

「大變だ、」と激くいふと、金之助は寢臺からずると落ちたが、齊く扉から顔を出して、六ツの

目は向、突當りの廊下へ注いだ、と思ふと金之助が身を挺して、少しよろけながら廊下をすたす

たと其方へ行く。後から竹永が續いたので、看護婦も引添うた。

遠山も丹平も心はおなじ、室の外から、蔭ながら、別を惜まうとしたのであつたが。

五番の室の前へ行くと、思ひがけず扉が開いて居たので、思はず兩人、左右の壁へ立ち別れた。

唯見ると哀しき寢臺を圍うて、左の方に、忍び姿で、肅然として山の井醫學士。枕許に看護婦

一人、右に宿直の國手がイんで、其の傍に別に一人、……白衣なるが、其は、窈窕たる佳人であ

つた。

其の背後に附添つたのが、當院の看護婦長。

入口を背にして、寢臺の裾に、ひよろくとして瘦せた、三尺帯は愛吉である。

ト遠山の附添福崎が、靜に室に入つて行つて、二三語を交へたのは、病人に對する金之助の同

情の節を傳へたのであらう。

醫學士の傍に居た看護婦が、一脚椅子を持って出て挨拶をした。

「お掛けなさいまし。」

金之助は辭せず、しかし入りはしないで、廊下へ受取つた時、福崎は急いで遠山の病室へ行つたが、これも椅子を提げて引返して來て、

「お掛けなさいまし。」

と丹平に。自から直ちに遠山の背後に來て、其の受持の患者を守護する。兩人は扉を挟んで、腰をかけた、渠等好事なる江戸ッ兒は、愆くて甘んじて、此の慘憺たる、天女廟の門衛となつたのである。

雨がドツと降つて來た。

しばらくすると、宿直と、看護婦長は、此の室を辭して出た。其の時、後を閉めようとして、こゝに篤志の夜伽のあるのを知つて一揖した。

丹平即ち、外から扉を押さうとすると、

「構ひません、」と聲をかけて目禮をしたのは醫學士山の井光起である。向ひ合つて右の側なる一人の看護婦が、

「宜しうございます。」

といつた、渠は窺察たる佳人であつた。

「いや、御遠慮を申す、御遠慮を申す。」

と丹平は徐に。愆くて自ら自分等を廊下の外に閉め出した。其扉が背を壓するやうな、間近に居たから、愛吉は身動をしたが、愆くても失心の體で、立ちながら、貧乏ゆるぎをぞしたりける。

時に、此處を通り過ぎて、廊下の彼方に欄干のある、螺旋形の段の下り口の處に立ち停つて、宿直醫と看護婦長と、ひそかに額を交へてイんだのが、やがて首を垂れて、段を下りるのが見えた。

同時にそれまで、青葉の歌の聲を留めて、其の二人の密話を傍聞きして取り卷いた、同じ白衣の看護婦三人。宿直の姿が二階を放れて、段に沈むと、すらくと三方へ、三條の白布を引いて立ち別れた。其の集つて居る間、手に、裾に、胸に、白浪の翻るやうだつた、此の縋帯は、欄干に本を留めて、末の方から次第に卷いて寄るのである。

渠等も、お夏の此の容體を今聞いた、無意識にうたひつる、唱歌の聲の、其の身其の身も我知らず、

身の行末をつくと、偲ぶ鎧の袖の上に、

散るは涙か、はた露か、

より低く、より悲しげに、よりあはれに、より多く頭を垂れて、少しづつ、巻き込みながら繰

り寄る縋帯。

遠く廊下に繰る布の、すら／＼亂れて、さまよへるは、こゝに絶えむす玉の緒の幻の絲に似たり
らずや。繫げよ、玉の緒。勿断ちそ細布。

遠山と丹平は、長き廊下の遠き方に、電燈の澄める影に、月夜に霞の漾ふなかに、其の三人の
白衣の乙女。あはれ、魂を迎ふべく、天使來る矣、と憂へたのである。

雨は篠突くばかりとなつた。棟に覆す瀧の音に、青葉の唱歌の途切るゝ時、ハツと皆、こゝに
あるもの八九人、一時に呼吸を返したやうに、お夏の、我に返る氣勢を感じた。

「あゝ、熱、」
驚破と二人。

「何て暑いでせう、私は何うしたの。」

といふのが、耳許にびえた調子で聞えながら、然も幽に、折から風が颯と添つて、次第々々に
大空へ遠く消えて行くやうになつて、又寂とした。

雨は愈々降るのである。時もわかまへずなるまでに、夜は次第に更けるのである。

「愛吉、愛吉、」とお夏が呼んだ。

遠山は面を背けた。

「愛吉、苦しいから殺しておくれ。
しばらくして、

「早くしておくれよ。」

答ふるものはないのである。

「國手、何うすりや、可いの。私は國手の奥さんになりたいの、」
優しい聲で、

「してあげますよ、」といふのが聞えた。

「だつて奥さんがあるんですもの。」

「否、最うありません、貴女に生命を救はれて、山河内の家へ歸りますよ。」

遠山も耳を澄す。

お夏の聲で、

「でも不可いの、私は、愛吉が可愛くって可愛くって、」

廊下の外でもはらくと落涙する。

「可愛くってならないの、だから奥さんになつて殺されたんだわ、何爲こんな暑い、何故熱
いの、私のした事が悪いから、あの、それで、ひどいの、何うすりや可いんですねえ。」

答ふものあらざるを見て、遠山金之助堪へかねたか、炬を踏してつツと入つた。
蓬頭垢面、窮鬼の如き壯俊あり、

「先生！」

と叫んで遠山の胸に縋りついた。

「お嬢さん、貴女が兄さんのやうだとおいひなすつた、新聞社の先生ですよ。」と、未だ全く
其の氣は狂ひ果てなかつた。

金之助、聲高く、

「貴女のしたことは決して間違つた事ぢやありません！」

これに頷く趣に見えたが、

「最う死んでも可ござんす、」といつて、起上らうとするのを彼の看護婦が、密と抱いて、

「否、私が死なせません。」

渠は窈窕たる佳人であつた。此の窈窕たる佳人は、山の井醫學士の夫人定子であることを――

此處で謂はう。

醫學士は衝と進んで、打まかせたやうな、お夏の右手の脈を衝と取つた。

除けよ、とあるので、附添と、愛吉は、山を崩すが如く、氷囊を取り棄てた。醫學士は疾病の

他に、情の炎の人の身を焼き亡ぶことのあるを知つたであらう。

丹平は、其處に掲げられた、體温の表を見て、烈しい地震系を描いた、噴火山のやうなものだ

と思つた。

あはれ、其の胸にかけたる繻帯は、ほぐれて鬚鬚いて、一朶の細き霞の布、曉方の雨上りに、

疵はいえて居たお夏と放れて、眠れる如き姿を残して、搖曳して、空に消えた。

内裏雛の冠して、官女たちと、五人囃子して遊ぶ状を、後に看護婦までも、幻に見たと聞く。

女肩衣

厨の一節

末法救世の大導師法華經の大行者、當七面山の開祖妙像寺日秀が、此の寺の爲に記し残した未
來記の中に××年××月××日……「播古木子花咲く」とあり、果せる哉。

味噌を料理すべき役に當てられたのが、女人形立川綾柳が座中で、君吉といつて一番の年少、
臺所を働くのを、何と間違へたか、餘所行を引張つて、之がために桃色の手巾を前垂がはりにし
て紅の襷かけ、絲のやうな黄金に、眞珠の入つた小さな細い指環を嬉しさうに小指に嵌めた手に
搦粉木を構へたが、凡て駄々を捏ねるといふ身振。一體四谷鹽町鹽煎餅屋の女だけれども、兩親
があつて甘やかして育てたから、すつと姫様で渡らせられ、炊事の業には馴れないので、搦鉢が
前後左右に廻つて、板の間が、がたんがッたん。

「おつと、萬歳樂々々、瓢箪鮓を押へましょ。」と籠の前に立つた姉さん被、中形の浴衣の上へ、
黒七子に劍鳩酸五ツ紋の拾羽織、昨夜茶屋場の由良之助を使ふ時、上下がはりに洒落に着るのだ、
と言つて、折から樂屋へ來合せた情人筋のを奪つたまゝであるのを、恰もどんよりした今日のお

天氣、薄ら寒いのが幸と一着に及んで居る、糸次といふ中年増。
「一寸生捕ります形ぢやあないか、搦鉢と申します者は、お前、そも〜頼朝こゝ時分から活き
て居るものでございまして、板の間では躍りますものでございましてよ。」
「だつてお前さん、仕様がななんだもの。」と君吉は俯向いて笑ひながら、ごし〜、搦粉木に念
を入れると、益々動く。

「感心！搦鉢が棒のさきに附着いて廻るぢやあないか。然う旨くは、爲ようたつて出來ないもの
だ。あゝ見事なこつた、やゝ、やゝ、此の處練磨の手術。」
「厭よ、笑はしちやあ不可ません、何故だらうね、あれさ。」

「どツこい、其處だ。」
「不可ませんよ、あれ。」
「妙々、そら刎上つた、おつと轉んだり、やあく〜廻ります〜、とこまかしてよいとことな。」
と足拍子を踏むと、搦鉢は愈々躍る。

「知りませんよ。」と拗ねたやうに言つて、君吉は眞赤になつた。
糸次は急に眞面目な顔で、
「串戯はよして餘り旨いよ。一寸文福茶釜ツて、こゝもあるしお寺ンだからね、其の搦鉢に魂が入

女肩衣

つたんぢやあるまいか。何うも飛び方が一通でない。羽が生えたのかも知れないよ。氣をお着け、お前さんに惚れたのかも知れない、ね、そら、ガツたり。」

「厭な、姉さん。」と言ふと、丁ど搦鉢に廻されて君吉は後退りになつた處、吃驚したやうに思はず搦粉木を放して、兩手で縁を押へると、發奮に二ツばかり揺れて、やう／＼靜まる。

「東西、恠やういたしましたるが、藝當發端にござります。これより太夫あれなる搦粉木を取上げ、トンと呼吸を入れますれば、搦鉢が自然に動く。先づは、つかず離れず兼合の手元にお目を留められて御覽あらませう、あい、來た。」と可い機嫌、持つてた鐵火箸の長いのを揃へて取直すと、竈の縁を叩いたり。

二

「お君さん、打棄つてお置き。男の五ツ紋を引掛けて釜前を勤めるやうな人に取合つてちや、搦鉢に羽が生える位ぢやあ濟みません。狂人に刃物ツてことがあるが、何の事もない條次に羽織さ。取合つてると怪我をする、恐いよ。」と向うむきになつて組板を控へ、大阪漬を拵へようと、傍目も觸らず働いて居たのが。鐵火箸で竈の縁を叩いた條次の口上に動かされて、今取合ふな、といふ口で、自分が取合すには居られなくなつた、升代といふのが、

「條次身に染みて働かないか。だから謂はないこつちやない。汝のやうな藝人は眞面目に所帯を持ってさうもない。引摺つてばかり居て、方がへしがつきやしまい、とお斷り申したのだ。」と不意に妙なことをいひ出した、然も鼻息の荒い男の聲をするから、條次は呆氣に取られて、君吉と齊しく板前の姉さんを熟と見た。

「すると汝何と謂つた。朝寐も宵張もこんな家業をしてる内は仕方ありません。之が何も藝妓や娼妓といふのぢやあなし、惰怠風が手足に染込んで、筋が弛んだといふわけぢやあないんですから、明日が日お前さんと一所になつて。」

條次は君吉と顔を見合せ、默然になつて怪訝な顔。

「よしんば共稼といふので、私が寄席を罷めないにしても、さうなりや所帯持ですもの、炭にも油にも氣を着けますよ。朝もしら／＼あけから整然と起きて、水を汲んで、釜の下を燃しつけて、米を磨いで、火鉢の掃除をして、鐵瓶を洗つて、水をさして、其をかけて、さあ、其内にご飯がむれると、お香の物を出します。皿小鉢は、晩く歸つたけれども昨夜の内にはちやんと洗つてあるといふもんだから、ほらね、ぐいと一ツ拭巾をかけさへすりや可い、直ぐお膳立が出来ると、それから起すんよ、貴郎、一寸、お前さん。」

「おや、升さんが何うかしたよ。」と果しがなから君吉は又搦粉木に取懸る。條次はらりと、鐵

火箸を提げて横に向いて、

「今に泣出すんだらう。」とうつちやつたやうにいふ。

升さんは委細構はず、

「最う九時ですよ、お前さんと屹といふよ。私が、あ、何うしてお前さんの方が餘程憎けさうだつて謂やあがつたぢやあないか、と面に色を染むるまで流暢に且つ早口に息も吐かないで、条次と其の所謂情人筋なる五ツ紋の羽織の主某と、男女の聲を交ぜに饒舌つたが、一寸句切ると、した、かに氣をかへて大聲に、鋭く、突込んで、

「やい、条！」

「何だね、と条次は吃驚する。君吉も思はず手を留める。と升さん愈々眞面目で、

「其に何だ、最う彼はお晝といふのに、澁々起出しやあがつて、井戸端へでも出ることか、漸々と釜の下を受持つたは可いが、其の形で、ぬうとして、折角働いてる者をつかまへて、突拍子もない播鉢の口上なんか吐し居る、是見な。消えさうになつてるぢやあないか。」

とかさにか、つて壘みかけた升さんが、急にがらりと變り、莞爾して背後向に手を伸ばす、と君吉の背中を丁。

「トまづ遊んだものさ、条次め、理に落ちた顔をして居る。」

「升さん、何、今のは。」

「五ツ紋の言種だよ、お前さんへ、助太刀さ。」

君吉も笑ひ傾き、

「御苦勞様でございました。」と二人ともけろりとする。

「こん畜生。」と条次は躍起となつて火箸をばつたり。

「おつと飛道具。」と升さんは飛上つた、ばたくといふ中へ、本堂の方から靜な蹙音。

三

妙像寺の廚の口へ、先づ半面を出だして勝手の様子を窺つたのは、喜多八といふ彫輕な藝名と、其の麗かな容貌を以て、立川の一座に呼物の若太夫。

名は其の體を表す、此の婦人は至つて内端で優しい、顔立も打上つて品の可い方、氣質も實味で串戯口一つ利かないのであるが、おどけ方の人形に不思議の妙を得て、赤坂並木の北八の如きは、向うへ廻つて彌次で出て居る綾柳さへ、舞臺で思はず微笑むといふ位。

近頃飯倉邊の寄席へ、一座が懸ることになつたが、樂屋の連中は京橋築地あたりに住居があるので、通ふのに足場が悪いからと、都合上此の妙像寺の奥を借りて、女同士煮炊の業も面白半分、

わつといふ中に喜多八は一人、愼深く窮屈さも構はず師匠の傍に附添つて居廻の世話をする。寺の小僧の十八ばかりになる色の白いのが法華經を誦むのを難有がつて日の中普門品を習ひたいといつたと謂ふので、若有女人、設欲求男、喜多八さんは小僧に氣があると、殊の外評判が善くないのである。

渠は恠る境涯の仲間にも、内端に包しやかな物越で、

「条次さん、皆さん御苦勞様でございます。」

「おや、一寸お前さん、まあ此處へ来て御覽なさいよ、大騒ぎだから。」と条次は漸く靜つた。

「大抵ぢやあないのね、濟みません。」

「何う仕りました。」と威勢よく答へて澄して居る。

「あの少しばかり憚り様ですが。」

「はあ、お小僧さん、何の御法要でございますか。」と差出でる升代が、又た厭がるのを知つて人の悪い。

喜多八は苦笑をして、

「何うぞ、其だけはいはないで下さいまし、私は最う。」

「ぱつとして浮名が立つてお悪いなら、畏りました。」 条次が皮肉なり。

喜多八は聞かぬ振、恠る二人に取合つては叶はじと、

「君いちやん御願ひですよ。」

「揺鉢係の可愛いのが、

「何でございます。」と莞爾々々、笑ひながらも、さすがに之は頼母しい。

「あのね、お師匠さんがね、

「は、」

「一寸何なんですよ、あのう、大變にお腹が空いたんですつて、それですから、あのね。」といひ淀む。お師匠さんのこととあるので、増も糸も茶には出來ず、眞顔になつて御上使の面を瞻つたので、喜多八は何か打出し悪さう、我が事でもあるやうに颯と顔を赤らめながら、

「お膳立の出來ますのが待遠いつてんぢやアありませんけれども、何うぞね、おむすびを拵へて下さいましつて。」

「さあ、大變。」

「御覽、だから謂はないこつちやあない。くだらないことを言つて、働くのに身が入らないもんだから、仕様がなないね。」と急に眞面目になつて板前は太く氣を揉む。

衣肩女
条次は顔を擧めながら、釜の前に蹲んで慌しく、

「おうい、井戸端のウ。」と小聲で引張つて呼ばはると、前の井戸端で米を磨いで居た小房といふのが、雫を切つて両手をぶらり、勝手口へ顔を出して、

「何。」

糸次は喜多八を仰いで上目づかひ、米さへ未だしらげ果てざる状を、小房で見せて、ひたと恐縮。

内證々々、御覽の通の體裁。」

葛飾砂子

縁日 柳行李 橋ぞろへ 題目船 衣の雫 浅縁
記念ながら

縁日

一

先年尾上家の養子で橘之助といった名題俳優が、年紀二十有五に満たず、肺を煩ひ、餘り胸が痛いから白菊の露が飲みたいといふ意味の辭世の句を残して憊うなり、眞眞の人々は謂ふまでもなく、見巧者をはじめ、藝人の仲間にも、あはれ梨園の眺め唯一の、白百合一つ萎んだり、聲を上げて惜しみ悼まれたほどのことである。

深川富岡門前に待乳屋と謂つて三味線屋があり、其の一人娘で菊枝といふ十六になるのが、秋も末方の日が暮れてから、つい近所の不動の縁日に詣るといつて出たのが、十時半過ぎ、彼は十時に近く、戸外の人通もまばらになつて、未だ歸つて來なかつた。

別に案ずるまでもない、同町の軒並び二町ばかり洲崎の方へ寄つた角に、浅草紙、束葉、懷爐灰、蚊遣香などの荒物、烟草も封印なしの一錢五厘二錢玉、ばいれつと、ひーろー位な處を商ふ

子砂飾葛

店がある、眞中が抜裏の路地になつて合角に格子戸造の仕舞家が一軒。

江崎とみ、と女名前、何でも持つて来いといふ意氣造だけれども、此の門札は、然る類の者の看板ではない、とみと謂ふのは方違ひの北の廓、京町とやらの然る樓に、博多の男帯を後から廻して、前で挟んで、ちよこなんと坐つて抜衣紋で、客の懷中を上目で見る所謂新造なるもので。

三十の時から二階三階を押廻して、五十七の今年二十六年の間、遊女八人の身拔をさしたと大意張の腕だから、家作などはわがものにして、三月ばかり前までは、出稼の留守を勤め上りの圍物、之は洲崎に居た年増に貸してあつたが、其の婦人は、此の夏、辨天町の中通に一軒引手茶屋の賣物があつて、買つて貰ひ、商賣をはじめたので空家になり、又た貸札でも出さうかといふ處へ娘のお縫。母親の富とは大違ひな殊勝な心懸、自分の望みで大學病院で仕上げ、今では町住居の看護婦、身綺麗で、容色も佳くつて、ものが出来て、深切で、優しいので、寸暇のない處を、近ごろ彼の尾上家に頼まれて、橘之助の病尊に附添つて、息を引き取るまで世話をしたが、多分の禮も手に入る、山そだちは山とか、些と看病疲も出たので、暫く保養をすることにして歸つて来て、丁度留守へ入つて獨で居る。菊枝は前の圍者が居た時分から、縁あつて一寸々遊びに行つたが、今のお縫になつても相變らず、……屹とだと、兩親が指圖で、小僧兼内弟子の彌吉といふのを迎に出すことにした。

「菊枝が毎度出ましてお邪魔様でございます、難有う存じます。それから菊枝に、病氣揚句だ、夜更しをしては宜くないからお歸りと、恚う言ふのだ。汝またかりん糖の假色を使つて口上を忘れるな。」

坐睡をして居たのか、寢惚面で承るとむつくと立ち、おつと合點お茶の子で飛出した。わつしよいくと謂ふ内に駆けつけて、

「今晚は。」といふと江崎が家の格子戸をがらりと開けて、

「今晚は。」

時に返事をしなかつた、上框の障子は一枚左の方へ開けてある。取附が三疊、次の間に灯は點いて居た、彌吉は土間の處へ突立つて、委細構はず、

「へい毎度出ましてお邪魔様でございます、難有う存じます。え、菊枝さん、姉さん。」

二

「菊枝さん、」と又た呼んだが、誰も返事をするものがない。

立續けに、

「遅いから最うお歸りなさいまし、風邪を引くと不可ません。」